

高岡町埋蔵文化財調査報告書第30集

ながさこ
永迫第1遺跡

県営ふるさと農道緊急整備事業（小山田地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書4

2004. 3

宮崎県高岡町教育委員会

永迫第1遺跡正誤表

頁	行	誤	正
12	20	丘陵先端部の	丘陵先端部に
50	4	N30	N29
102	1	貝殻復縁連続刺突文	貝殻腹縁連続刺突文

高岡町埋蔵文化財調査報告書第30集

ながさこ
永迫第1遺跡

県営ふるさと農道緊急整備事業（小山田地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書4

2004. 3

宮崎県高岡町教育委員会

序 文

この報告書は、県営ふるさと農道緊急整備事業に伴い、平成13年度から14年度にかけて実施した、永迫第1遺跡における埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

この調査により、後期旧石器時代から縄文時代にかけての遺構や遺物などが検出され、南九州の当時の歴史を解明するうえで多大な成果をあげることができました。

この発掘調査で明らかにされたものは、先人が残した私たちの文化遺産であり、これらの成果を活かすことが、我々に課せられた重大な責務と考えております。本書が町内に所在する文化財の保存に役され、また本町の学術資料として学校教育、社会教育などに幅広く活用頂ければ幸いに存じます。

尚、発掘調査を実施するにあたり、関係各者より頂いたご指導とご協力に対し、心から感謝を申し上げます。

平成16年 3月

高岡町教育委員会

教育長 中山 芳 教

例 言

- 1 本書は、県営ふるさと農道緊急整備事業に伴い、2001年度・2002年度（平成13・14年度）に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告である。
- 2 黒耀石及びサヌカイトの産地同定は藁科哲男氏（京都大学原子炉実験所）に依頼し、分析結果は本書「第IV章 分析」に掲載させていただいた。ただし、姫島産黒耀石については、廣田の肉眼観察による判断とした。その他の石材については、その鑑定を宍戸章氏（南九州大学非常勤講師）に依頼した。
- 3 テフラ分析、植物珪酸体分析、リン・カルシウム含量分析、土壌分析は、株式会社古環境研究所に委託した。
- 4 現場における測量・実測作業の一部及び、整理作業に伴う遺物分布図作成は、(有)ジバング・サーベイに委託した。
- 5 石器の実測については、その一部を株式会社九州文化財研究所に委託し、その他の石器及び土器の実測は、伊藤栄二、松本安紀彦、 （高岡町教育委員会）の協力を得て行なった。
- 6 永迫第1遺跡の遺跡番号は315で、第2地点は31502、第3地点は31503とする。出土遺物は高岡町教育委員会に保管している。遺物の注記は、「遺跡番号－土層番号－遺物取上番号」を基本とし、収蔵番号については、「報告書シリーズ番号＋報告書内遺物番号」としている。
- 7 本書の執筆は、土器を島田がその他（第IV章を除く）及び編集は、廣田がおこなった。

凡 例

- 1, 遺物分布図中の遺物間の接合関係は結線で示した。石器は剥離の順番を下記の要領で示した。
新しい剥離 —>— 古い剥離
同時の剥離 —+—
- 2, 石器実測図中のスクリーントーンは磨痕を示す。また、実測図中の斜線は節理面である。
- 3, 法量の単位はcm（最大長・最大幅・最大厚）とg（重量）である。
- 4, 流紋岩・ホルンフェルスについては表11に示すとおり細分を行っているが、石材の判定が困難であり、現在も調査中である。そのため、本文中で一括して表すとき、「流紋岩系」と表記した。

目次

本文目次

第I章	はじめに	9
第1節	調査の経過	9
第2節	遺跡の環境	10
第3節	遺跡の立地と遺物分類	13
第II章	第2地点の調査	16
第1節	IX層の調査	19
第2節	V・VI層の調査	52
第3節	III・IV層の調査	55
第4節	II層の調査	87
第III章	第3地点の調査	92
第1節	IX層の調査	94
第2節	V・VI層の調査	96
第3節	III・IV層の調査	100
第4節	II層の調査	105
第IV章	自然科学分析	121
第1節	永迫第1遺跡出土の黒耀石・サヌカイト製遺物の原材産地分析	121
第2節	永迫第1遺跡の土層とテフラ	146
第3節	永迫第1遺跡第2地点における植物珪酸体分析	155
第4節	永迫第1遺跡第2地点における蛍光X線分析（リン・カルシウム含量分析）	167
第5節	永迫第1遺跡の陥し穴遺構における霧島小林軽石について	169
第V章	まとめ	172

挿図目次

第1図	遺跡分布図	11	第7図	IX層遺物分布図（流紋岩系、器種別）	21
第2図	遺跡周辺地形図	14	第8図	IX層遺物分布図（流紋岩系、接合資料1）	22
第3図	第2地点周辺地形図	16	第9図	IX層遺物分布図（流紋岩系、接合資料2～12）	23
第4図	第2地点土層断面図	17～18	第10図	IX層遺物分布図（流紋岩系、接合資料13～25）	24
第5図	土層柱状図	17～18	第11図	IX層遺物分布図（流紋岩系、重量別）	25
第6図	IX層遺物分布図	20	第12図	IX層遺物分布図（黒耀石、器種別）	26

第13図	IX層遺物分布図（礫石器、器種別）……27	第49図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図……………75
第14図	IX層遺物分布図（礫、重量別）……………28	第50図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（石器ブロック外、 石材別）……………76
第15図	IX層遺物実測図（流紋岩系、ナイフ形石器 および未製品）……………31	第51図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（石器ブロック外、 器種別）……………76
第16図	IX層遺物実測図（流紋岩系、単体2） ……32	第52図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図（石器ブロック外） ……77
第17図	IX層遺物実測図（流紋岩系、単体3） ……33	第53図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図（石器ブロック外） ……78
第18図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1） ……35～36	第54図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（石器ブロック内、 石材別）……………80
第19図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1） ……37	第55図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（石器ブロック内、 桑ノ木津留産黒耀石器種別）……………80
第20図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1） ……38	第56図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（石器ブロック内、 瑪瑙器種別）……………81
第21図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1） ……39	第57図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（石器ブロック内、 その他の石材器種別）……………81
第22図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1） ……40	第58図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図（石器ブロック内、 桑ノ木津留産黒耀石製）……………82
第23図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1） ……41	第59図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図（石器ブロック内、 瑪瑙製）……………83
第24図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1） ……42	第60図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図（石器ブロック内、 その他の石材）……………84
第25図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料2～4） ……43	第61図	Ⅱ層遺構配置図・遺物分布図……………88
第26図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料5～8） ……45	第62図	Ⅱ層遺物分布図（土器）……………89
第27図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料9～12） ……46	第63図	Ⅱ層遺物分布図（石器器種別）……………89
第28図	IX層遺物実測図（流紋岩系、接合資料13～25） ……47	第64図	Ⅱ層遺物実測図 ……90
第29図	IX層遺物実測図（黒耀石・砂岩） ……49	第65図	Ⅱ層遺物実測図 ……91
第30図	Ⅵ層遺構実測図 ……52	第66図	第3地点周辺地形図 ……92
第31図	Ⅴ・Ⅵ層遺構配置図・遺物分布図 ……53	第67図	第3地点土層断面図 ……93
第32図	Ⅴ・Ⅵ層遺物実測図……………54	第68図	IX層遺構配置図・遺物分布図……………94
第33図	Ⅲ・Ⅳ層遺構配置図・遺物分布図 ……56	第69図	IX層遺構実測図 ……95
第34図	ⅣC～Ⅴ層検出遺構配置図 ……57	第70図	IX層遺物実測図 ……95
第35図	ⅣC～Ⅴ層遺構実測図 ……58	第71図	Ⅵ層遺物分布図（石器器種別）……………97
第36図	ⅣC～Ⅴ層遺構実測図 ……59	第72図	Ⅴ層遺構配置図・遺物分布図……………97
第37図	ⅣC～Ⅴ層遺構実測図 ……60	第73図	Ⅴ層遺構実測図 ……98
第38図	ⅣC～Ⅴ層遺構実測図 ……61	第74図	Ⅴ・Ⅵ層遺物実測図……………99
第39図	Ⅳ層上～Ⅳa層検出遺構配置図……………63	第75図	Ⅲ・Ⅳ層遺構配置図・遺物分布図……………100
第40図	Ⅳ層上～Ⅳa層遺構実測図……………64	第76図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（土器）……………101
第41図	Ⅳ層上～Ⅳa層遺構実測図……………65		
第42図	Ⅳ層上～Ⅳa層遺構配置図……………66		
第43図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（前平式土器） ……70		
第44図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（押型文土器） ……70		
第45図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（平椀・塞ノ神式土器） ……71		
第46図	壺形土器出土状況 ……72		
第47図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図……………73		
第48図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図……………74		

第77図	Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（石器器種別）……101	第94図	M26グリッドにおける植物珪酸体分析 ……164
第78図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図 ……103	第95図	K27グリッドにおける植物珪酸体分析 ……164
第79図	Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図 ……104	第96図	J22グリッドにおける植物珪酸体分析 ……164
第80図	Ⅱ層遺構配置図・遺物分布図 ……105	第97図	1号土坑における植物珪酸体分析 ……165
第81図	Ⅱ層遺構実測図 ……106	第98図	2号土坑における植物珪酸体分析 ……165
第82図	Ⅱ層遺物分布図（土器） ……107	第99図	3号土坑における植物珪酸体分析 ……165
第83図	Ⅱ層遺物分布図（石器器種別） ……107	第100図	4号土坑における植物珪酸体分析 ……165
第84図	Ⅱ層遺物実測図 ……108	第101図	5号土坑における植物珪酸体分析 ……166
第85図	黒耀石原産地 ……123	第102図	6号土坑における植物珪酸体分析 ……166
第86図	サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地 ……123	第103図	7号土坑における植物珪酸体分析 ……166
第87図	K28グリッド土層柱状図 ……154	第104図	8号土坑における植物珪酸体分析 ……166
第88図	J22グリッド土層柱状図 ……154	第105図	土器内土壌（139・変形撚糸文）における植物珪酸体分析 ……166
第89図	I25グリッドⅣ層石器集中地点土層柱状図 ……154	第106図	永迫第1遺跡第2地点におけるリン・カルシウム含量 ……168
第90図	工食用路頭土層柱状図 ……154	第107図	調査地域の略図 ……169
第91図	K28グリッド火山ガラス比ダイヤグラム ……154		
第92図	J22グリッド火山ガラス比ダイヤグラム ……154		
第93図	土坑遺構試料火山ガラス比ダイヤグラム ……154		

表 目 次

表1	Ⅸ層出土石器・礫層別出土点数 ……29
表2	Ⅸ層出土石器・礫層別重量 ……29
表3	Ⅸ層礫属性表 ……30
表4	Ⅸ層出土石器組成表 ……50
表5	Ⅸ層接合資料組成表 ……51
表6	包含層礫属性表 ……68
表7	集石遺構内礫属性表 ……68～69
表8-1	ブロック外石器組成表 ……85
表8-2	ブロック内石器組成表 ……86
表9	土器観察表 ……109～112
表10	石器観察表 ……113～119
表11	石材分類表 ……120
表12-1	各黒耀石の原産地における原石群の元素比と標準偏差 ……129～131
表12-2	黒耀石製遺物群の元素比と平均値と標準偏差 ……131～132
表13	九州西北地域原産地採取原石が各原石群に同定される割合の百分率（%） ……136
表14-1	各サヌカイト（安山岩）の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差 ……133～134
表14-2	原産地不明の組成の似たサヌカイト（安山岩）製遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差 ……134～135
表15	永迫第1遺跡出土黒耀石製石器、剥片の元素比分析結果 ……136～140

表16	永迫第1遺跡出土安山岩(サヌカイト)製遺物の元素比分析結果	140
表17	永迫第1遺跡出土の黒耀石製遺物の原材産地推定結果	141~145
表18	永迫第1遺跡出土の安山岩製遺物の原材産地推定結果	145
表19	テフラ検出分析結果	152
表20	火山ガラス比分析結果	153
表21	屈折率測定結果	153
表22	永迫第1遺跡第2地点における植物珪酸体分析結果	161~163
表23	永迫第1遺跡第2地点における蛍光X線分析結果	168
表24	Kr-Kbを含む黒色部分と褐色部分の炭素・窒素含量及びC/N	170
表25	報告書登録抄	195

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景	175
図版2	第2地点土層、第2地点IX層遺物出土状況	176
図版3	第2地点3号土坑、8号土坑、III層礫出土状況、IV層石器ブロック遺物出土状況	177
図版4	第3地点VIII層以下土層、10号礫群中心部、22号土坑、23号土坑	178
図版5	第4章第5節写真	179
図版6	遺物写真(石材)	180
図版7	第2地点11・13号土坑、4号集石、第3地点10号礫群	181
図版8	第2地点尖頭器出土状況、壺形土器出土状況、1号土坑、2号土坑、4号土坑	182
図版9	第2地点5号土坑、6号土坑、12号土坑、14号土坑、15号土坑、1号集石	183
図版10	第2地点2号集石、3号集石、6号集石、7号集石、8号集石、9号集石	184
図版11	第3地点VI層遺物出土状況、Vb層遺物出土状況、IV層遺物出土状況、24・25号土坑、 26号土坑、27号土坑	185
図版12	遺物写真	186
図版13	遺物写真	187
図版14	遺物写真	188
図版15	遺物写真	189
図版16	遺物写真	190
図版17	遺物写真	191
図版18	遺物写真	192
図版19	遺物写真	193
図版20	遺物写真	194

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査の経過

1 調査経緯

遺跡は、宮崎県東諸県郡高岡町大字小山田3031番地外に所在する。調査の契機は、まず、平成11年2月に文化財の有無についての問い合わせがあった。そして同年4月に、ふるさと農道建設に伴う仮設道の設置について、宮崎県中部農林振興局（以下県振興局）と町教育委員会とで、埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行なわれた。その中で全体計画が示され、仮設道も含めて周知の遺跡にかかることから、路線内の分布調査を実施することとなった。5月に町教育委員会が宮崎県教育委員会文化課（以下県文化課）立ち会いのもと分布調査を行ない、さらに6月29日から7月15日で確認・試掘調査を行ない、8遺跡14箇所遺跡の保存状況が良好であることがわかった。その結果をもとに7月末から8月にかけて県振興局、高岡町農村整備課、県文化課、町教育委員会とで協議を行った。その結果、永迫第1遺跡の調査を行なうこととなった。

調査期間は、永迫第1遺跡第3地点が平成12年10月16日～12月26日、第2地点が平成13年6月12日～9月9日、10月23日～12月21日、平成14年1月7日～3月20日である。

2 調査組織

調査主体 高岡町教育委員会

調査

2000年度（平成12年度）

教育長	中山 芳教
社会教育課長	四位 行治
社会教育課長補佐	梅元 利隆（12月まで）
文化財係長	黒木 敏幸（12月まで） 島田 正浩（1月から）
主 査	島田 正浩（12月まで）
主 事	廣田 晶子
嘱 託	西 慶喜

整理

2002年度（平成14年度）

教育長	中山 芳教
社会教育課長	小岩崎 正
文化財係長	島田 正浩
主 事	廣田 晶子
嘱 託	松本安紀彦 伊藤 栄二

調査

2001年度（平成13年度）

教育長	中山 芳教
社会教育課長	赤池 敏寛
文化財係長	島田 正浩
主 事	廣田 晶子
嘱 託	松本安紀彦

報告

2003年度（平成15年度）

教育長	中山 芳教
社会教育課長	小岩崎 正
文化財係長	島田 正浩
主 事	廣田 晶子

また、調査を実施するにあたり、地権者の方をはじめ関係各位のご理解とご協力を頂いた。また、発掘調査から整理報告に至るまで、多く方のご指導・ご助言を得ている。記して深謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

橘昌信(別府大学教授)、上田耕・雨宮瑞生(知覧町教育委員会)、下山覚・鎌田洋昭(指宿市教育委員会)、永野達郎(喜入町教育委員会)、杉原敏之(福岡県教育庁)、岩永哲夫・藤木聡・松本茂(宮崎県埋蔵文化財センター)、乗畑光博(都城市教育委員会)、秋成雅博(清武町教育委員会)、金丸武司(田野町教育委員会)、阿部敬(東京大学院生)

第2節 遺跡の環境

1 地形的環境

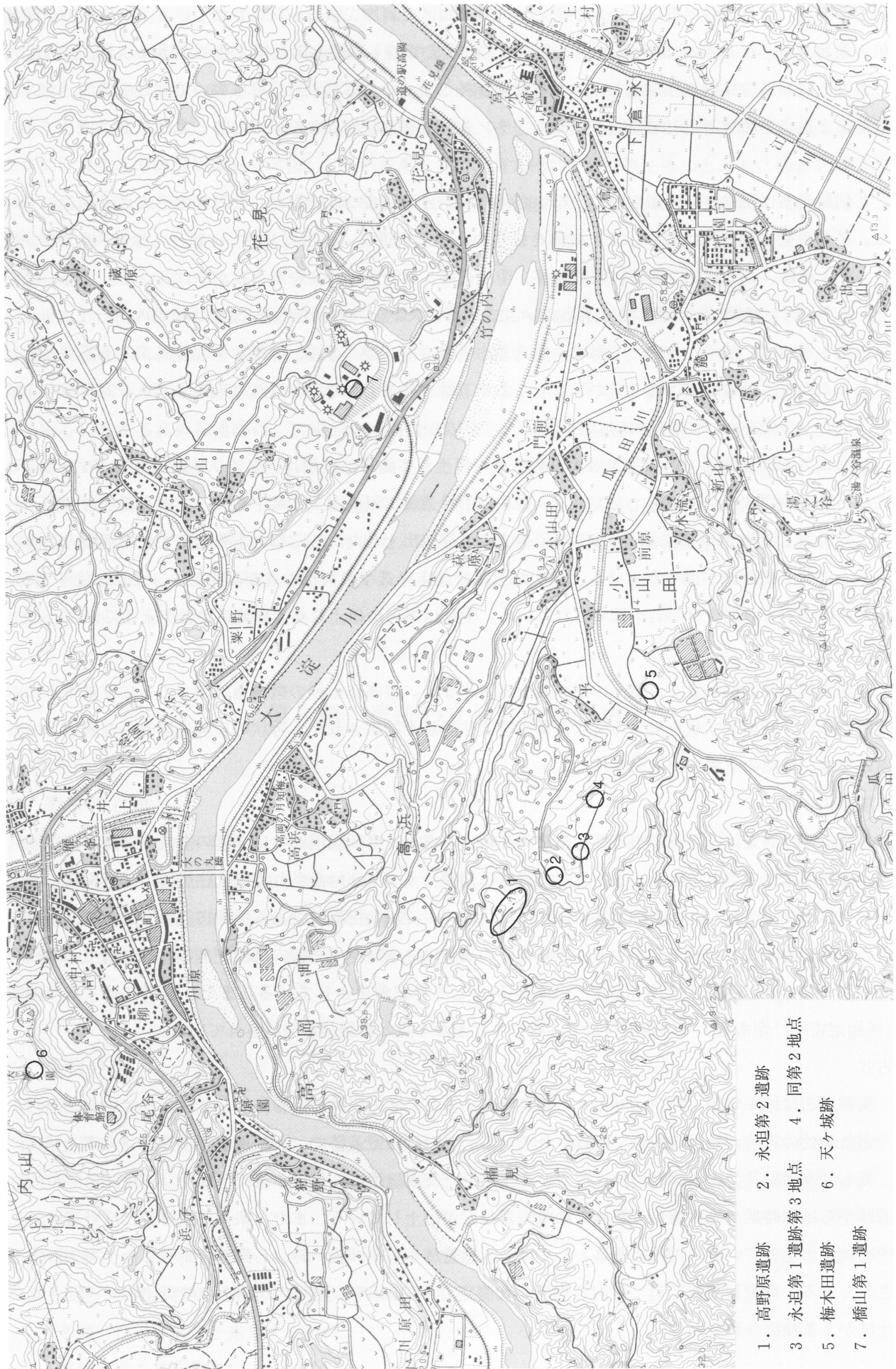
高岡町は山林が70%以上を占める。その町中央を蛇行しながら大淀川が東流し、それによって形成された河岸段丘からその東側に広がる宮崎平野を一望できる。この大淀川に起因する自然環境が大きく人々の生活を左右していたことはいうまでもなく、しかるに歴史的要因にも導かれていた。遺跡は大淀川南岸に形成されたもっとも古いと考えられる河岸段丘上にある。その南側は高岡山地が広がる。高岡町の地形について合原敏幸氏⁽¹⁾は「高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄武岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内之八重付近の砂岩頁岩互層中には塩基性岩類に伴って、厚さ1m～2mのチャートが見られる。高岡山地西部には、古第三紀の四万十累群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白亜紀の層に接している。高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四万十累層群を傾斜不整合の覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の礫、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる始良噴出物、及び主に礫、砂シルトからなる沖積層がみられる。段丘堆積物、始良火山噴出物は急傾斜とその上の広い平坦面や暖斜面から形成される台地状の地形を有している。沖積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。」(高岡町埋蔵文化財調査報告書12集より抜粋)としている。

(1) 高岡町役場 職員

2 歴史的環境

旧石器時代

遺跡の多くは台地あるいは河岸段丘上で確認されている。町内最古の遺跡は、高野原遺跡第4地点と永迫第2遺跡である。そのうち高野原遺跡では、9層(始良Tn火山灰下位)から、88点中58点の接合資料を持ちスクレイパーや石核など含む石器群と、日東産黒耀石製ラウンドスクレイパー1点からなる石器群とが出土した。始良Tn火山灰上位の遺跡としては、向屋敷遺跡で礫群(報告原文では集石遺構)とともにナイフ形石器やスクレイパーが出土した。五女木産黒耀石製の剥片も確認されている。高野原遺跡第1・2地点でも、層位的に不安定ながらナイフ形石器、スクレイパーといった始良Tn火山灰上位の遺物の



- 1. 高野原遺跡
- 2. 永迫第2遺跡
- 3. 永迫第1遺跡第3地点
- 4. 同第2地点
- 5. 梅木田遺跡
- 6. 天ヶ城跡
- 7. 橋山第1遺跡

第1図 遺跡分布図

出土がある。また、野尻町に近い大字浦之名一里山地区で剥片尖頭器が採集されている。同地区の小田元第2遺跡では、始良Tn火山灰直上から細石刃文化期までの4時期の旧石器文化層が確認され、高岡町内における旧石器時代編年作業にとっても重要な資料となった。細石刃石器群についてはこのほか、高野原遺跡第2地点で船野型細石刃核あるいは同ブランクかと考えられるものが1点出土する。

縄文時代

草創期資料は現時点では知られていないが、早期から晩期までは連綿とした遺跡の形成が確認されている。早期の発掘調査例は多く、天ヶ城跡をはじめ、宗栄司遺跡、久木野遺跡（1区～4区）、橋山第1遺跡、橋上遺跡、八久保第2遺跡、榎原遺跡、中原遺跡、的野遺跡、高野原遺跡が挙げられる。土器の様相をみると、天ヶ城跡では、押型文土器と桑ノ丸式土器が大半を占め、その両者の折衷土器も出土している。橋山第1遺跡は、前平、吉田、下剥峰、桑ノ丸、平楯、塞ノ神、苦浜、押型文等の各型式の土器が出土した。また、久木野遺跡では轟1式がアカホヤより下層から出土した。各遺跡の遺構は、集石遺構が中心で掘り込みや柱穴をもつ住居は現時点では検出していない。

前期は久木野遺跡第1区で包含層から轟B式が出土している。中期は同じく久木野遺跡で春日、大平、岩崎下層の各型式のものが出土している。後期は的野遺跡で阿高系・岩崎下層式、綾式土器などが出土した。橋山第1遺跡では阿高系の土器や疑似縄文の土器が出土した。さらに久木野遺跡では円形堅穴住居跡とともに北久根山式が出土している。城ヶ峰遺跡では市来式や北久根山式が出土した。また、山子遺跡、赤木遺跡等でも該期資料が若干採集されている。晩期は黒色磨研土器が学頭遺跡から出土している。

弥生時代

後期資料の調査例が多く、前～中期の調査例は少ない。標高15m程の微高地状のところに位置する学頭遺跡からは、断面V字状を呈する溝状遺構や堅穴住居跡が検出された。舌状の丘陵先端部の位置する的野遺跡では、後期の土壙墓が検出された。

古墳時代

集落遺跡の調査は八兄遺跡や高岡麓遺跡第5地点がある。高岡麓遺跡では2軒の堅穴住居跡が検出され5世紀中頃に比定されている。また、八兄遺跡は側壁にカマドが付設された堅穴住居跡（7世紀代）などが12軒以上検出された。両遺跡とも標高がほぼ同じで大淀川の氾濫源である低地に位置しており、該期集落の一端をみる事が出来る。次に、墳墓遺跡の調査は久木野地下式横穴墓群がある。これまで4基の調査がおこなわれ、人骨とともに鉄斧や玉類が出土し6世紀前半としている。また、町内には3基の円墳（県指定古墳）がある。その古墳付近で、耕作中に壺が2点と鉄製品が発見されている。

古代

高岡周辺は浄平年間（931～938年）の和名抄によると、その当時は「穆佐郷」といわれていた。それより遡る時代の遺跡が最近の調査で確認されている。一つは蕨野遺跡で、大淀川北岸の丘陵（大字花見）に位置し、9世紀後半の土師器の椀、皿などを生産した焼成遺構が6基以上検出された。三生江遺跡や的野遺跡からは同時期の越州窯系青磁椀や緑釉陶器などが出土している。また、宗栄司遺跡や二反野遺跡で土師器椀が出土している。古代の墳墓としては、八兄遺跡から胡洲鏡、鈴、石鍋等を副葬した土壙墓が検出されている。高野原遺跡では、放射性炭素年代測定でAD1040年の暦年代が埋土中の炭化物で確認された土坑が1基検出されている。

中世

建久図田帳によると高岡は、12世紀には「島津庄穆佐院」といわれていた。その後、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の対立を迎える。その中心となったのが穆佐城である。穆佐城は足利尊氏が九州の拠点としたことから始まる。その後、島津久豊・忠国の居城、そして伊東氏48城のひとつとなっていく。平成3年には穆佐城の縄張り調査を実施し、その成果として、南九州特有の特徴をもつとともに機能分化のみられる山城であることがわかった。そのような中で、穆佐城周辺の大淀川沿いにも小規模な山城が点在し、戦国時代から近世へと移っていく。

近世

中世までは高岡の中心地は穆佐城周辺だったのに対して江戸の時期になると天ヶ城周辺に一変する。鹿児島藩は、天ヶ城と穆佐城の裾地に多くの郷士を移住させ麓を形成させた。そして、綾、倉岡とともに関外四ヶ郷として、特に高岡郷はその中心として鹿児島藩の東方の防衛の要として発展する。高岡の地頭仮屋を中心に広がる高岡麓遺跡は、計画的な街路設計がなされ、郷士屋敷群と町屋群に分割されている。調査はすでに12箇所以上で実施され、町屋を調査した第1地点では大火跡と思われる焼土層の下から素堀の井戸や土坑を検出した。さらに、第5地点では郷士屋敷群の一角を調査し建物跡や陶磁器類を検出、第8地点では武家門の下部構造を明らかにさせた。既刊の近世期の発掘調査は高岡麓遺跡だけに留まっているが、道路脇などにある石塔類からも当時の状況を知ることができる。今後報告書刊行予定であるものの上倉永の八反田・川子地区墓地群がある。

第3節 遺跡の立地と遺物分類

1 遺跡の立地

高岡町内には大淀川が東流し、その南岸には河岸段丘が広がっている。永迫第1遺跡は、この河岸段丘のうち最古段階の段丘上に位置し、標高は約72mである。河岸段丘は小規模な河川によって開析され、永迫第2遺跡を挟んで北西側の丘陵上に高野原遺跡、南東側丘陵上に永迫第1遺跡がある（第2図）。

永迫第1遺跡、永迫第2遺跡、高野原遺跡第4地点は、土層の堆積が安定しておりほぼ同様の堆積状況を示す。

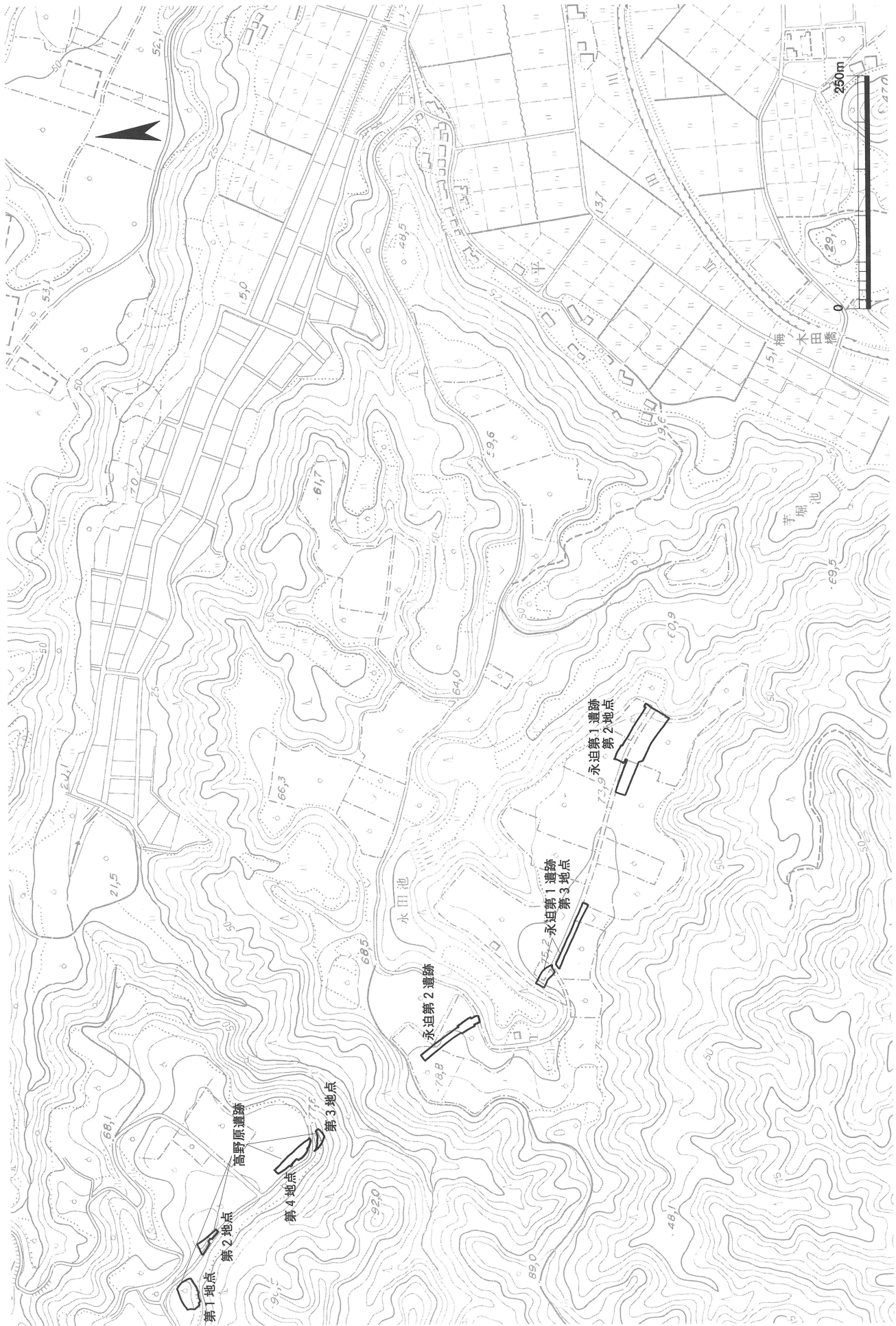
2 遺物分類

縄文土器について

出土土器のうちⅢ・Ⅳ層出土分は、下記に示すように、貝殻文、条痕文、押型文、無文、その他に分類し、さらにそれぞれで細分した。なお、前期以降と思われるものは、量的に希薄なため、分類を行っていない。

押型文

- I類 山形押型文を施文するもの。
- II類 楕円押型文を施文するもの。
- III類 撚糸文を施文するもの。



第2図 遺跡周辺地形図

Ⅳ類 縄文を施文するもの。

貝殻文・条痕文

Ⅰ類 前平式

口縁部が直行し上端部に貝殻もしくはヘラ状工具で連続刺突文を巡らせるもの。

Ⅱ類 平椀・塞ノ神式を主とするもので、下記の通り細分する。

1 口縁部に連続刺突を施した隆起帯を巡らすもの。

2 口縁部が肥大して断面三角形を成すもの。

3 口縁部や体部に沈線文や刺突文を施すもの。

4 小さな連続刻目を施した微隆起帯を巡らすもので椀ノ原式に相当する。

5 体部に撚糸文を施すもので、網目状に撚糸を施文するものや撚糸文を縦方向に施文するものがある。

6 口縁部や体部に貝殻連続刺突文を施すもの。

7 その他

Ⅲ類

口縁部内外面に横方向の条痕を施す。中原式に類似する。

Ⅳ類

内外面にランダムな条痕文を施す。口唇部は刻目を施す。

その他

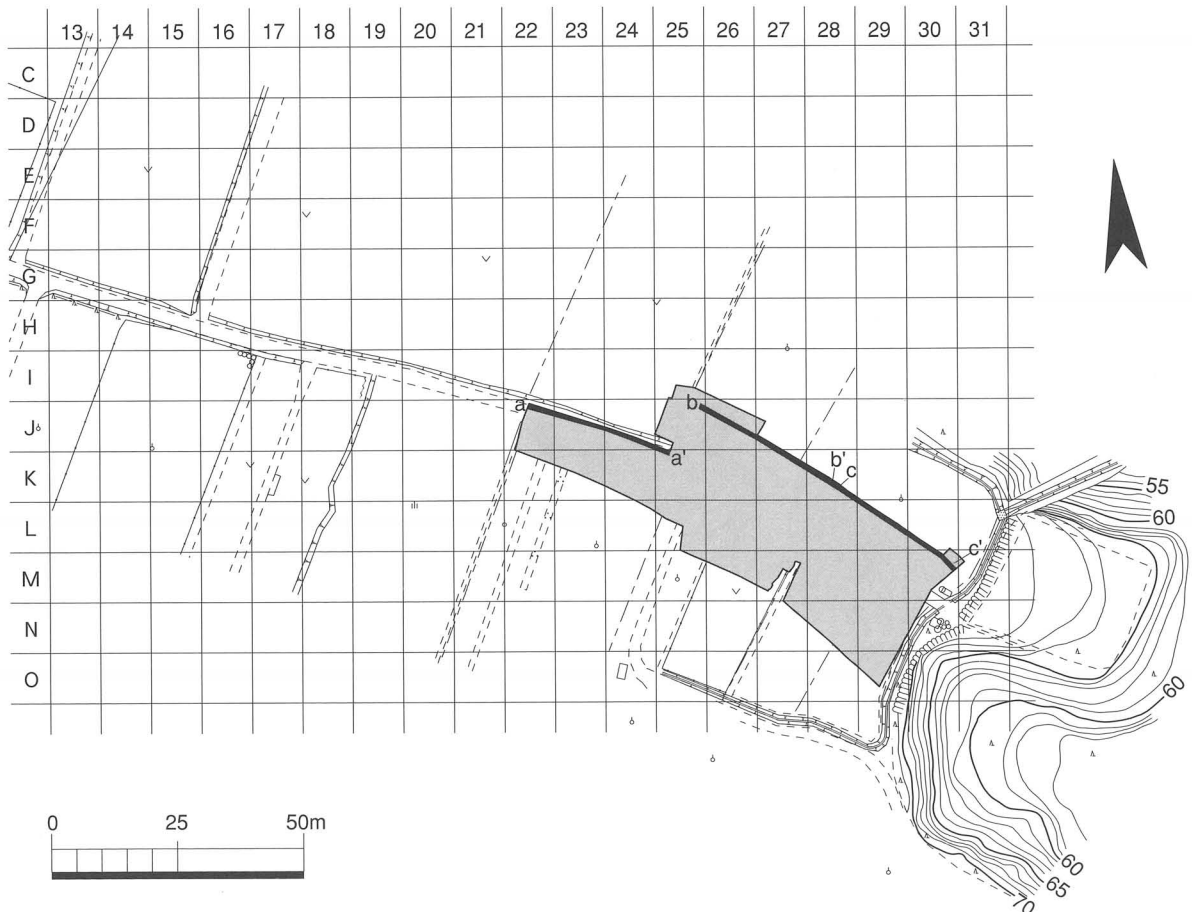
無文

第Ⅱ章 第2地点の調査

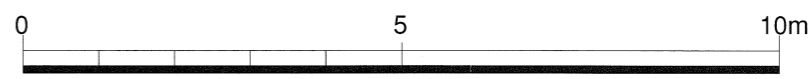
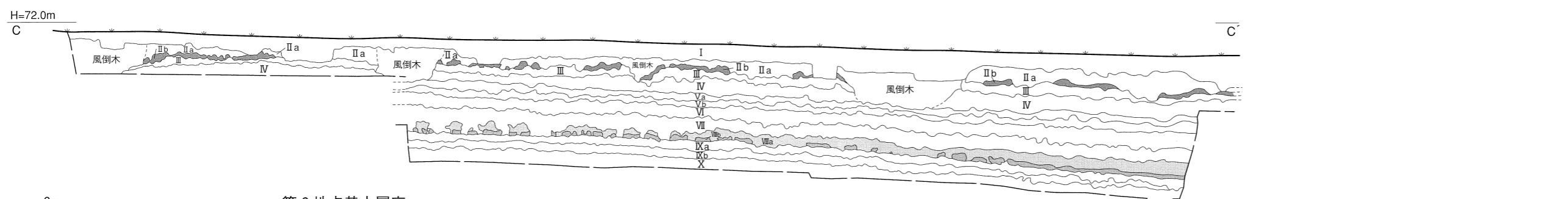
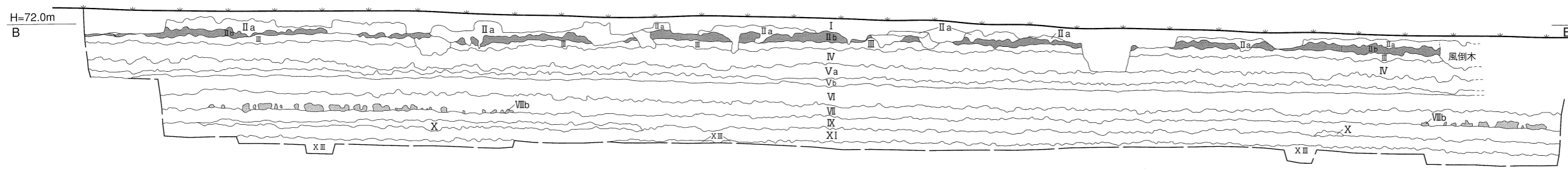
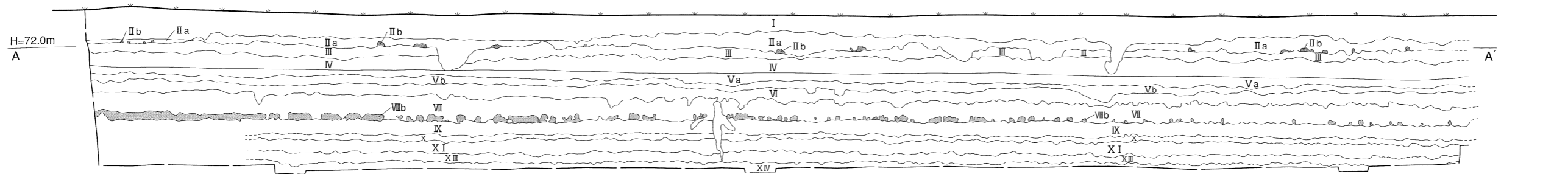
第2地点は丘陵の南東縁辺部にあたり、地形は、南東に向かって緩やかに下り傾斜する。堆積状況は良好である（第4図）。

調査の結果、下記の四文化層が確認された。

時期	火山灰	遺構	遺物
縄文前期（Ⅱ層）			轟式土器
	アカホヤ火山灰		
縄文草創期～早期 （Ⅲ・Ⅳ層）		土坑21基、集石遺構7基 石器製作址	前平式、平椀・塞ノ神式、 押型文土器 帖地型石鏃・尖頭器
後期旧石器時代後半 （Ⅴ・Ⅵ層）	小林軽石		
	始良Tn火山灰		
後期旧石器時代前半	始良深港火山灰 始良大塚火山灰	石器製作址	ナイフ形石器



第3図 第2地点周辺地形図



0m	I
	II a
	II b
	III
1	IV
	V a
	V b
	VI
2	VII
	VIII a
	VIII b
	IX a
	IX b
3	X
	X I
	X II
	X III
	X IV

第2地点基本層序

- I層：表土（黒褐色Hue2.5Y3/2）
- II a層：アカホヤ火山灰二次堆積層（黄褐色Hue10YR5/6）しまりなし。粘性なし。
- II b層：アカホヤ火山灰層（明褐色Hue10YR6/8）
- III層：牛のすねローム層（黒褐色Hue10YR3/1）粘性なし。比較的しまりあり。5mm大の明黄褐色粒（Hue10YR7/6）を多く含む。
- IV層：褐色土層（灰黄褐色Hue10YR4/2）粘性なし。しまり弱。5mm大の明黄褐色粒（Hue10YR7/6）をまばらに含む。厚さ30~50cm。
- V層：小林軽石混土層 V a層・V b層に分層できる。
 - V a層—小林軽石混黒褐色土層（灰黄褐色Hue10YR4/2）小林軽石を含む黒色ブロック状の火山灰（黒褐色Hue10YR3/1）とIV層類似土が混じる。粘性なし。
 - V b層—小林軽石混褐色土層（黄褐色Hue10YR5/4）小林軽石を含む白色ブロック状の火山灰（黄褐色Hue10YR5/4）とVI層類似土が混じる。粘性なし。
- VI層：明褐色粘質土層（にぶい黄褐色Hue10YR5/4）水分を多く含む。粘性あり。しまり弱。1~1.5mm大の黒色粒を所々に含む。
- VII層：始良Tn火山灰風成層（暗灰黄色Hue2.5Y5/2）粘性なし。しまり良。5~10mm大の明黄褐色粒（Hue10YR6/8）を多く含む。
- VIII層：始良Tn火山灰層 VIII a層・VIII b層に分層できる。
 - VIII a層—明黄褐色Hue2.5Y6/8 火山灰粒（~1mm大）がしっかり残っている。粘性なし。5~10mm大の明黄褐色粒（Hue10YR6/5）と無色透明の粒子が極めて多い。
 - VIII b層—黄色の軽石状の粒が堆積。
- IX層：火山灰混黒褐色土層 IX a層・IX b層に分層できる。始良深港火山灰と同定
 - IX a層—黒色Hue2.5Y3/1 粘性なし。しまりあり。~1mm大の透き通るような白色粒子を多く含む。
 - IX b層—黒色Hue2.5Y2/1 粘性なし。しまりあり。~1mm大の透き通るような白色粒子を含むが、a層と比べると少ない。
- X層：灰褐色土層（Hue7.5YR4/2）粘性低い。しまりあり。~1mm大の白粒子を含むがIX層と比べ透明感はなく、濁った白である。量はIX b層と同程度。
- X I層：暗褐色土層（Hue10YR3/3）粘性なし。しまりあり。2~3mmの球状を呈する火山灰が固化したような物体（暗灰黄色Hue2.5Y4/2）が確認できる。1cm大の赤褐色粒（Hue2.5Y4/6）を少量含む。
- X II層：確認できず（黄色火山灰層）始良大塚火山灰と同定
- X III層：アワオコシ風成層（暗赤褐色Hue5YR3/2）粘性なし。しまりは非常に強い。1mm大の黒色粒子（黒色Hue2.5Y2/1）及び1cm大の赤褐色粒（Hue2.5YR4/6）を多く含む。
- X IV層：アワオコシ層

第5図 土層柱状図

第4図 第2地点土層断面図

第1節 IX層の調査

IX層の調査では、剥片石器323点、礫石器4点、礫58点が出土し、始良Tn火山灰下位文化層が確認された。IX層の堆積状況は、約30～50cmの厚みで、谷に向かい南東方向へ緩やかに下り傾斜する（第4図）。IXa層、IXb層に細分され、白色粒子を含む層である。自然科学分析によって、この白色粒子は、始良深港火山灰であることが、判明している（第IV章第2節参照）。

平面分布状況

第6図で示すとおり調査区南東部と調査区中央部に限られる。

流紋岩系石器は、1点のみ中央部で出土した他は調査区南東部でまとまって出土した。出土分布状況は、器種による偏りはないが、第7図によると、遺物が集中する3、4の小さなまとまりを確認でき、全体を見ると中央に遺物空白部を有するドーナツ形を呈する。

黒耀石製石器は流紋岩系石器の分布と重なる調査区南東と調査区中央とで出土した。

砂岩製礫石器は、調査区南東部でのみ出土した。

礫は調査区南東部と中央部で多く出土した。

垂直分布状況

IX層中でまんべんなく出土した。取り上げは、IXa層上、IXa層、IXb層、IXb層下の4段階に分けて行なった。接合作業の結果、層を超えて接合関係が認められたことから、同一文化層と判断した。

層別出土点数を表1、層別出土重量を表2に示す。剥片石器は、IXa層上、IXa層、IXb層が100点前後で多く、IXb層下は13点のみである。重量はIXb層がもっとも重い。礫・礫石器は、IXb層で27点出土し、そのほかは10点前後であった。重量は、IXb層下がもっとも重く、IXb層とあわせると、全体の8割を超える。

このことから、本来の文化層は、IXb層に中心があったと考えられる。

石材の内訳

流紋岩系石器がもっとも多く308点を数える。次に黒耀石製遺物が15点である。自然科学分析の結果、原産地不明のものを除く11点は、五米木・日東産、白浜産、桑ノ木津留産であり、いずれも鹿児島県・熊本県境（肥薩地域）所産のものである。礫石器は4点出土し、いずれも砂岩であった。礫は58点出土した。

以下、石材別に報告する。

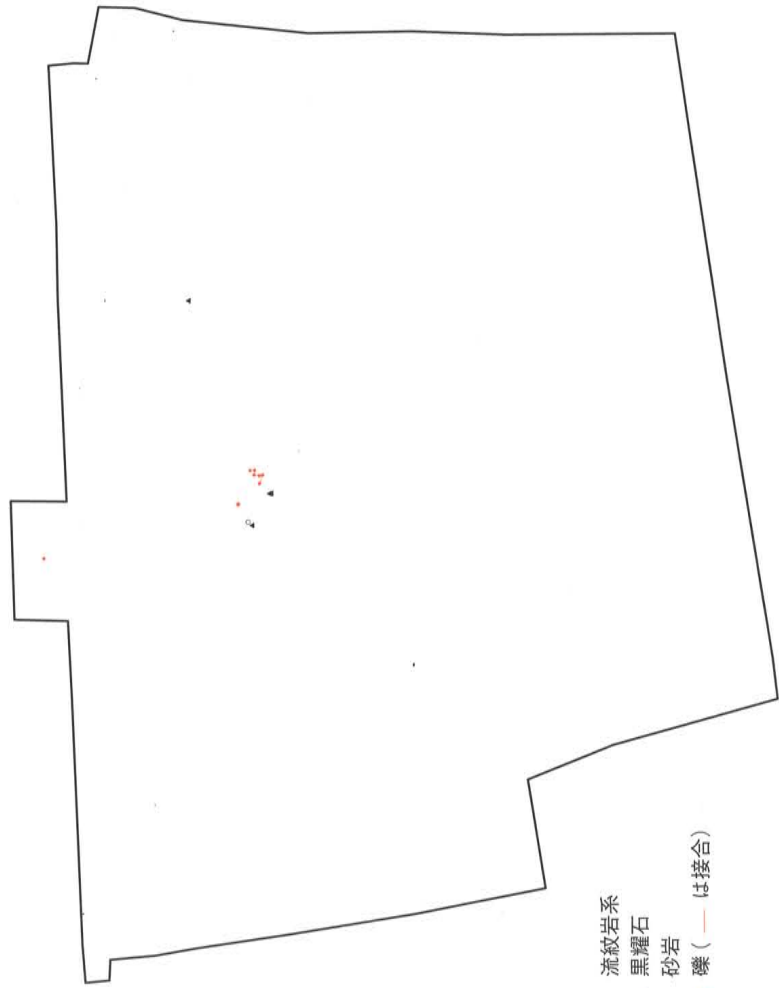
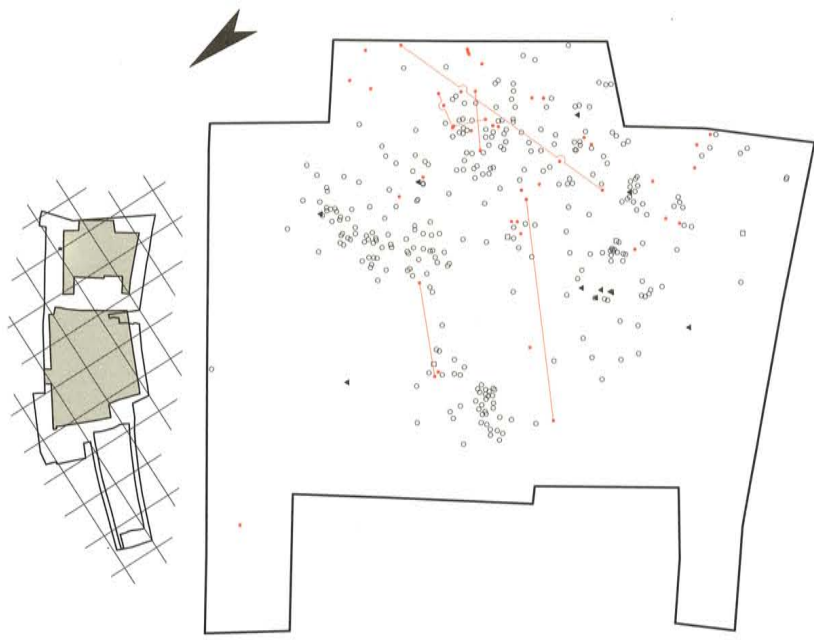
〈 石 器 〉

流紋岩系

合計308点の剥片石器が出土した。器種別内訳は、ナイフ形石器およびナイフ形石器未製品15点、削器1点、二次加工剥片18点、微細剥離ある剥片25点、剥片232点、石核5点である。このうち接合資料25個体96点が確認された。

1～10（第15図）はナイフ形石器およびナイフ形石器未製品である。

11～19（第16図）は二次加工剥片である。11、13～16、72～76は、側縁部に弧状を呈する抉りが作出されている。12は両側縁と下部に細かい加工が施され、下部先端が錐状を呈する。17はやや厚い縦長剥片で

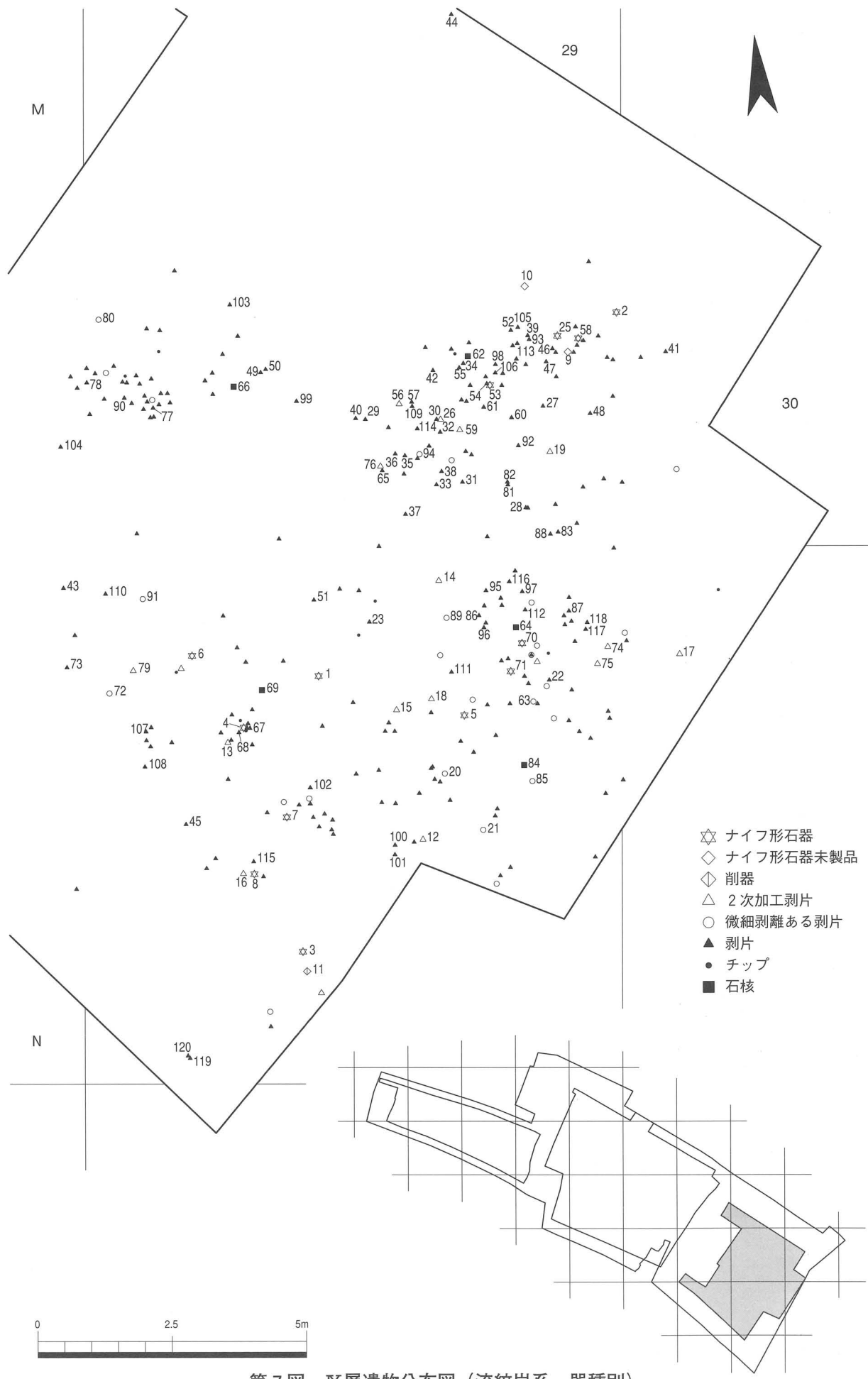


- 流紋岩系
- ▲ 黒耀石
- 砂岩
- 礫 (— は接合)

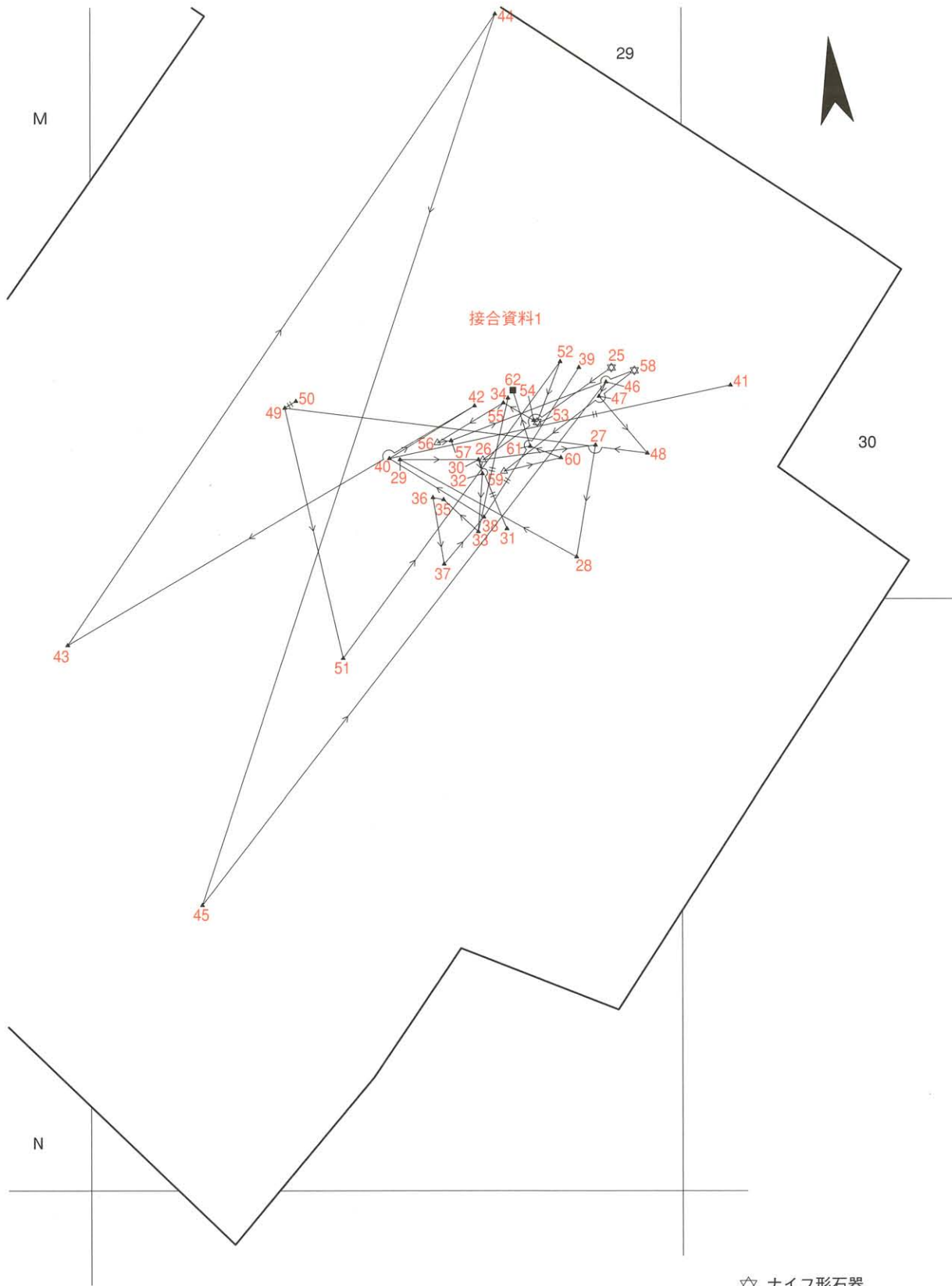
H=71.00

H=68.00

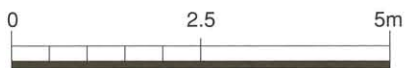
第6図 区層遺物分布図



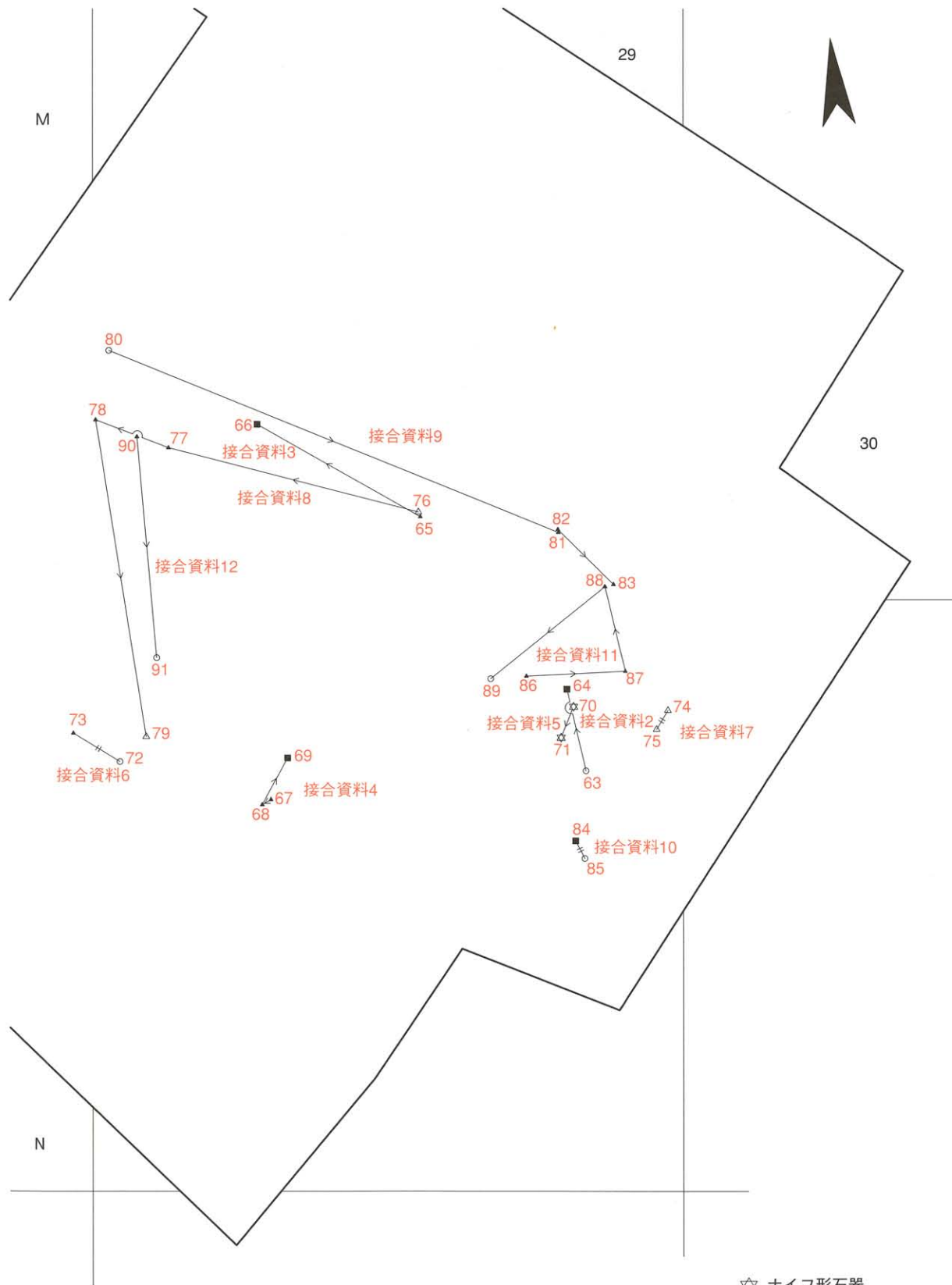
第7図 区層遺物分布図 (流紋岩系、器種別)



- ☆ ナイフ形石器
- △ 2次加工剥片
- ▲ 剥片
- 石核

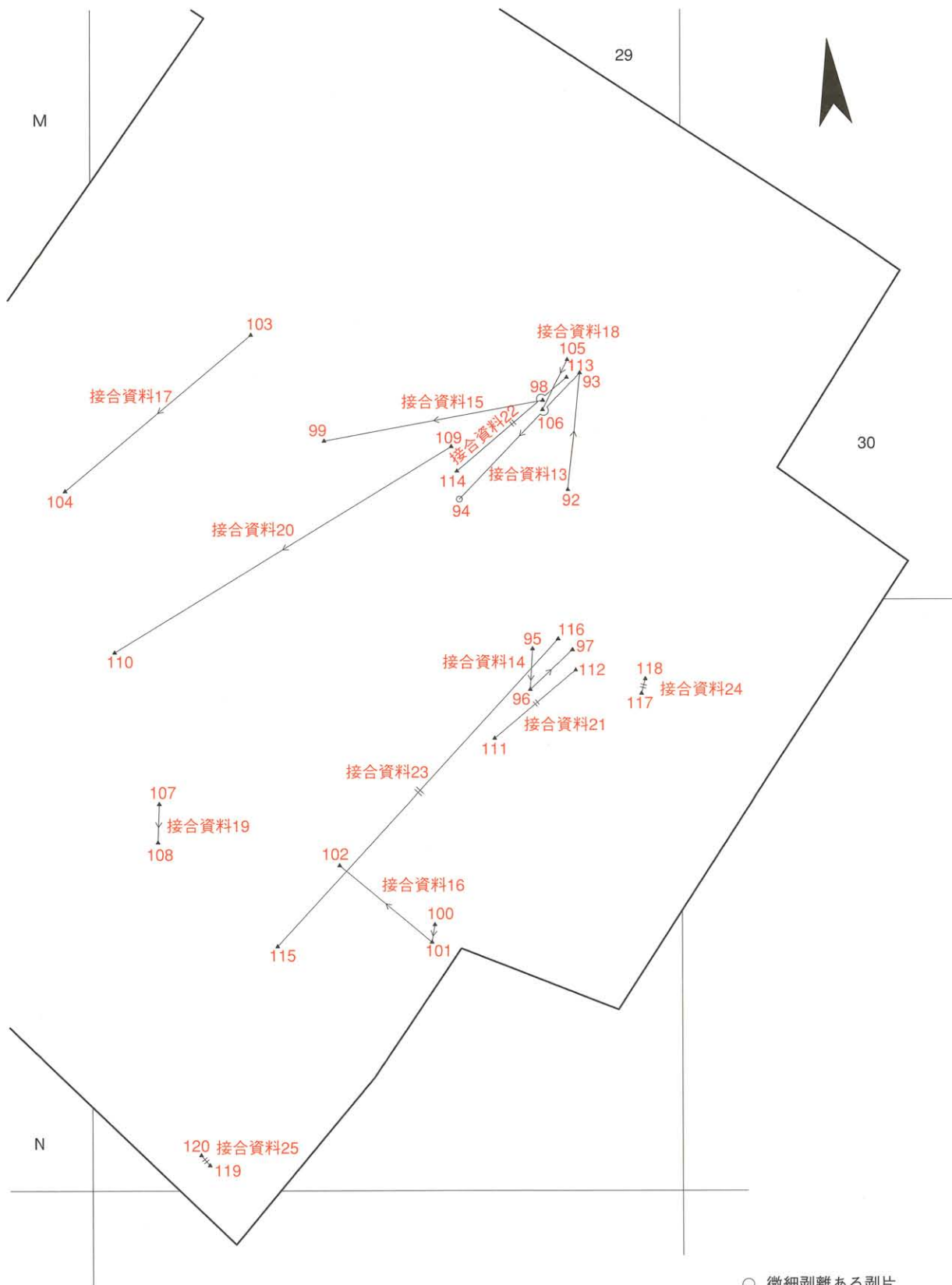


第8図 区層遺物分布図（流紋岩系、接合資料1）



- ☆ ナイフ形石器
- △ 2次加工剥片
- 微細剥離ある剥片
- ▲ 剥片
- 石核

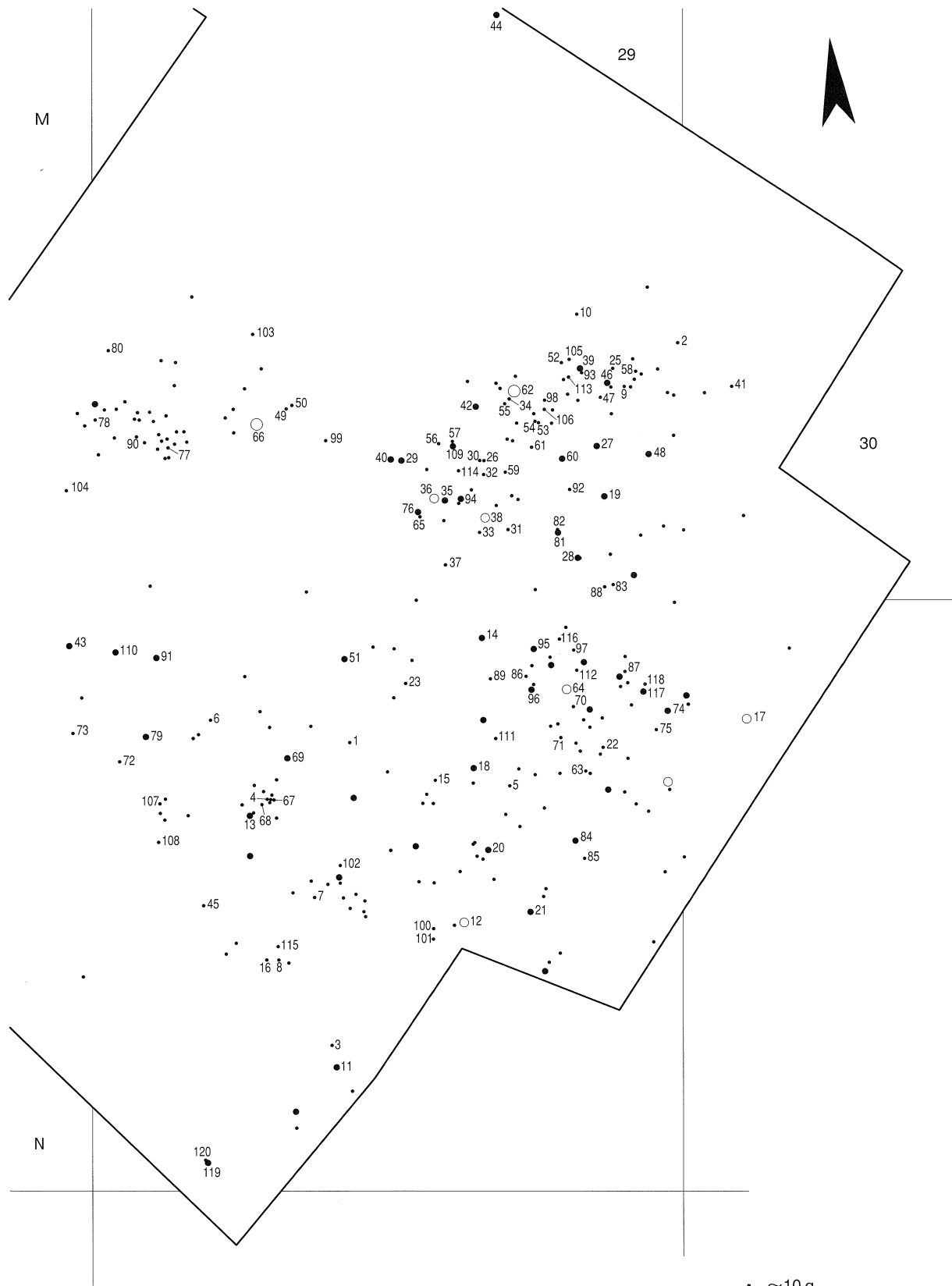
第9図 IX層遺物分布図（流紋岩系、接合資料1～12）



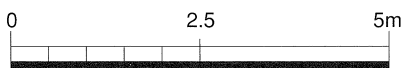
- 微細剥離ある剥片
- ▲ 剥片



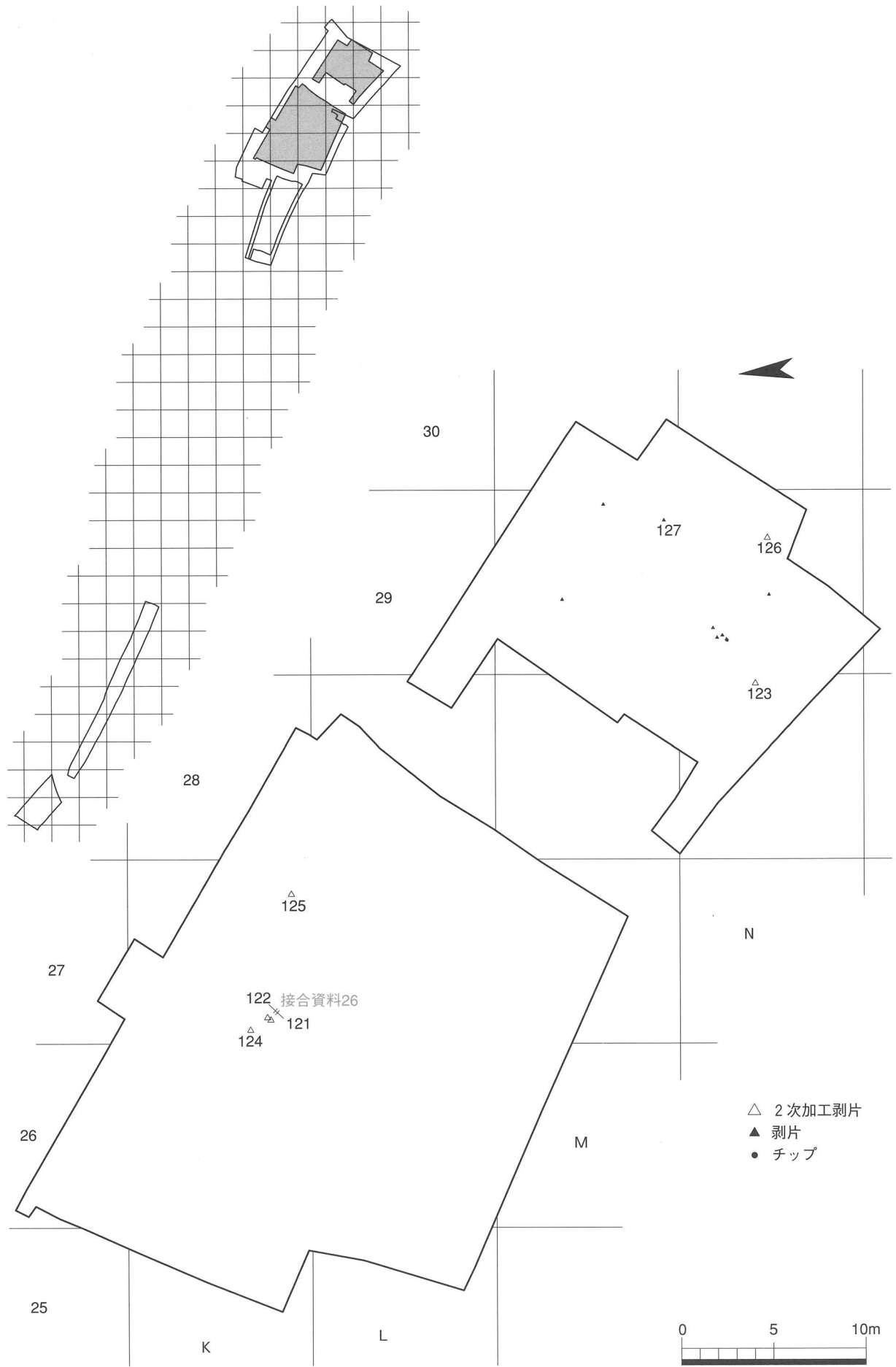
第10図 区層遺物分布図（流紋岩系、接合資料13~25）



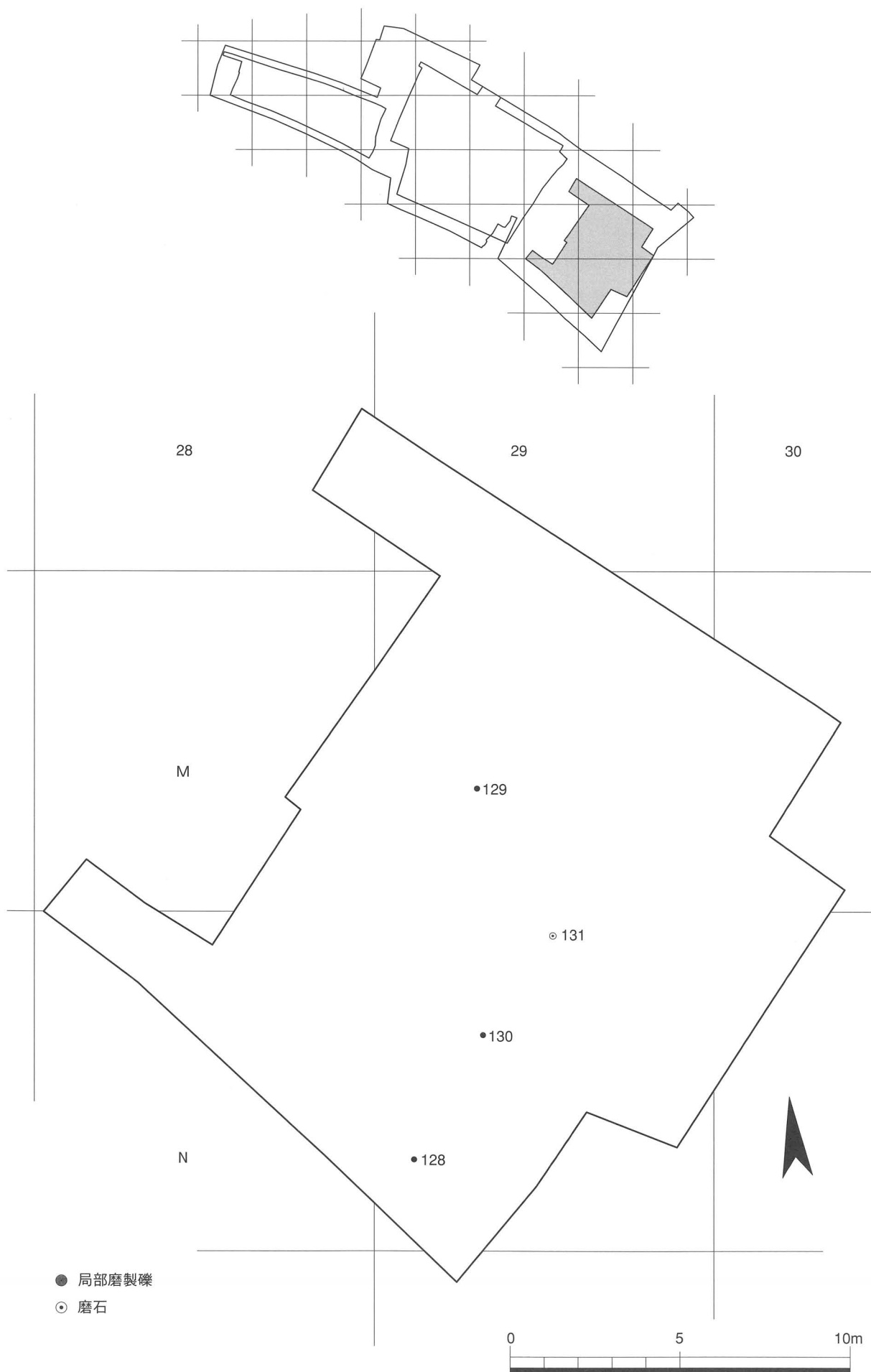
- ~10 g
- ~50 g
- ~100 g
- 100 g ~



第11図 区層遺物分布図（流紋岩系、重量別）



第12図 区層遺物分布図（黒耀石、器種別）



第13図 区層遺物分布図（礫石器、器種別）



第14図 区層遺物分布図（礫、重量別）

表1 Ⅹ層出土石器・礫層別出土点数

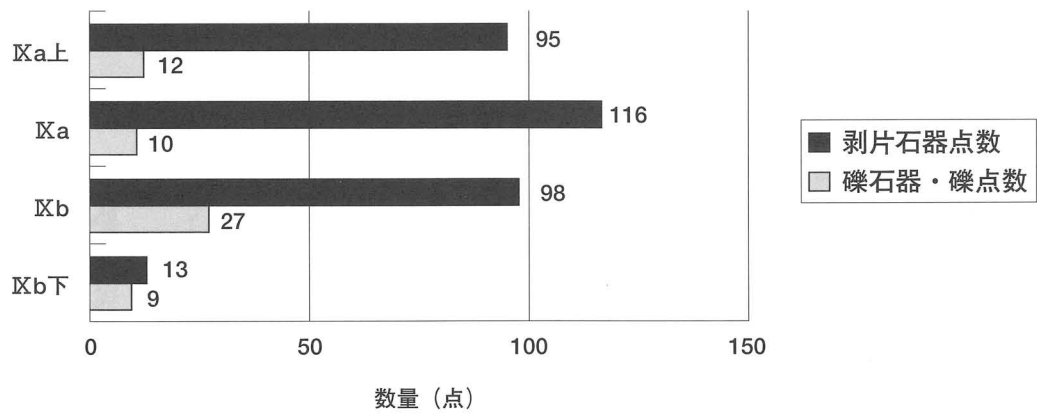


表2 Ⅹ層出土石器・礫層別重量

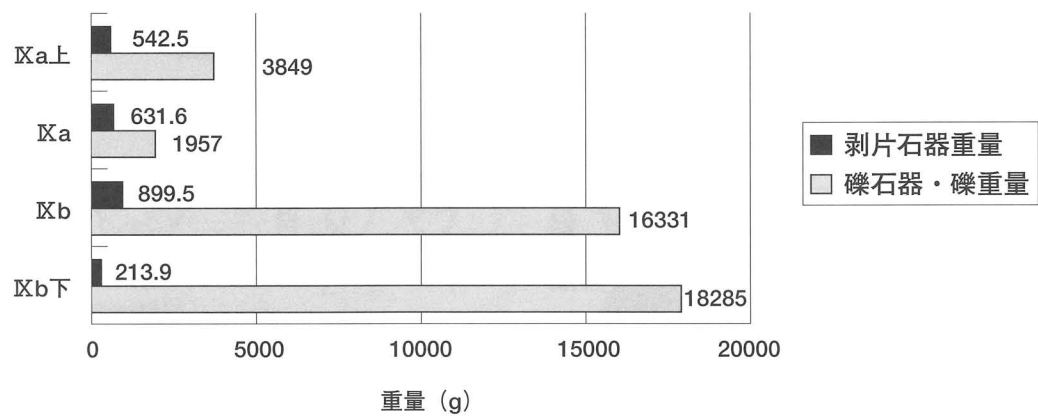
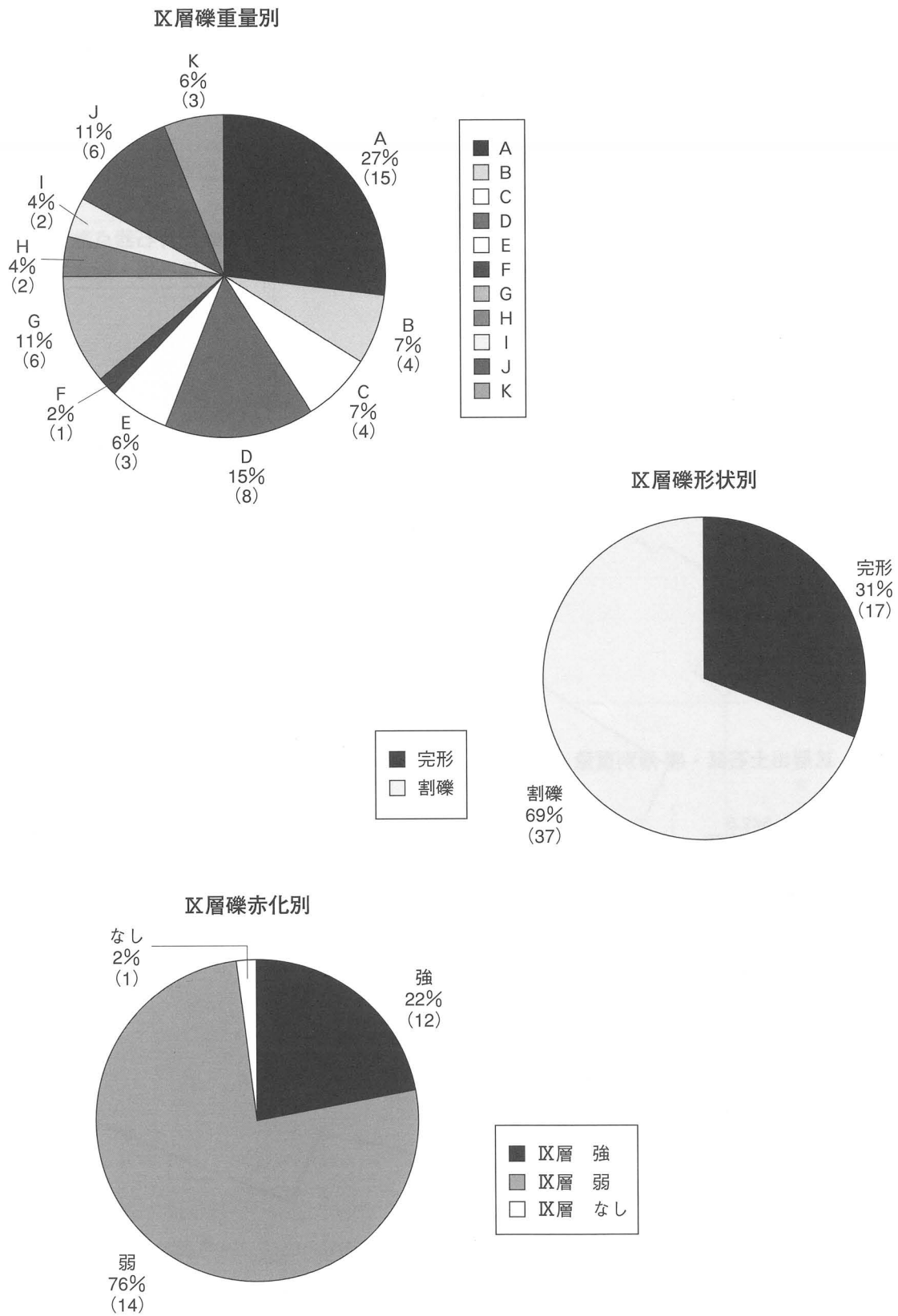
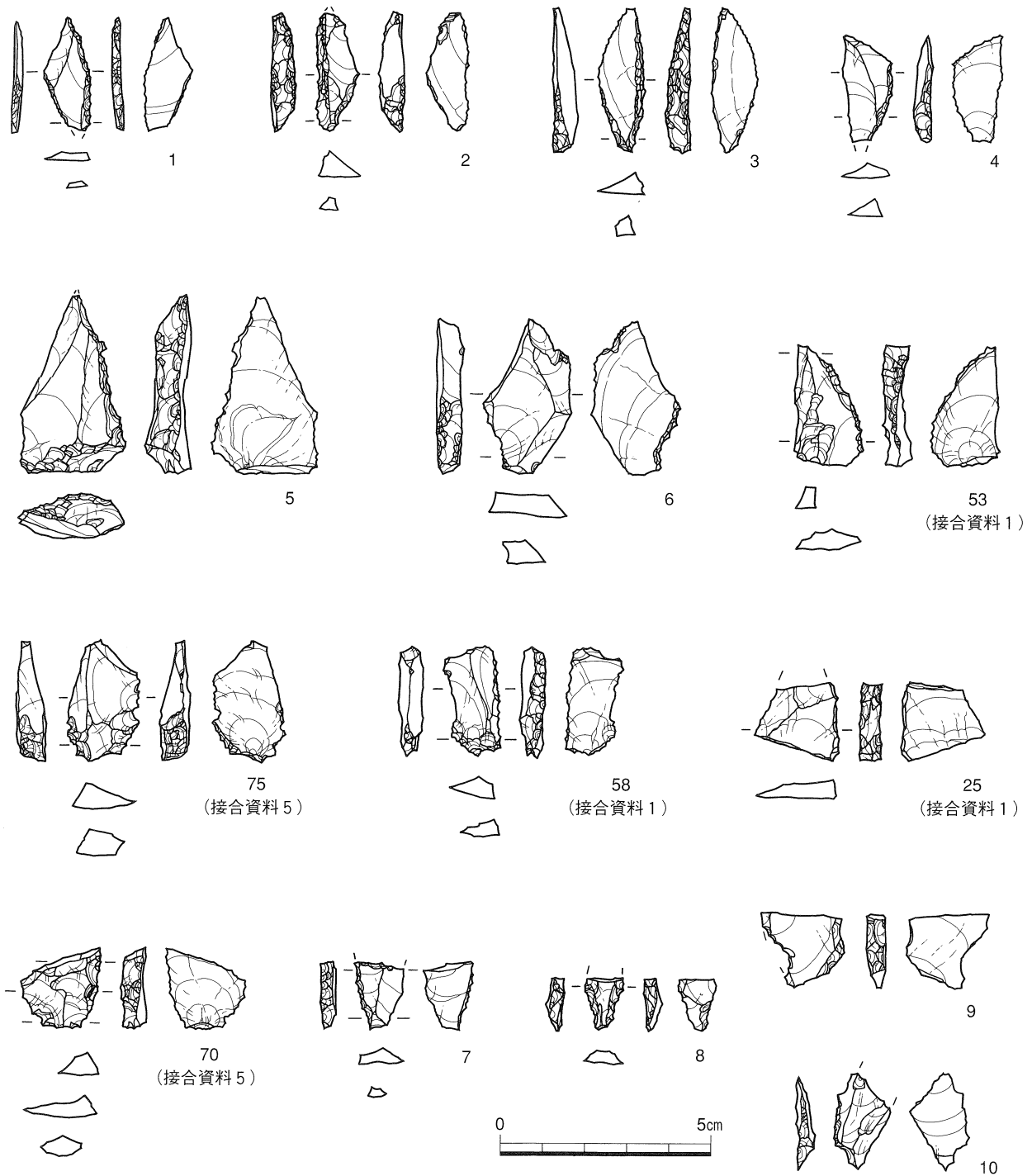


表3 区層礫属性表



A・・・1～50g, B・・・51～100g, C・・・101～200g, D・・・201～300g, E・・・301～400g, F・・・401～500g, G・・・501～750g, H・・・751～1,000g, I・・・1,001～1,500g, J・・・1,501～2,000g, K・・・2,001g以上



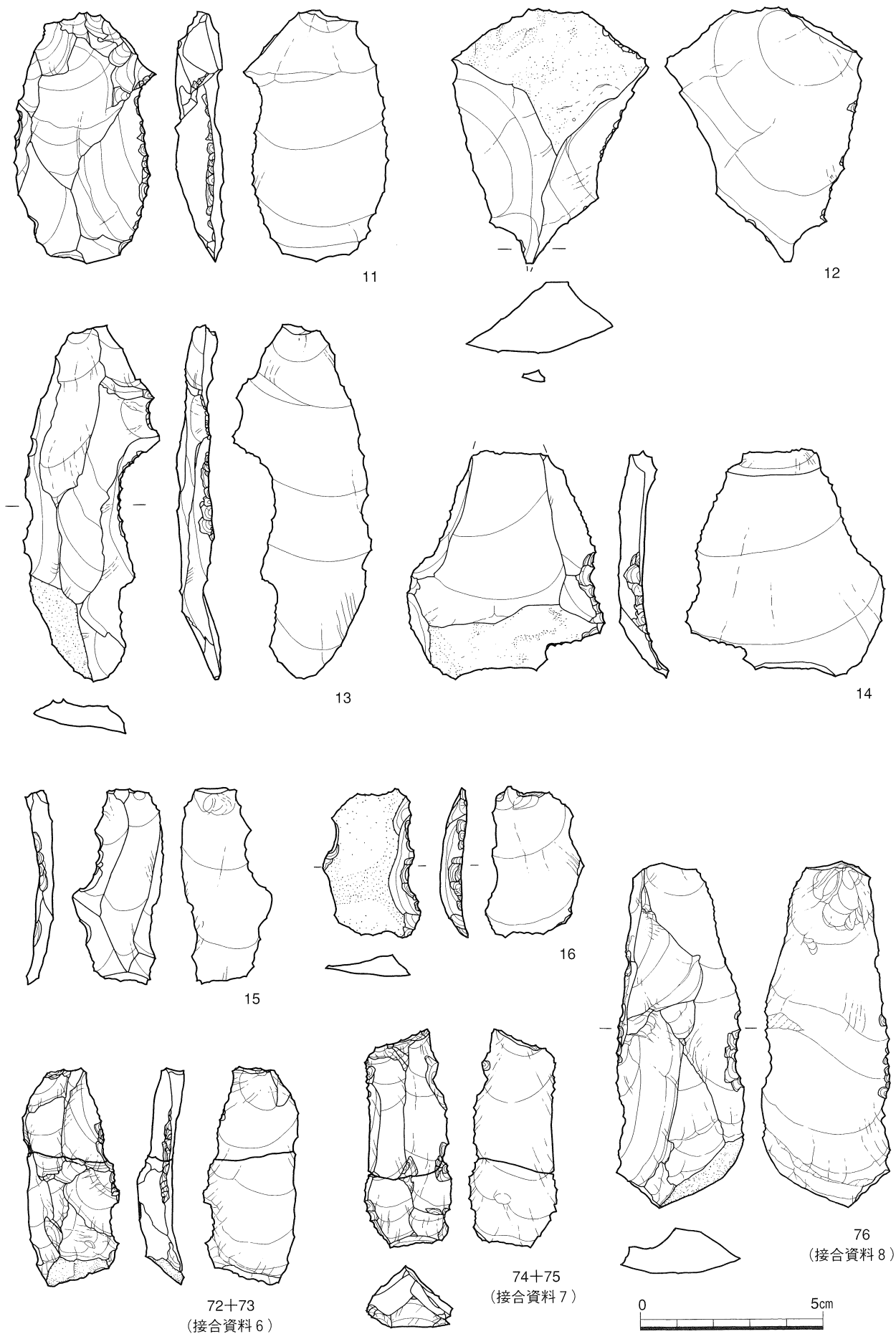
第15図 Ⅹ層遺物実測図（流紋岩系、ナイフ形石器および未製品）

左側面及び下部に二次加工が施される。18は上端部に二次加工が施される。左右側面は折れているが、切断かどうかは不明である。79は左側縁部に二次加工が施される。下部には微細剥離が観察される。19は左側縁部及び下部に二次加工が施される。

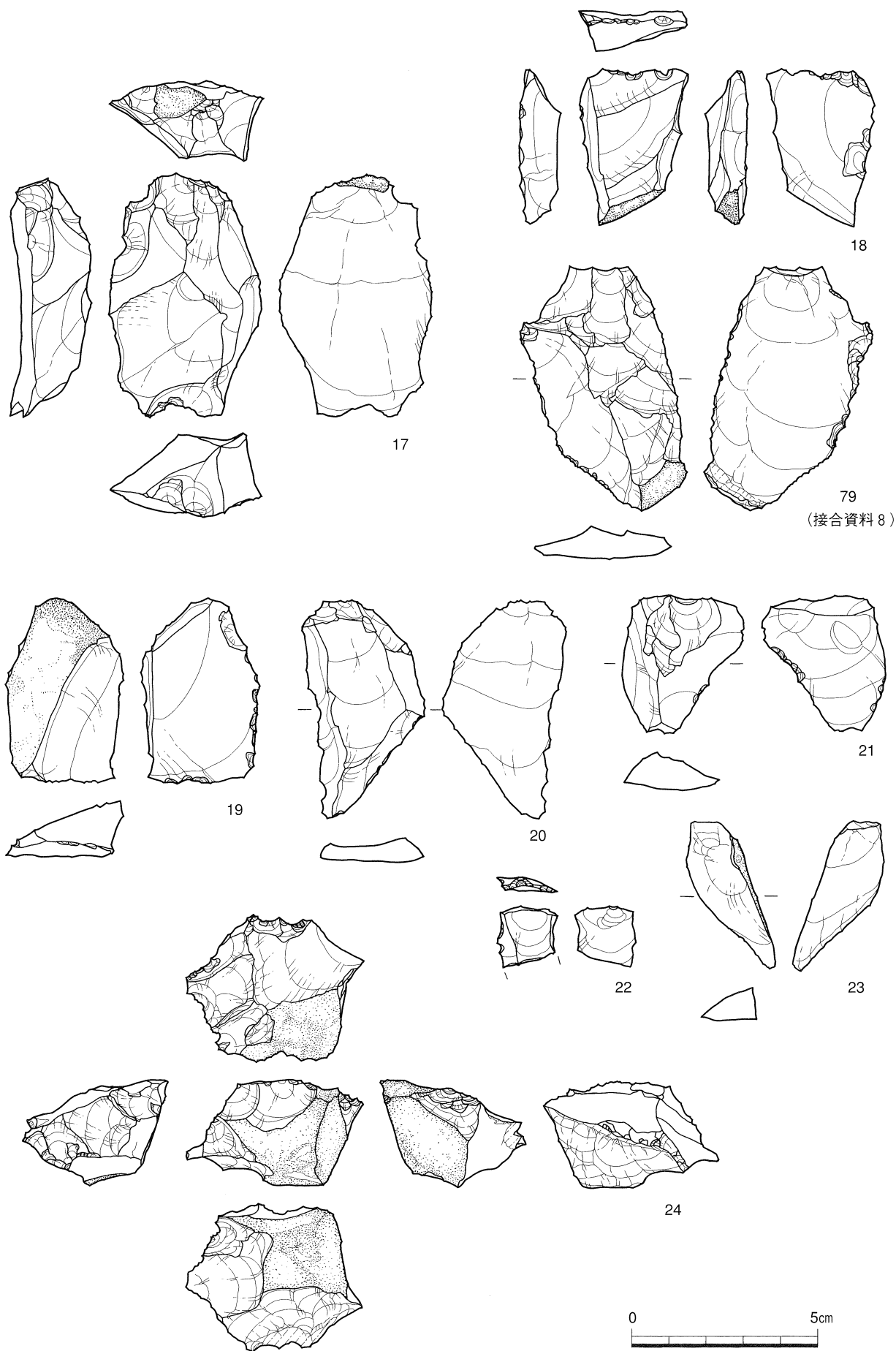
20、21は微細剥離ある剥片である。

22、23は剥片で、22は打面調整が行なわれる。23は表裏両面とも腹面であり、剥片石核の存在が考えられる。

24は石核である。打面転移を行ないながら、貝殻状の剥片が剥離されている。



第16図 Ⅹ層遺物実測図（流紋岩系、单体 2）

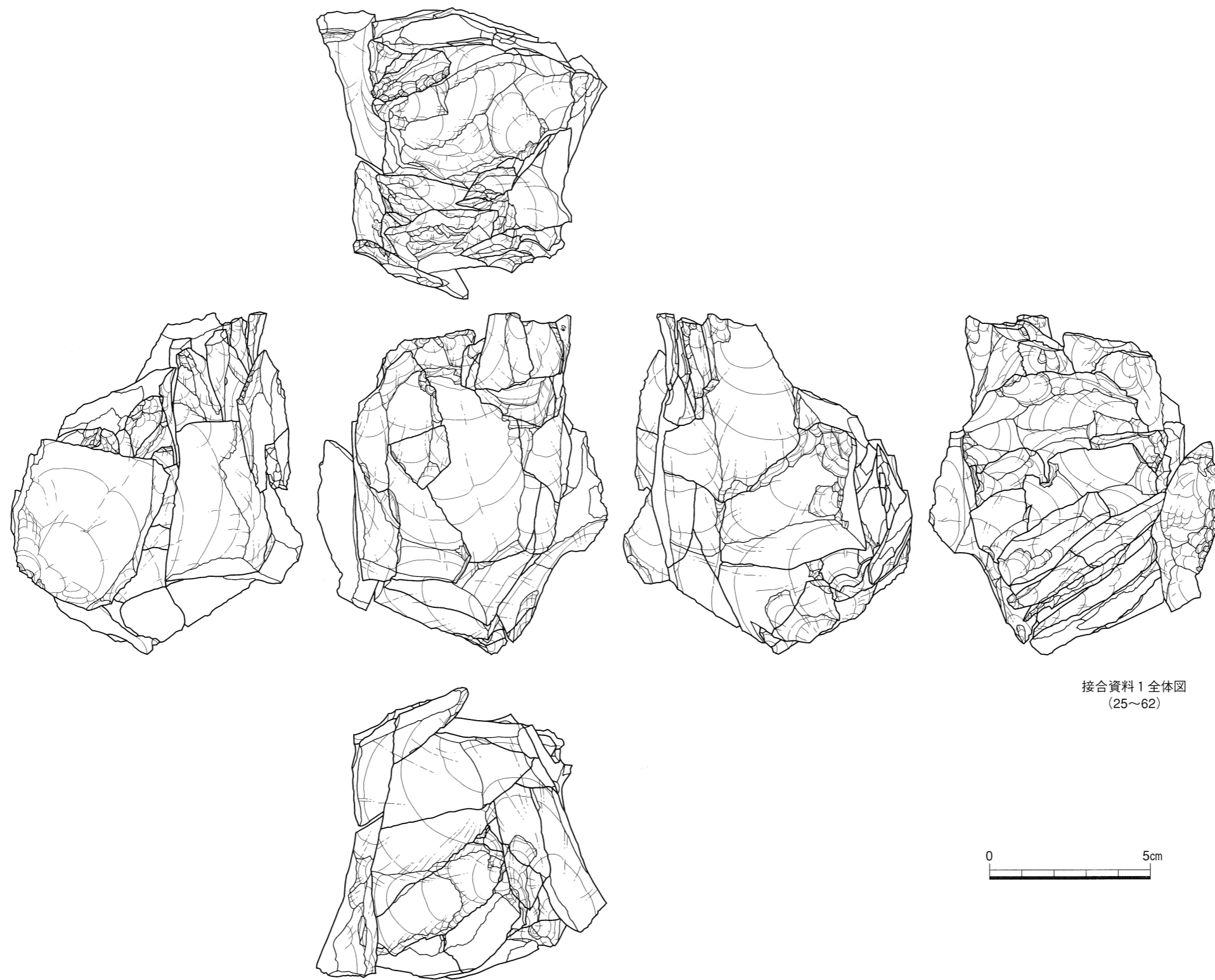


第17図 区層遺物実測図 (流紋岩系、单体 3)

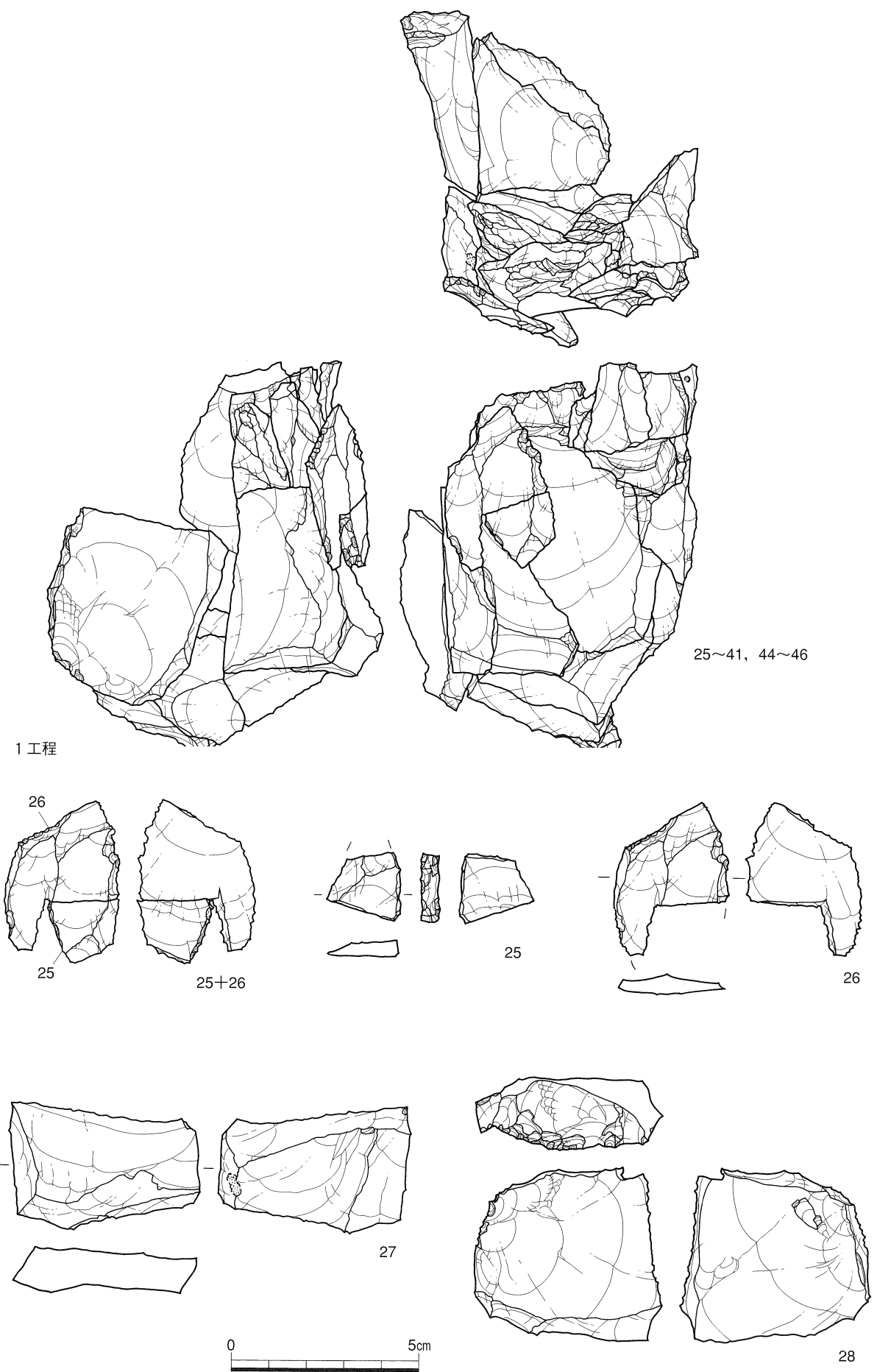
【 接合資料 1 】

剥片剥離は大きく7工程に分けられる。本遺跡内での剥片剥離以前に、礫面等の除去や打面①等の作出は終了していた。したがって、本遺跡内での活動は、目的剥片獲得の最初あるいは途中から始まり、最終的に残核に至るまでである。第8図に分布状況を示す。

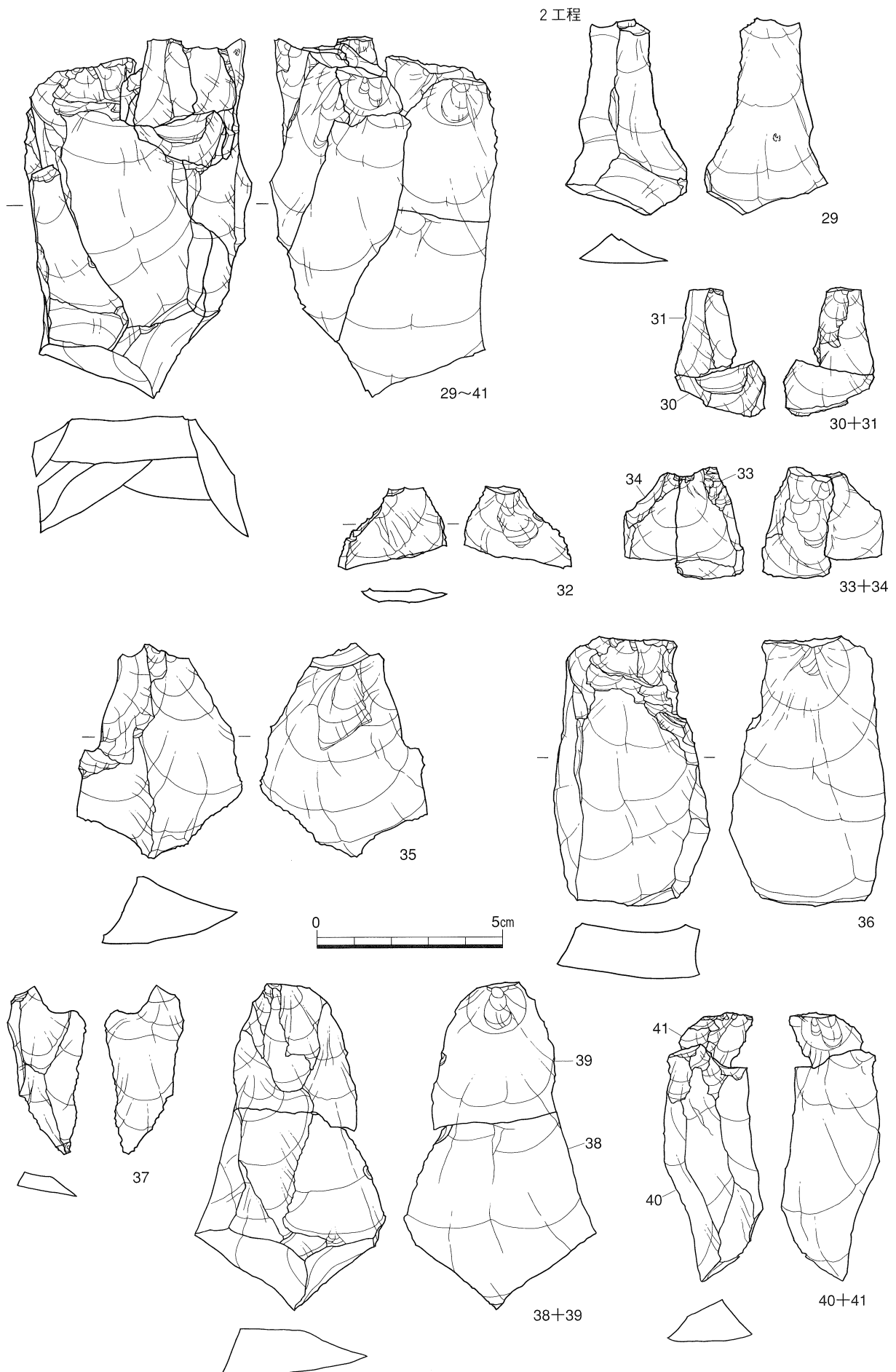
- 1 工程 打面①（全体図上面）を基本的に打面とする剥片剥離（25～28）
剥片（25+26）は打面①より剥離され、打面側～中間部と剥片末端側に折断された後、剥片末端側がナイフ形石器として利用される。
次いで、剥片（27・28）が全体図左面下より剥離される。剥片（27・28）は同一剥片であり、中間部の接合石器は確認されなかった。
- 2 工程 打面①より連続して目的剥片（縦長剥片）を剥離（29～41）
剥片は、(29) → (30) → (31) → (32) → (33+34) → (35) → (36) → (37) → (38+39) → (40+41) の順で、連続して剥離される。打面調整はみられず、一方、作業面調整はほぼ例外なくみられる。打点位置は稜を取り込みつつ左右にずれている（29～41断面図参照）。
- 3 工程 打面②（全体図右面）を作出する剥離（42・43）
剥片は、(42) → (43) の順で剥離される。剥片は目的剥片に比べ、やや歪である。
- 4 工程 打面②より連続して目的剥片（縦長剥片）を剥離（44～53）
剥片は、(44) → (45) → (46) → (47) → (48) → (49+50) → (51) → (52) → (53) の順で、連続して剥離される。打面調整はみられず、作業面調整が実施された剥片も少数である。打点位置は稜を適宜取り込みつつ左右にずれている（44～53断面図参照）。
(53) はナイフ形石器に利用される。
- 5 工程 打面③（打面②と打面上下入れ替え）より剥片剥離（54～56）
剥片は、打面②と上下を入れ替える格好で、打面③より (54) → (55) → (56) の順で剥離される。
- 6 工程 打面③からの剥片剥離面を打面とする剥片剥離（57・58）
剥片は、57・58が剥離される。(58) はナイフ形石器に利用される。
- 7 工程 ふたたび打面②より剥片剥離、石核（59～61、62）
剥片は、(59) → (60) → (61) の順で剥離される。
最終的に石核（62）が残される。石核（62）は全面が剥離面で覆われ、礫面等は残っていない。



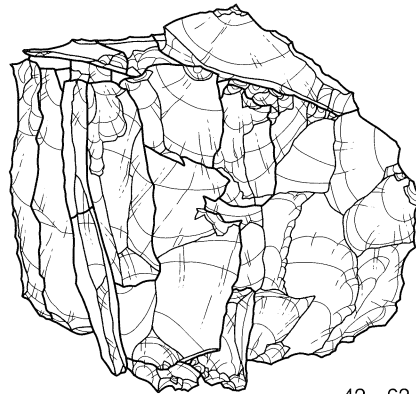
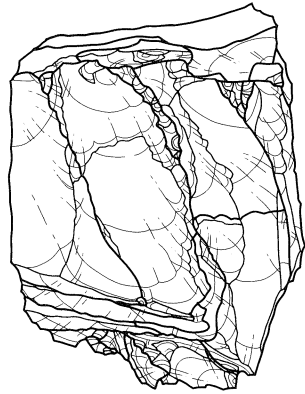
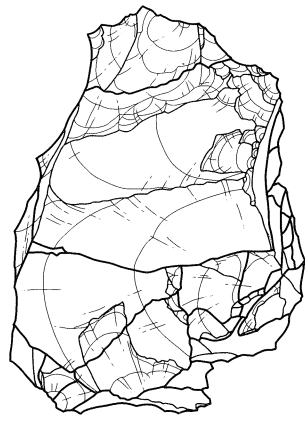
第18図 Ⅹ層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1）



第19図 Ⅹ層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1）



第20図 区層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1）

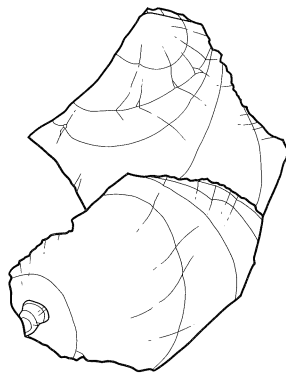


42~62

3 工程



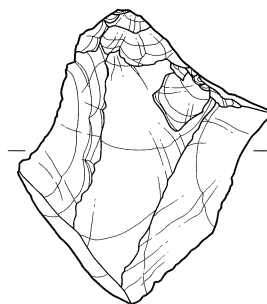
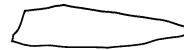
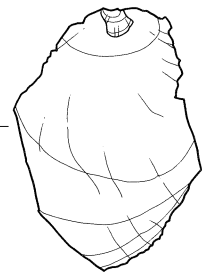
42



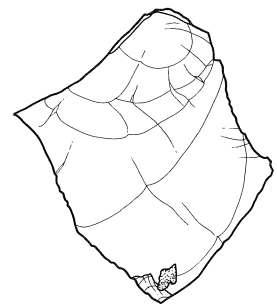
42+43



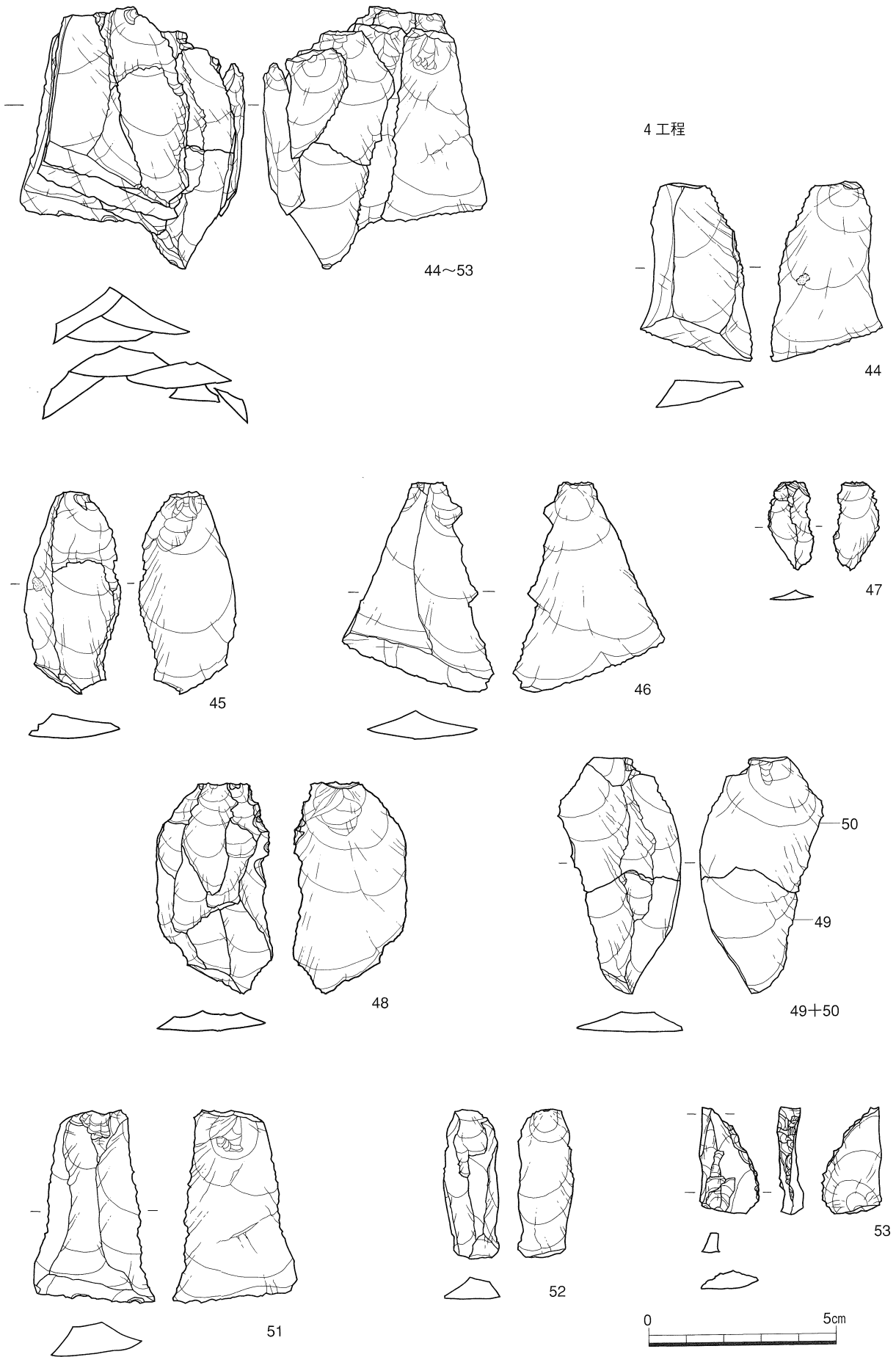
42



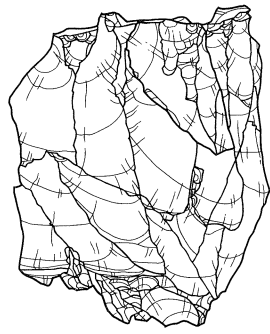
43



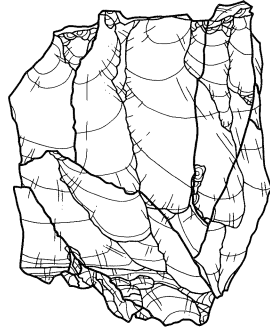
第21図 区層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1）



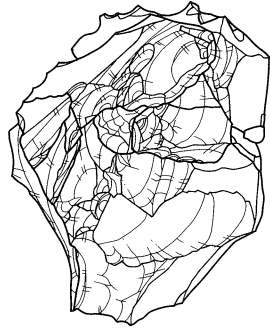
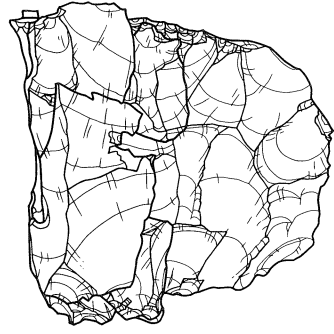
第22図 区層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1）



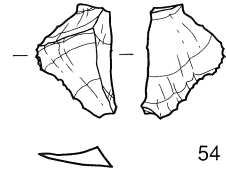
53+54~62



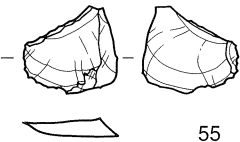
54~62



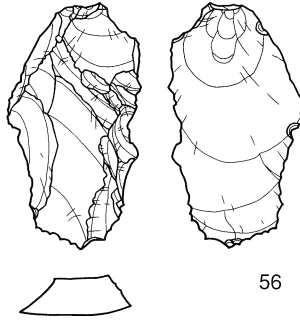
5 工程



54

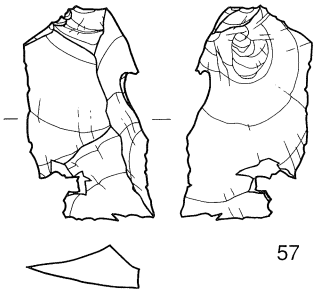


55

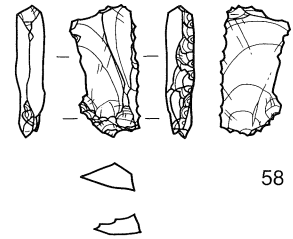


56

6 工程

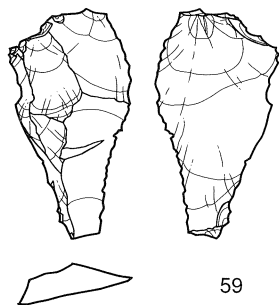


57

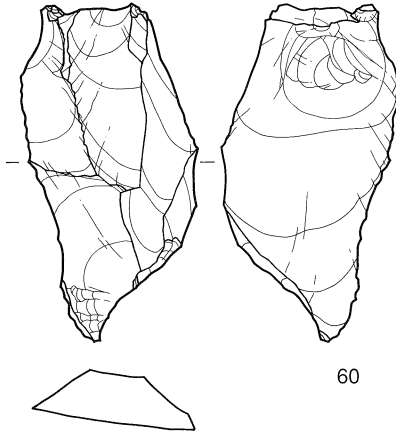


58

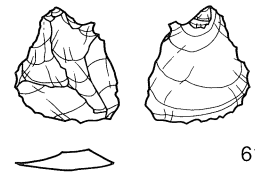
7 工程



59



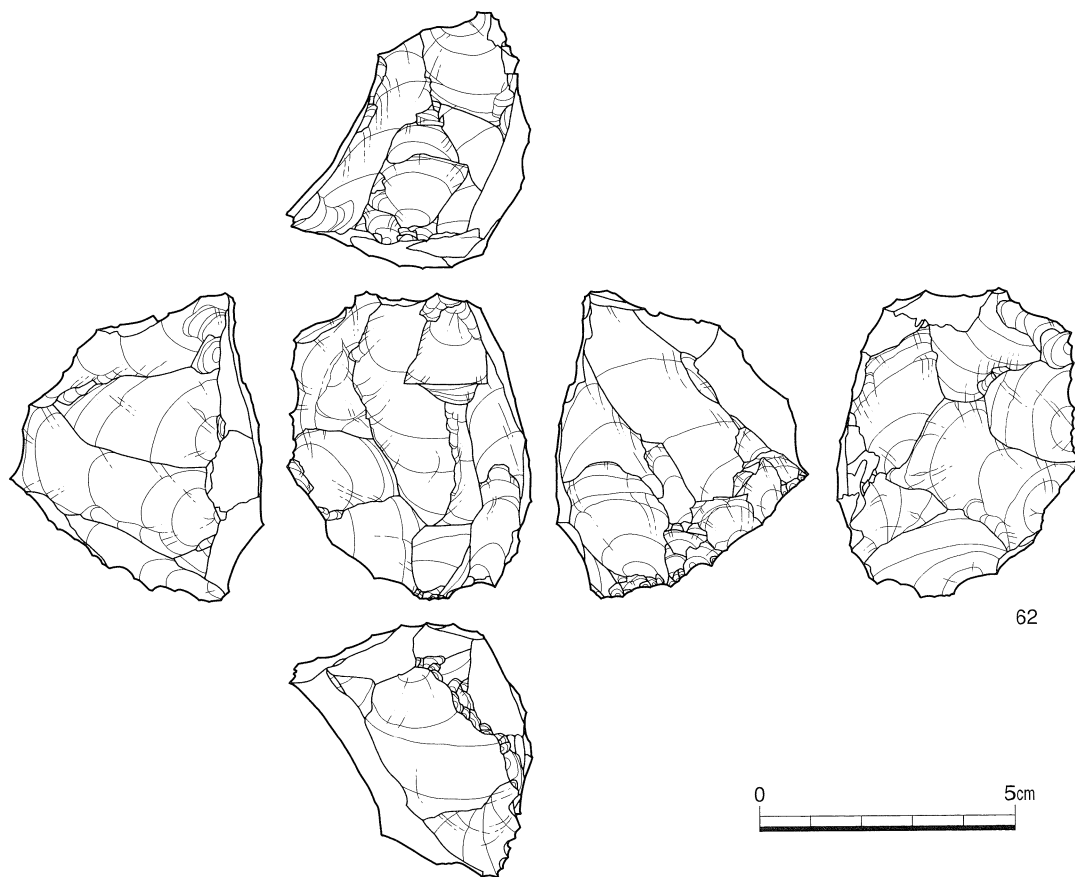
60



61



第23図 区層遺物実測図 (流紋岩系、接合資料1)



第24図 区層遺物実測図（流紋岩系、接合資料1）

【 接合資料2 】

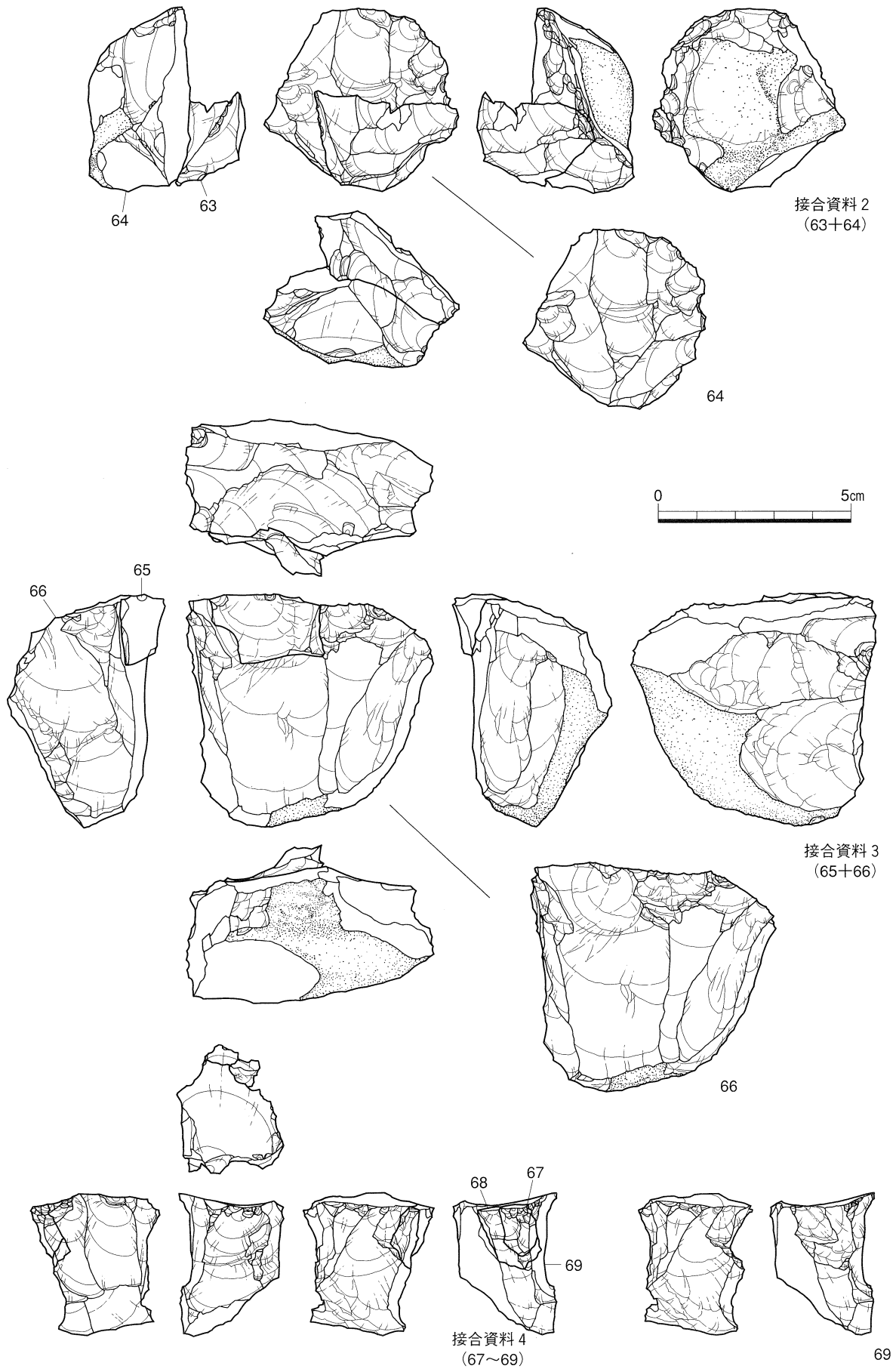
微細剥離ある剥片（63）と石核（64）の接合である。石核は分割礫素材と推定される。剥片剥離は、分割礫の礫面のカーブに沿うような格好で、若干の打面調整を介しながら実施される。原石は完全に消費しつくされることはなく、石核裏面には大きく礫面が残されている。目的剥片は薄手の縦長剥片であったと推定される。

【 接合資料3 】

剥片（65）と石核（66）の接合である。石核からは、新旧2つの大きな作業単位が観察でき、旧剥離・新剥離と呼び分けることとする。旧剥離は、石核裏面・上面にみられる、同一打面からの連続した縦長剥片剥離である。新剥離は、旧剥離面を打面に転用し、同一打面からの連続した縦長剥片剥離である。目的剥片は最大幅3cm程度の端整な縦長剥片であったと推定される。65は打面部のみである。剥片中間部から末端にかけては、ナイフ形石器にでも利用されたものか、遺跡内で接合は確認されない。

【 接合資料4 】

剥片（67・68）と石核（69）の接合である。剥片剥離は、一剥離面からほとんど打面調整されることなく実施される。打面転移はなく、すべて単一方向からの剥離である。目的剥片は縦長剥片である。67・68は作業面調整あるいは目的剥片の剥ぎ損じであろう。



第25図 区層遺物実測図（流紋岩系、接合資料 2～4）

【 接合資料 5 】

ナイフ形石器どうしの接合である。70→71の順で、連続して剥離された剥片を素材とする。

【 接合資料 6 】

微細剥離ある剥片の折れ面接合である。剥片中間部あたりで折れている。

【 接合資料 7 】

二次加工剥片の折れ面接合である。剥片中間部あたりで折れている。

【 接合資料 8 】

二次加工剥片 (76) と剥片 (79) の剥離面接合である。二次加工剥片 (76) は縦長剥片素材であり、剥片の両長辺に二次加工がみられる。剥片 (77, 78) は、剥ぎ損じであろう。

【 接合資料 9 】

微細剥離ある剥片 (80) と剥片 (81~83) の剥離面接合である。剥片剥離は同一打面より連続して実施される。打面調整が顕著にみられる。微細剥離は、剥片が歪なことから、剥離の衝撃によって生じた可能性がある。

【 接合資料10 】

石核 (84) と微細剥離ある剥片 (85) の剥離面接合である。石核は厚手の剥片素材である。

【 接合資料11 】

微細剥離ある剥片 (89) と剥片 (86~88) の剥離面接合である。剥片剥離は同一打面より連続して実施される。微細剥離は、礫面に接する部分にのみみられることから、剥離の衝撃によって生じた可能性がある。

【 接合資料12 】

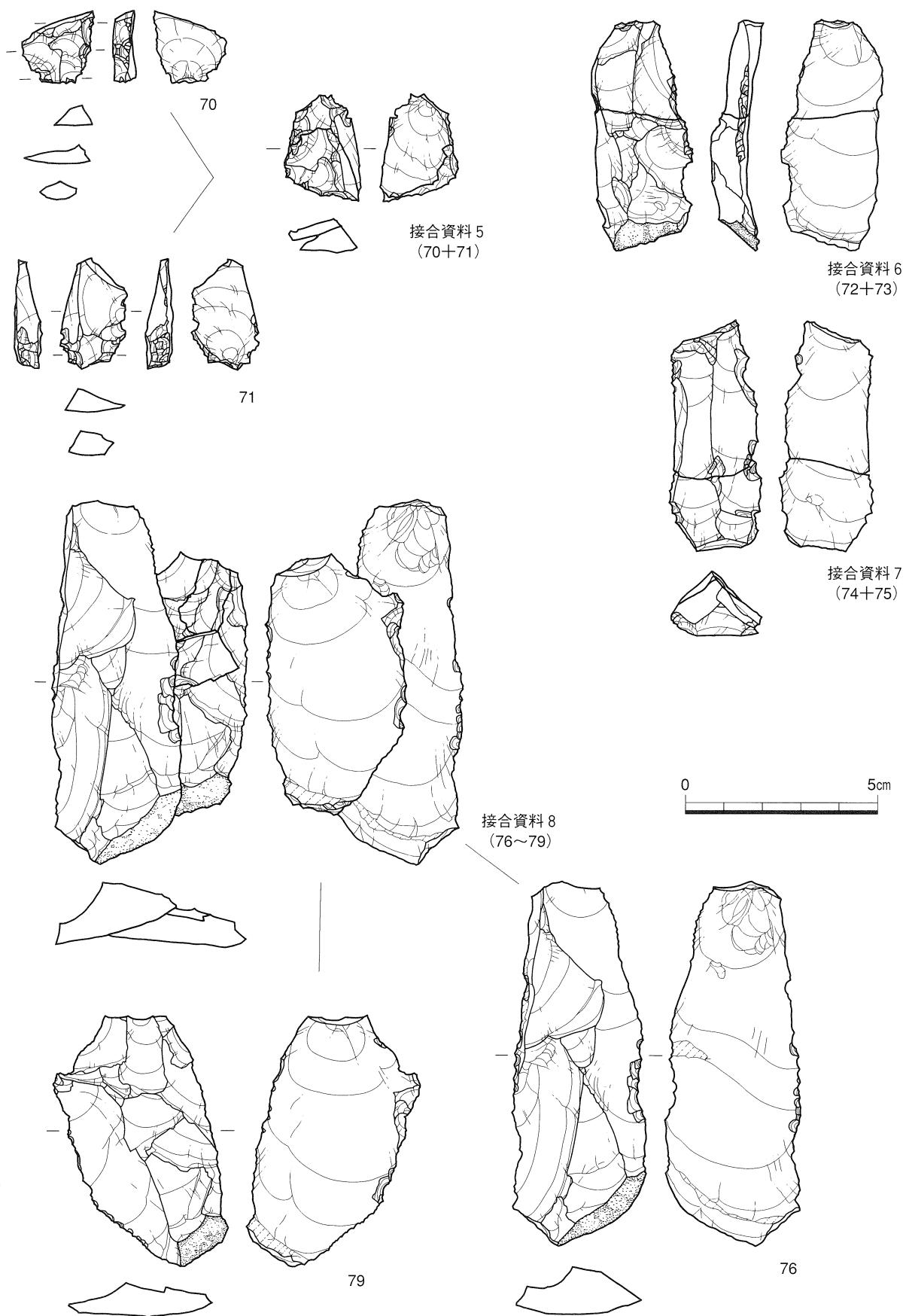
微細剥離ある剥片 (91) と剥片 (90) の剥離面接合である。剥片剥離は同一打面より連続して実施される。打面調整が顕著にみられる。微細剥離は、剥片打面部・末端を除く縁辺に顕著にみられる。

【 接合資料13 】

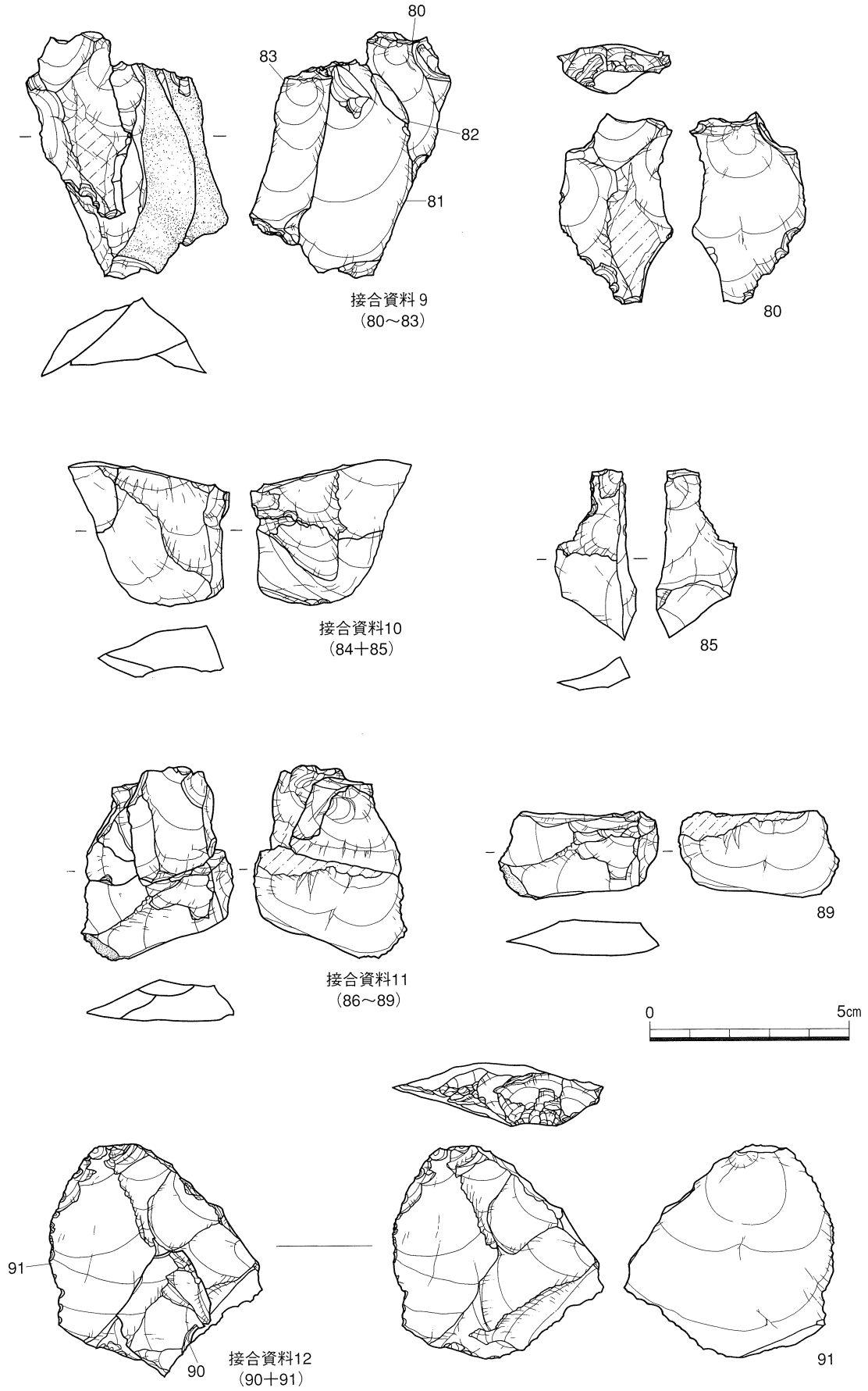
微細剥離ある剥片 (94) と剥片 (92・93) の剥離面接合である。剥片剥離は同一打面より連続して実施される。打面調整が顕著にみられる。微細剥離は、剥片末端側のやや内に挟れた箇所にも顕著にみられる。

【 接合資料14 】

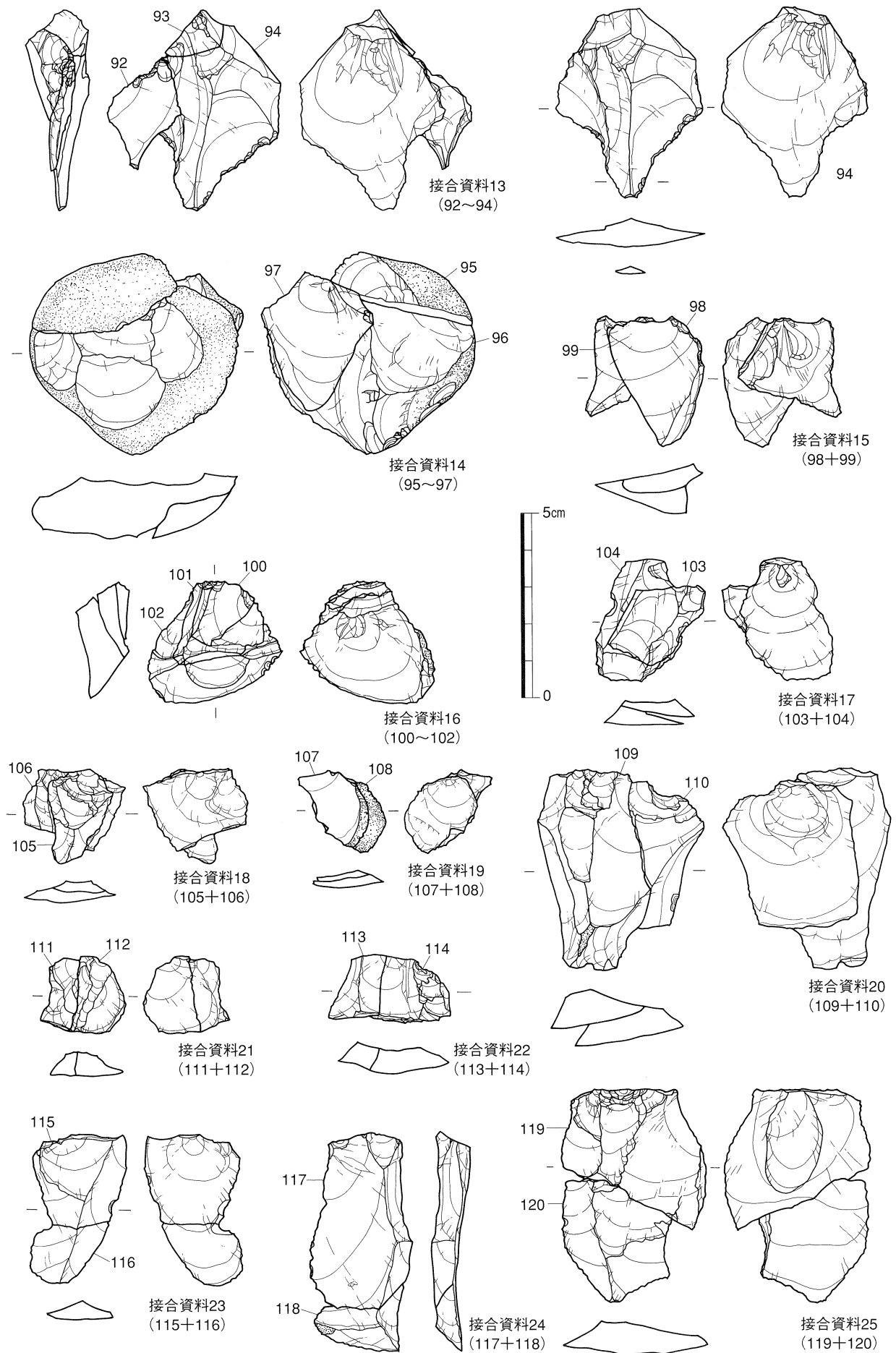
剥片どうしの剥離面接合である。後の剥片剥離に備える打面あるいは作業面の作出作業に伴うもの



第26図 区層遺物実測図（流紋岩系、接合資料5～8）



第27圖 區層遺物實測圖 (流紋岩系、接合資料 9~12)



第28図 区層遺物実測図 (流紋岩系、接合資料13~25)

であろう。

【 接合資料15 】

剥片どうしの剥離面接合である。打面調整の後、同一打面より連続して剥離される。

【 接合資料16 】

剥片どうしの剥離面接合である。同一打面より、貝殻状の不定形剥片が連続して剥離される。

【 接合資料17 】

剥片どうしの剥離面接合である。剥片剥離は上下両方向より実施される。

【 接合資料18 】

剥片どうしの剥離面接合である。

【 接合資料19 】

剥片どうしの剥離面接合である。礫面除去等に伴うものか。

【 接合資料20 】

剥片どうしの剥離面接合である。旧剥離面を打面とする。

接合資料21～25は、偶発的な折れによる接合資料である。打点部を境に剥離軸に沿うような格好で裂けたような資料（接合資料21・22）は、剥片の獲得時点で折れた可能性が高い。接合資料23・24・25は剥片中間部あたりで折れた資料である。

黒耀石

蛍光X線分析の結果、五女木・日東産（接合26・124～126）、内屋敷UT遺物群（123）、永迫316-329遺物群（126）に分けられる。後二者は、産地が現段階で特定できないものである。黒耀石系の中での内訳は、五女木・日東産が多くを占める（表4参照）。

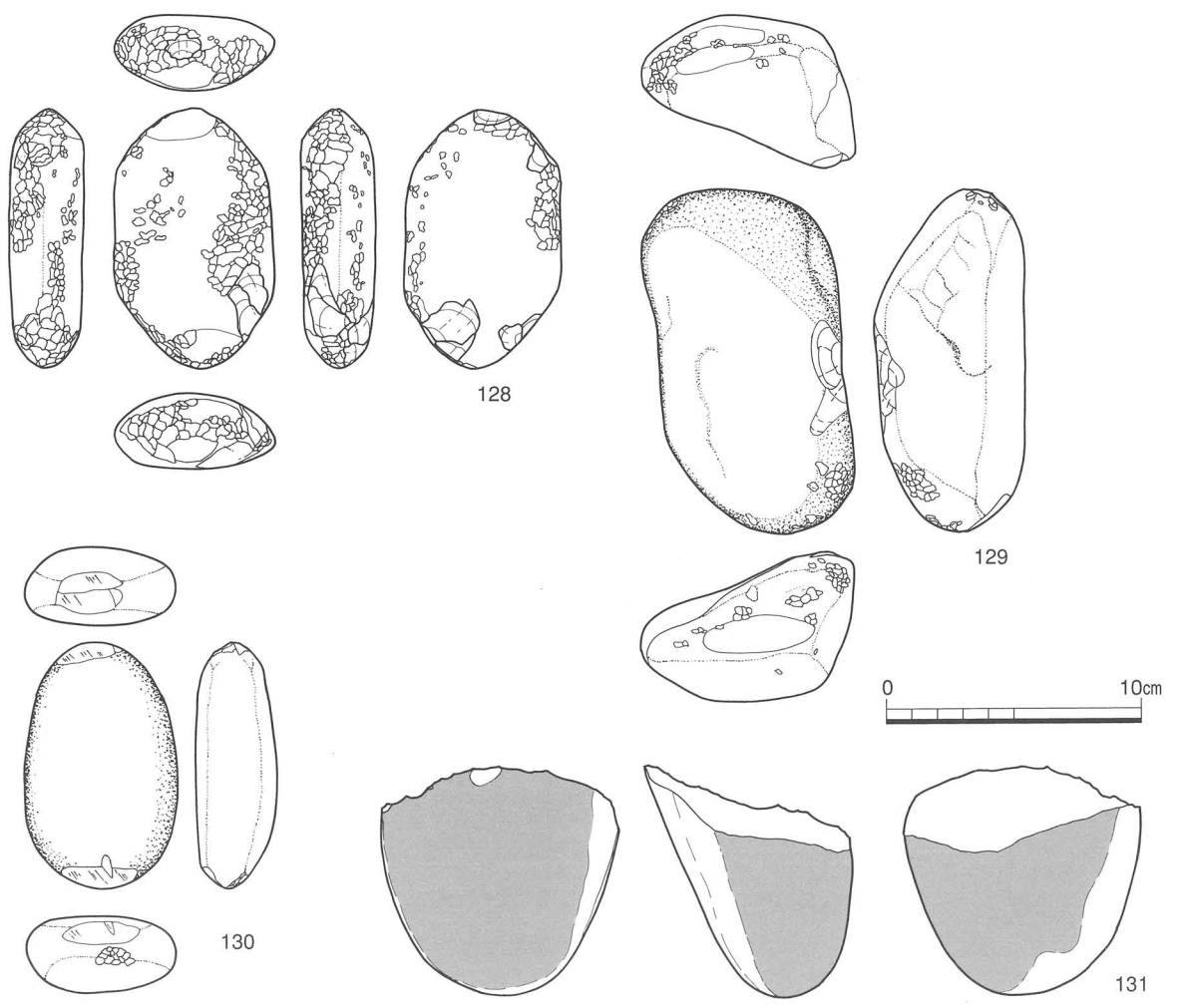
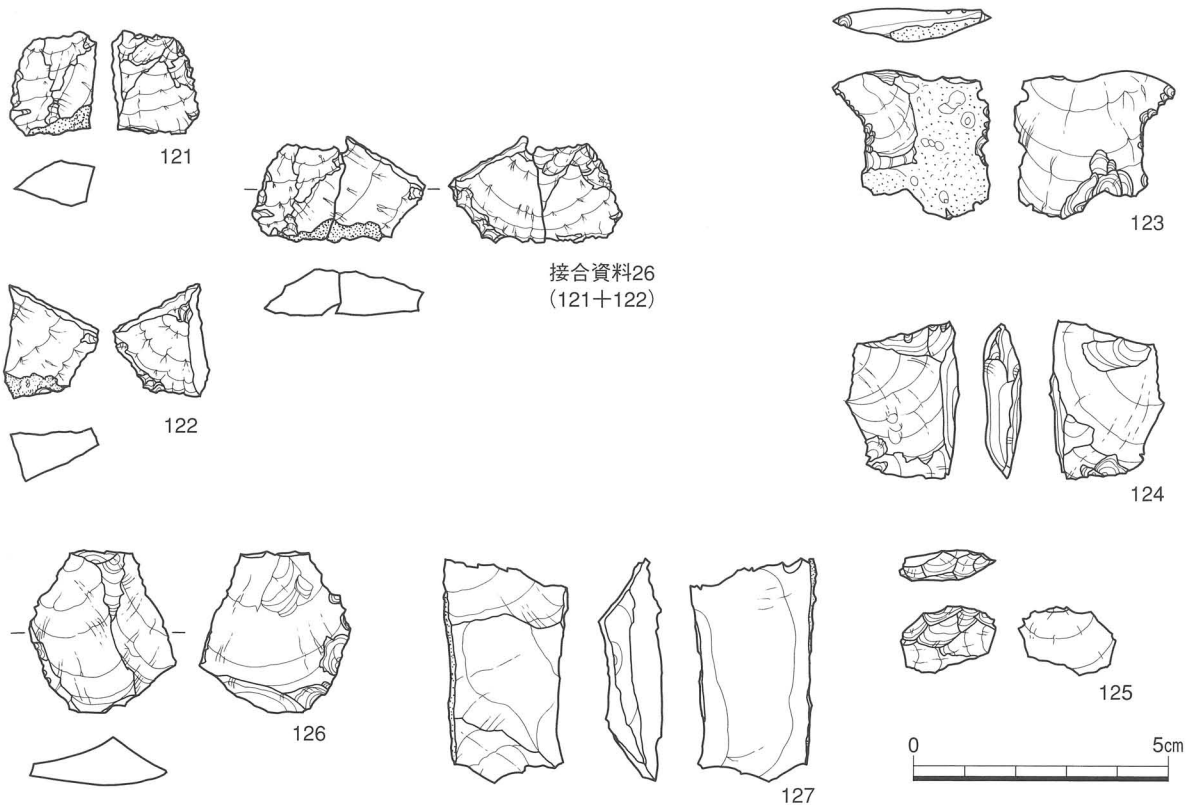
123～126は二次加工剥片、127は剥片である。

【 接合資料26 】

偶発的な折れによる接合資料である。打点部を境に剥離軸に沿うような格好で裂けたようなものも見受けられ、不純物によるイレギュラー等を勘案すると、剥片の獲得時点で折れた可能性も十分考えられる。

砂 岩

礫石器はすべて砂岩製である。128～130は局部磨製礫（敲石）である。重量は129が730gと突出して重



第29図 区層遺物実測図（黒耀石・砂岩）

く、128・130は230～250g前後と相対的に軽量である。いずれも扁平気味の長楕円磔を用い、両端部に顕著な磨面が残される。131は磨石である。表面は光沢を放っており、磨痕と判断した。

磔

磔は58点出土した。重量別分布状況を第14図に示す。N30グリッドで重いものが多く出土している。表3によると、50g以下のものが27%と最も多く、ついで201～300gが15%、501～1,000gが11%である。磔の形状は、完形磔が31%、割磔が69%である。磔の赤化状況は強く赤化しているもの22%、弱い赤化が認められるもの76%、赤化していないものは1点のみであった。

表4 区層出土石器組成表

	ナイフ形 石器・未 製品	削器	二次加工 剥片	微細剥 離ある剥 片	剥片	碎片	石核	局部磨 製磔	磨石	計
ホルンフェルス(I)	13	1	17	13	164	9	3			220
流紋岩(A6)	2		1	10	52	2	2			69
流紋岩(AA)				2	15					17
流紋岩(Z)					1		1			2
黒耀石(五女木・日東)			5		4					9
黒耀石(内屋敷UT遺物群)			1							1
黒耀石(白浜)						1				1
黒耀石(桑ノ木津留)					3					3
黒耀石(永迫316-329遺物群)					1					1
砂岩								3	1	4
計	15	1	24	25	240	12	6	3	1	327

表5 区層接合資料組成表

	ナイフ形 石器・未 製品	削器	二次加工 剥片	微細剥 離ある剥 片	剥片	碎片	石核	局部磨 製礫	磨石	計
接合試料1	3		3		31		1			38
接合試料2				1			1			2
接合試料3					1		1			2
接合試料4					2		1			3
接合試料5	2									2
接合試料6				1	1					2
接合試料7			2							2
接合試料8			2		2					4
接合試料9				1	3					4
接合試料10				1			1			2
接合試料11				1	3					4
接合試料12				1	1					2
接合試料13				1	2					3
接合試料14					3					3
接合試料15					2					2
接合試料16					3					3
接合試料17					2					2
接合試料18					2					2
接合試料19					2					2
接合試料20					2					2
接合試料21					2					2
接合試料22					2					2
接合試料23					2					2
接合試料24					2					2
接合試料25					2					2
接合試料26			2							2
計	5	0	9	7	72	0	5	0	0	98

第2節 V・VI層の調査

V・VI層は、遺物出土量が少ないため、V層全面掘削、VI層トレンチ掘削とし、遺物・遺構検出された地点周辺を範囲拡張して掘削した。

VI層において、集石遺構2基が検出された。これらは構成礫数は少ないが、層全体の出土礫が非常に少数であること、その中で集中区域が確認されたことから、集石遺構と認定した。

遺物は石器が数十点出土した。ただし、第31図の縄文早期石器ブロック内出土石器は、石材・器種から判断し、縄文早期石器ブロックに伴う可能性が高い。

遺構

1号集石

L28グリッドで検出された。集石の範囲は、長軸1.0m短軸0.6mである。総重量2,267g、17点の礫で構成される。4点が完形礫であり、13点で赤化が確認された。接合作業の結果、6点3個体が接合した。

2号集石

L29グリッドで検出された。集石の範囲は、長軸0.8m短軸0.4mである。総重量6,282g、9点の礫で構成される。すべて割礫である。7点で赤化が確認され、いずれも断面まで赤化している。このうち1点は、重量5,500gの大型礫である。5点2個体が接合した。

遺物

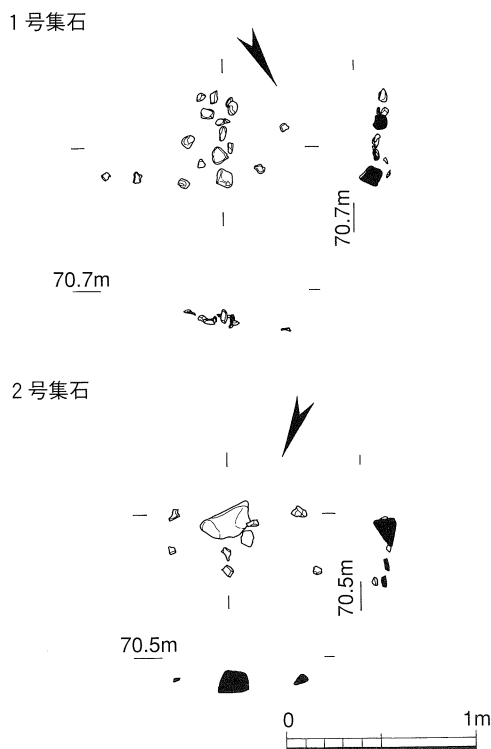
縄文石器ブロック範囲出土のものを除くと、ナイフ形石器1点、尖頭器1点、尖頭状石器1点、チョッパー1点、微細剥離ある剥片3点、剥片14点、石核1点が出土した。

132は尖頭器である。樹痕による攪乱と思われる地点から出土した。そのため、Va層のレベルで出土し、第31図の分布図に掲載しているが、明確な層位は不明である。両面加工が施され、ほぼ左右対称形を呈する。表面基部と表裏面の稜線は潰れ、磨痕が確認される。

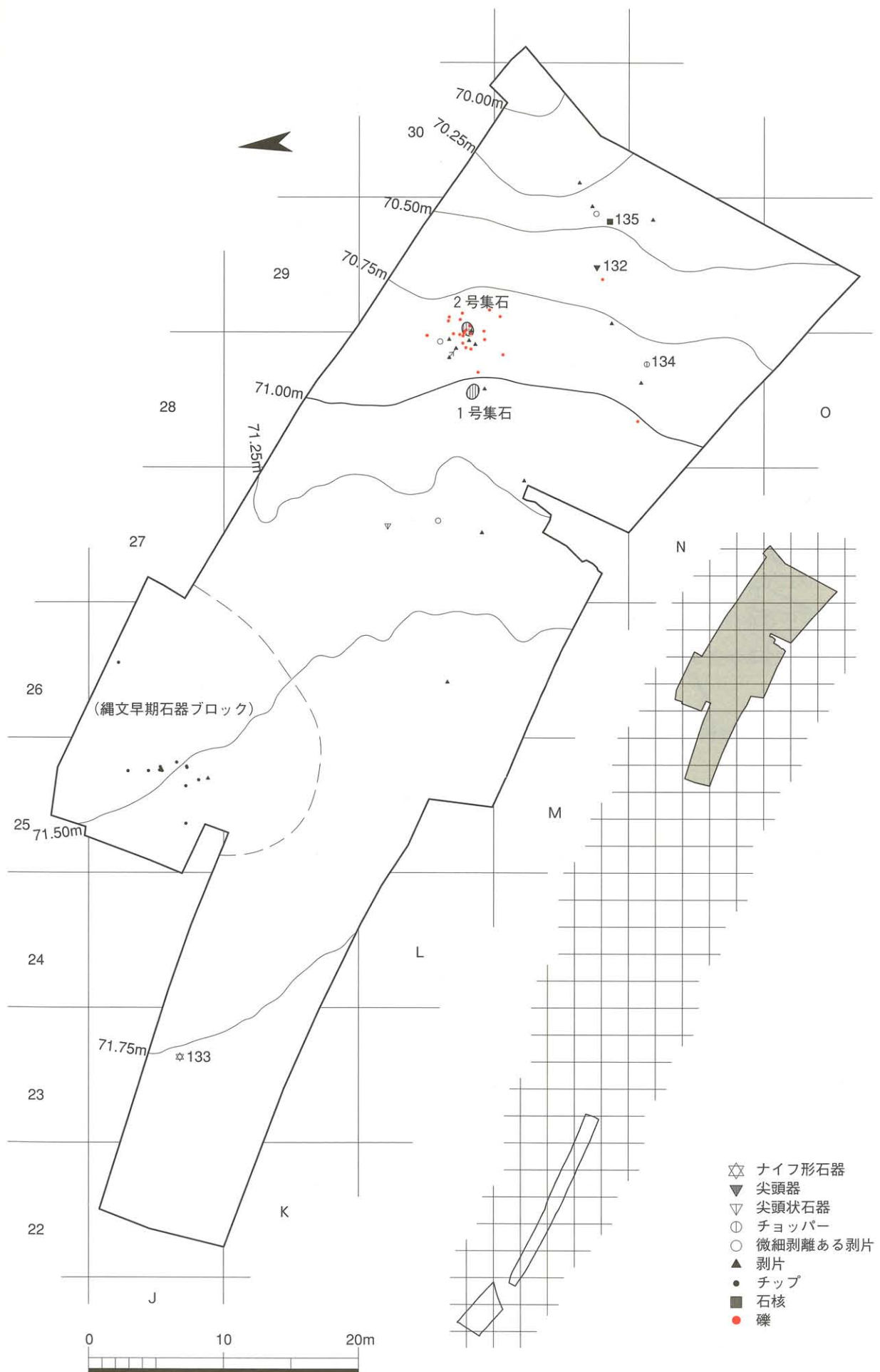
133はナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、稜側縁にブランディング加工が施される。刃部は微細剥離痕が確認される。

134はチョッパーである。頁岩偏平礫を素材とし、裏面から大きく打ち割った後、下縁部に二次加工を施し刃部が作出される。裏面は礫面が残り加工は施されない。

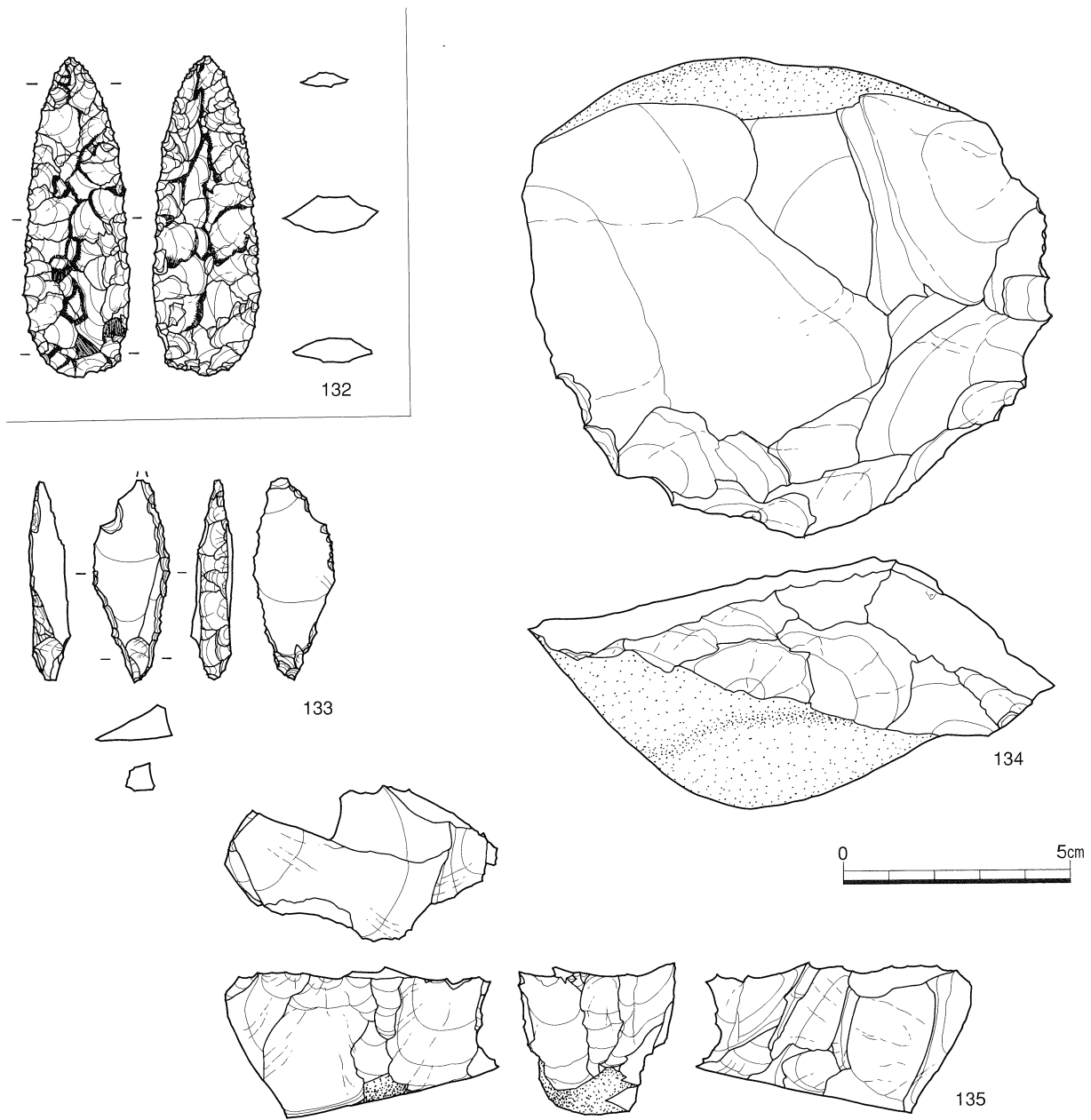
135は、石核である。船野型細石刃核のブランクの可能性はある。



第30図 VI層遺構実測図



第31図 V・VI層遺構配置図・遺物分布図



第32図 V・VI層遺物実測図

第3節 III・IV層の調査

遺物量、遺構数、遺物密度ともに最も多い文化層である。縄文草創期～早期に相当する。

遺構の検出状況

土坑21基、集石遺構7基が検出された。遺構の時期や先後関係については、遺構埋土と包含層土が似通っていたため、検出面と当時の掘り込み面の合致は困難であった。しかし、3号集石の土坑壁面下半部で3号土坑の埋土が確認されたため、3号集石は3号土坑より確実に新しく、これらの遺構群は最低でも2時期の所産であることが判明した。これに基づいて検討したところ、3号土坑を含めたV層上面～IVc層中で検出されたものと、3号集石を含むIVb上面～IVa層中で検出されたものに分けることができ、それぞれの遺構配置図を示した(第34・39図)。

散礫

包含層III・IV層では、2,846点の礫が出土し、集石遺構の周囲で多く確認された。特に、3号・7～9号集石の周囲に集中し、礫の層を取り除くと集石遺構が現れる様な状態であった。散礫及び集石遺構の礫は、石材についてみると数点の頁岩をのぞいてすべて砂岩で構成される。そのほかの諸特徴は、①重量、②赤化の状態、③完形の是非について、表6に示した。50g以下の礫が55%を占め、51g～100gが21%、101g～200gが13%と続く。小型の礫が多いのが特徴である。赤化の状態は、強い赤化をしているもの6%、弱い赤化が確認されるもの63%、赤化していないもの31%であった。形状は割礫が94%を占める。

遺物出土状況

土器及び石器が出土した。J25グリッドを中心とした地点で、石器の集中出土範囲が確認された(石器ブロックとする)ため、石器の説明は石器ブロックの内外で分けて行なった。

遺構

V層上面～IVc層検出遺構

10基の土坑が検出された。

なお、土坑の埋土は類似するものが多く、A～Cの3層の基準土層を設定した。図中の土層断面に示す。基準土層A・黒褐色の軟質土にBがブロック状に入る。やや粘質があり、きめの細かい土質。

基準土層B・黒褐色の硬く締まったブロック状の土壌。黄褐色軽石を含む。白色・青灰色・橙色粒を含む。

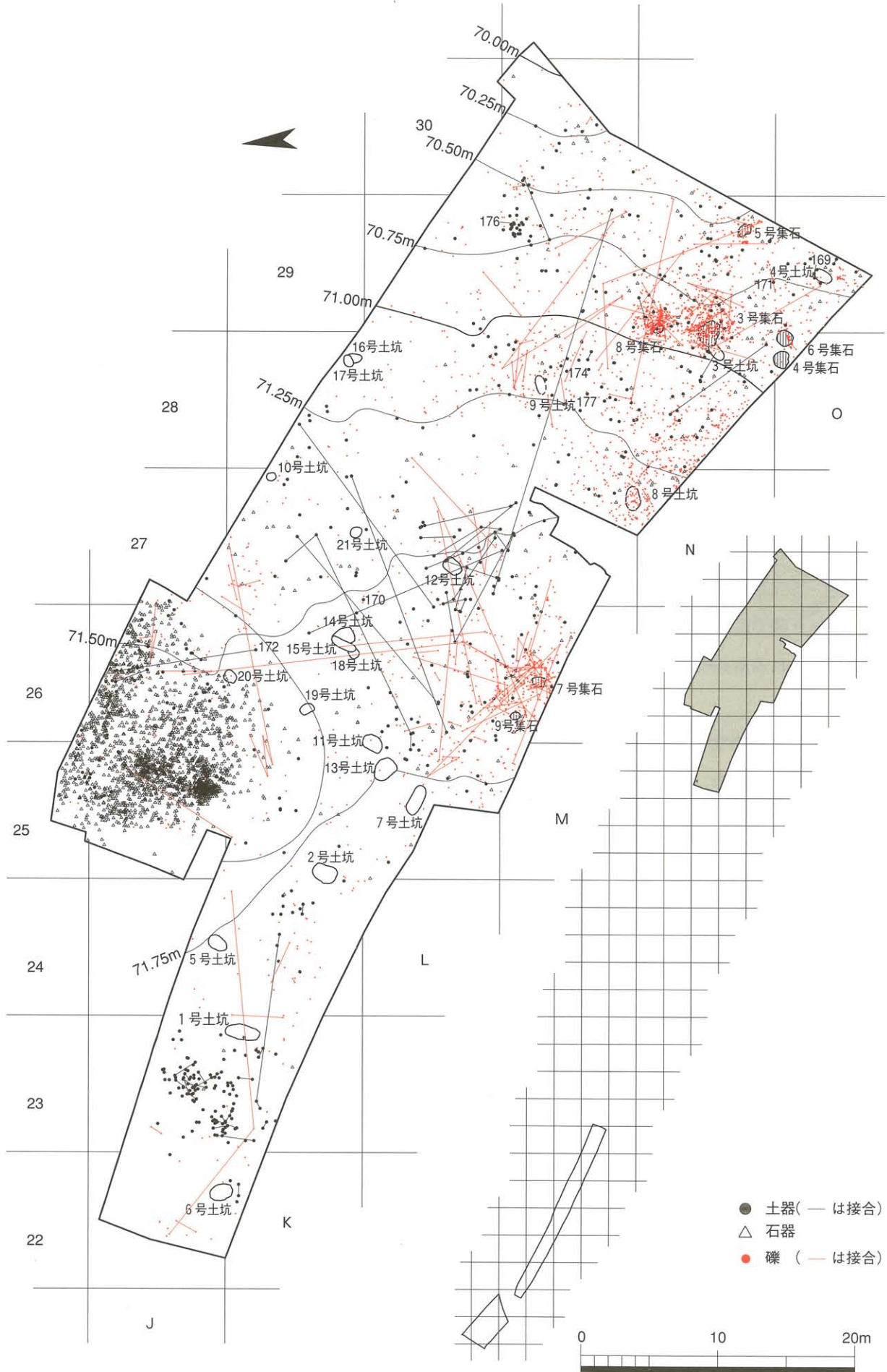
おそらく小林軽石と考えられる。下方は締まり、密度が高くなる。

基準土層C・黒褐色の硬く締まった土壌であるが、Bと比べ若干軟らく、やや明るい色調。粘質を帯びる。

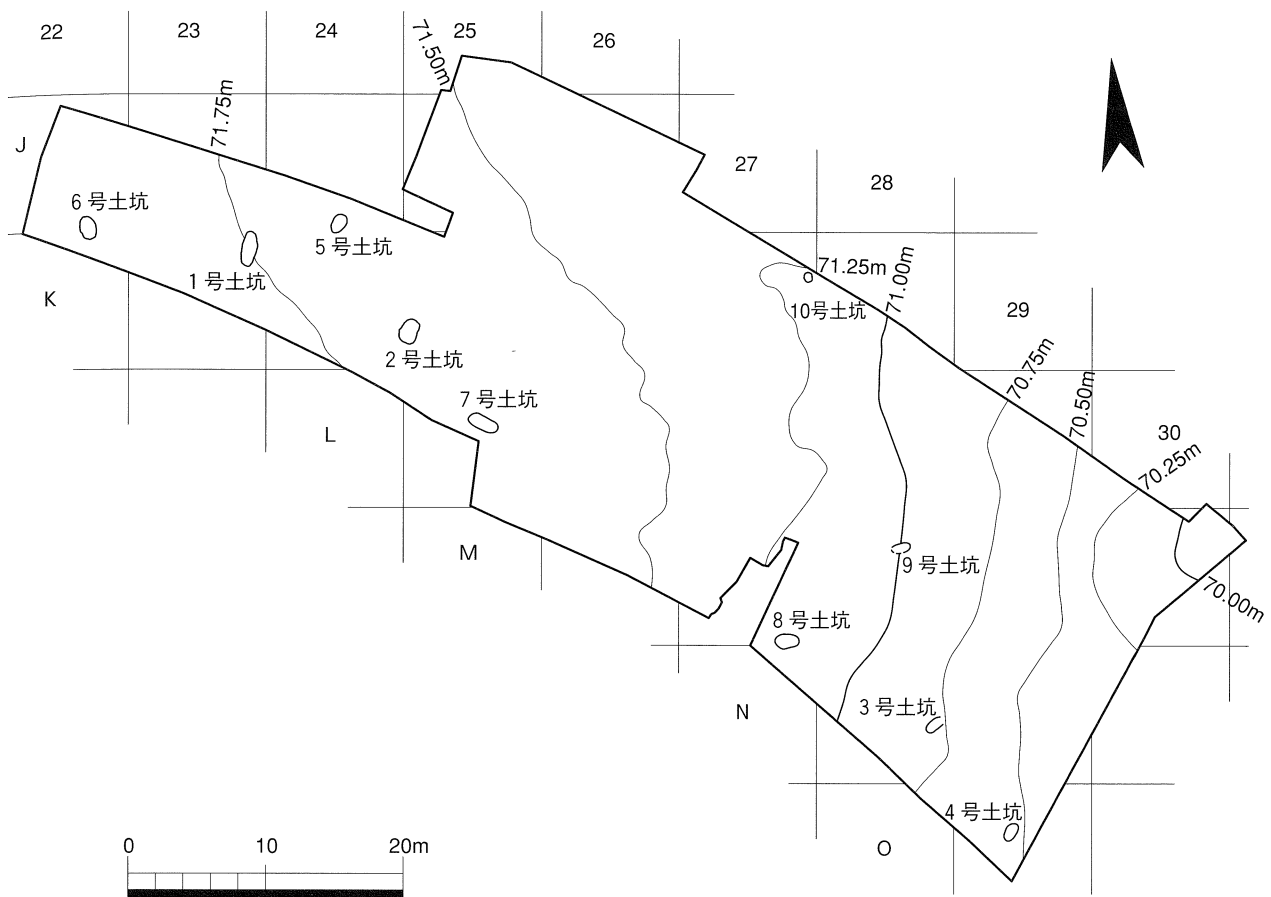
Bの軽石を含む。

1号土坑

K23グリッドで検出された。平面形状は、長軸2.6m短軸1.1mの楕円形で、床面の形状は長軸1.1m短軸0.6mの隅丸方形を呈する。床面には長軸上に小ピットを2つ有する。小ピットの深さは0.3m程度で若干内傾斜する。残深2.1mで、断面形状は80°からほぼ垂直に立ち上がり、検出面近くでラッパ状に広がる。北側壁面に深さ0.8mのテラスを有する。埋土の状況からテラス部分は比較的早い時期に埋まったと考えることができる。基準土層AとBが確認された。土坑埋土8, 14, 16について火山灰分



第33图 III·IV層遺構配置图·遺物分布图



第34図 IVc~V層検出遺構配置図

析を、埋土 8, 11, 14について植物珪酸体分析を行なった。

2号土坑

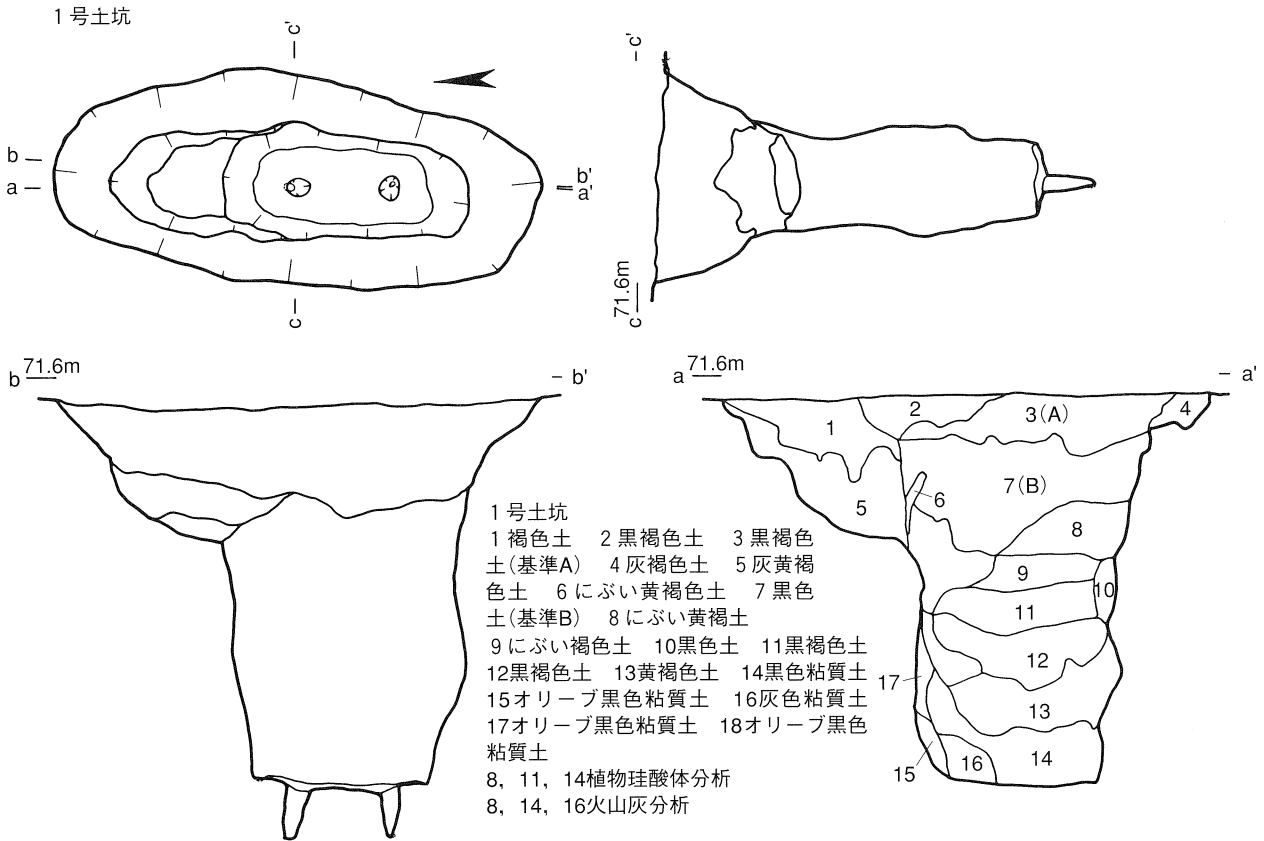
K25グリッドで検出された。平面形状は、長軸1.8m短軸1.4mの楕円形で、西側立ち上がりにテラスを有する。床面の形状は横1.2m縦0.6mの隅丸方形を呈す。床面には長軸上に深さ0.3mの小ピットを2つ有する。小ピット2点の深さは約0.35mでやや内側へ傾いている。土坑の残深は2.1mで、床面はアワオコシ風成層まで掘削している。断面形状は、80°以上の勾配で立ち上がり、検出面付近でラップ状に開く。埋土は、1層が基準土層Aと対比される。2, 3層に褐色軽石粒を含む。埋土3で火山灰分析を、埋土3, 15, 16及び床面小ピット2点の植物珪酸体分析を行なった。

3号土坑

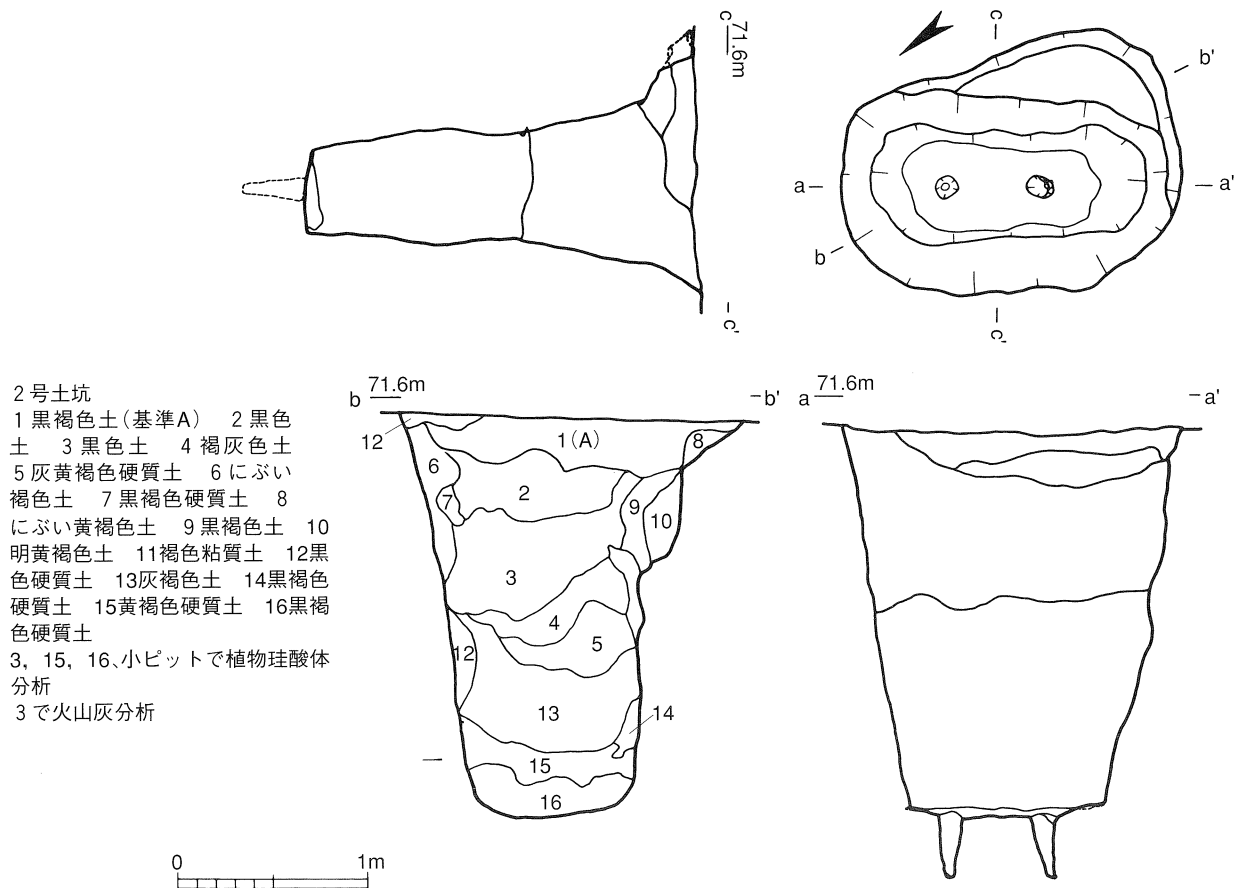
N28グリッドで検出された。北側を3号集石に切られる。平面形状は長軸1.16m短軸1.1mの楕円形で、床面形状は長軸0.75m短軸0.5mの方形を呈する。床面には長軸状に2つの小ピットを有し、深さは0.3mである。残深1.5mで、断面はやや傾斜を持って立ち上がる。埋土は、基準土層A・B・Cが確認された。土層断面図中央で上下16点の植物珪酸体分析を実施した。

4号土坑

O29グリッドで検出。平面形状は長軸1.3m短軸0.75mの楕円形で、床面形状は長軸1.15m短軸0.55mの隅丸方形である。床面長軸上に深さ0.2mの小ピットを2点有す。残深0.7mで、断面はほぼ垂直に立ち上がり下部はオーバーハングしている。土層断面図中央で上下16点の植物珪酸体分析を実施した。

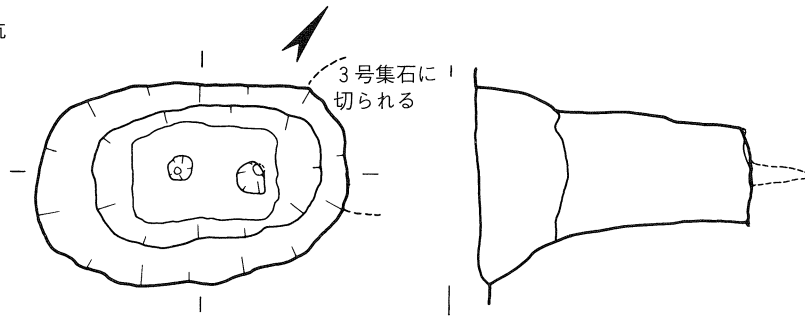


2号土坑

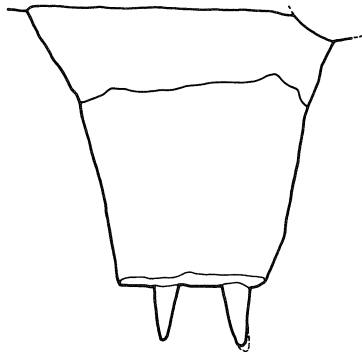


第35図 IV C~V層遺構実測図

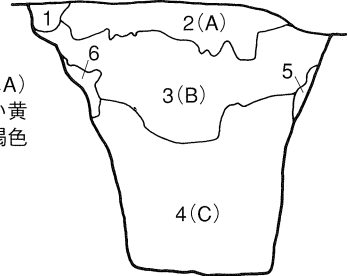
3号土坑



70.7m

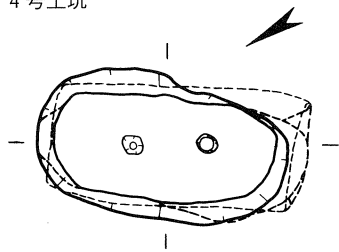


70.7m

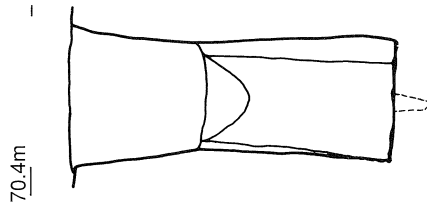
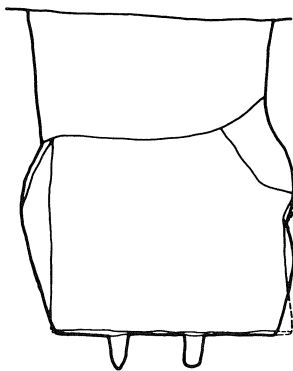


3号土坑
 1 褐色土 2 灰黄褐色土 (基準A)
 3 黒褐色土 (基準B) 4 にぶい黄
 褐色粘質土 (基準C) 5 明黄褐色
 粘質土 6 黒褐色硬質土
 植物珪酸体分析実施

4号土坑

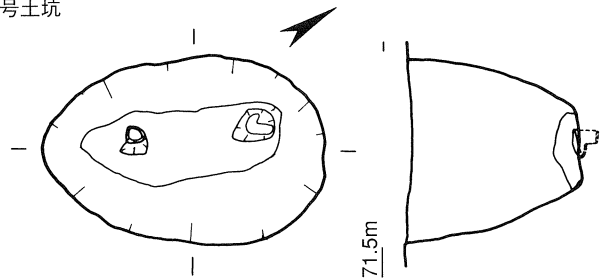


70.4m

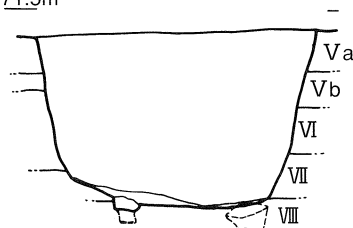


70.4m

5号土坑



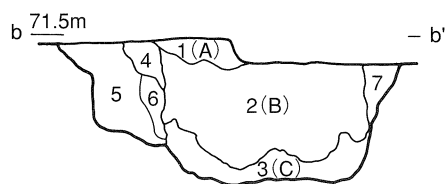
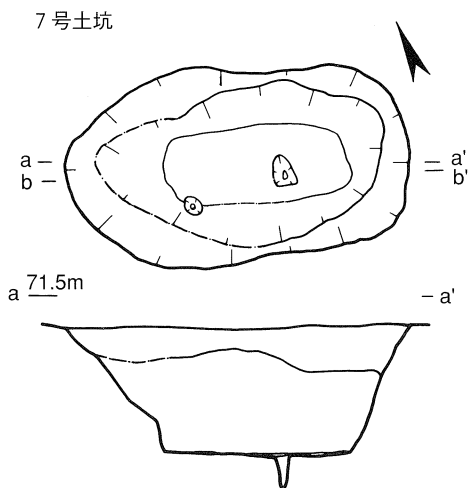
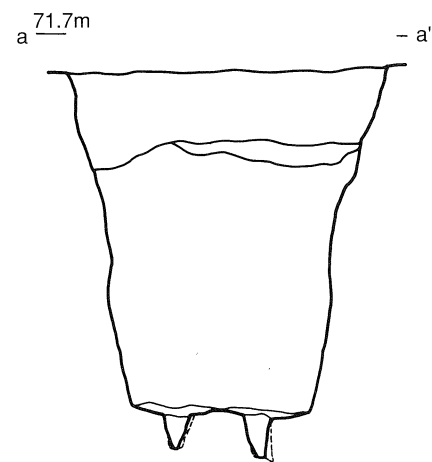
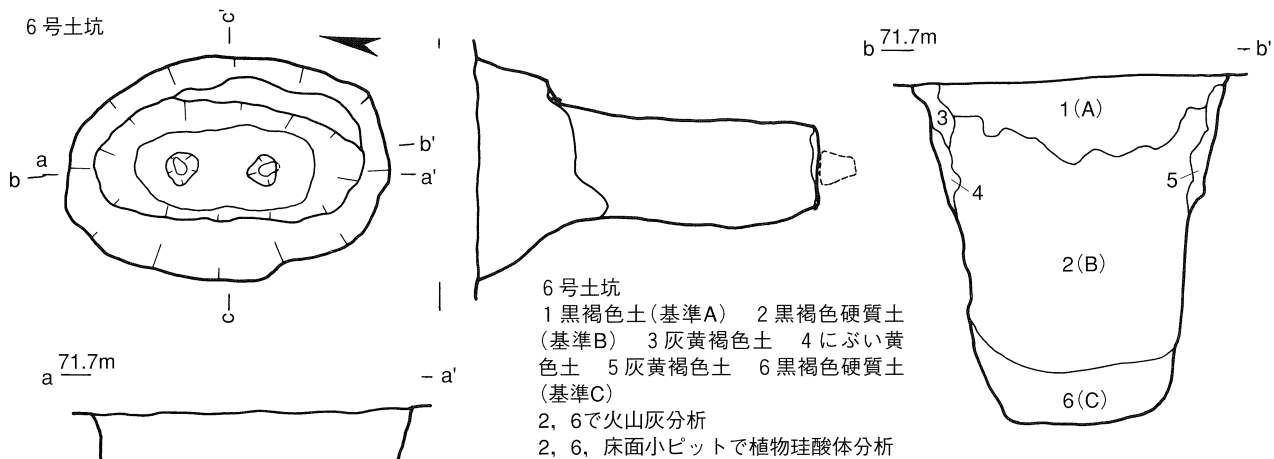
71.5m



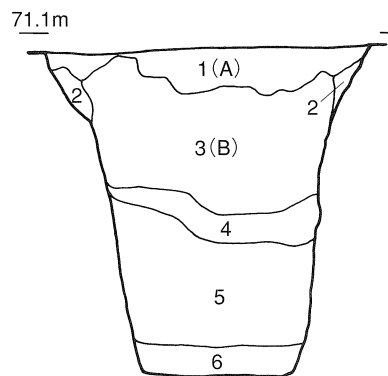
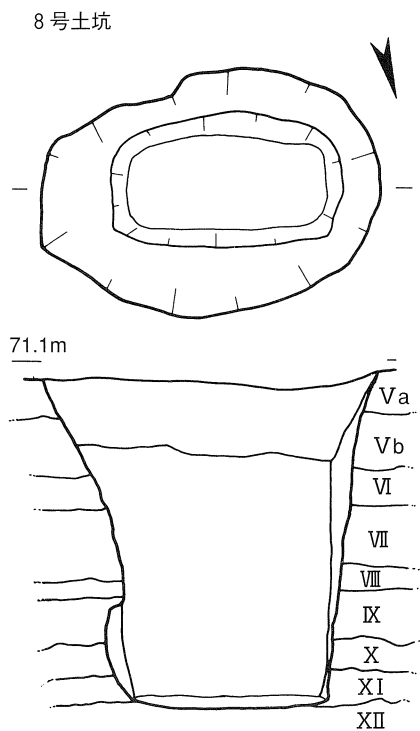
71.5m



第36図 IV C ~ V層遺構実測図

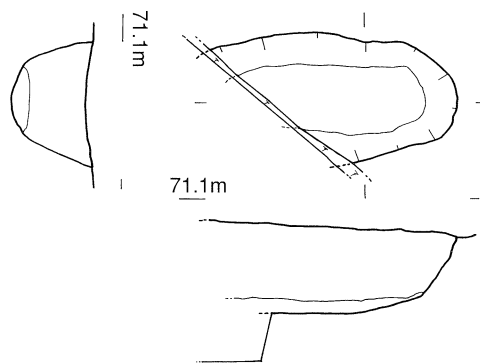


8号土坑
 1 黒褐色土(基準A) 2 にぶい黄褐色土 3 黒褐色硬質土(基準B) 4 にぶい黄褐色土 5 黒褐色土
 1, 3~6で植物珪酸体分析

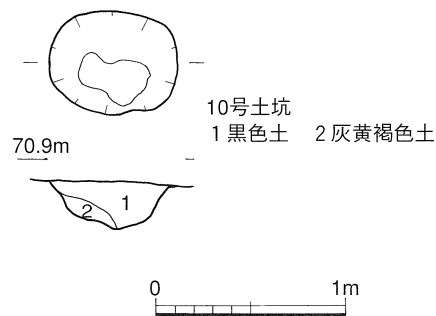


第37図 IV C~V層遺構実測図

9号土坑



10号土坑



第38図 IV C～V層遺構実測図

5号土坑

J24グリッドで検出された。平面形状は長軸1.5m短軸1.0mの楕円形で、床面は長軸1.0m短軸0.4の長楕円形を呈する。床面には長軸上に深さ0.15mの小ピットを2つ有する。残深は0.9mで、Ⅷ層上面まで掘削している。断面は丸みを帯びて立ち上がる。埋土1層で火山灰分析、1、2層及び床面小ピットで植物珪酸体分析を実施した。

6号土坑

J22グリッドで検出された。平面形状は長軸1.5m短軸1.2mの楕円形で、西壁に小テラスを有する。床面は長軸0.9m短軸0.45mの長楕円形で、長軸上に2つの小ピットを有する。小ピットは深さ約0.2mで若干内側へ傾斜する。土坑の残深は1.8mでアワオコシ風成層まで掘削している。掘り込みの傾斜は 80° ～ 90° で立ち上がる。埋土は、基準土層A・B・Cが確認された。主体となる2・6層は硬くしまりがあり、壁際にやや軟らかい層が確認される。2、6層で火山灰分析、2、6層と床面小ピットで植物珪酸体分析を実施した。

7号土坑

L25グリッドで検出された。平面形状は長軸1.8m短軸1.0mの楕円形で、床面は長軸1.0m短軸0.4mの隅丸方形である。床面長軸上に1つ、東側隅に1つの小ピットを有する。深さは0.2mである。残深0.7mで緩やかに立ち上がる。埋土は、基準土層A・B・Cが確認された。2、3、5層が黄褐色軽石を含み硬く締まる。2層で火山灰分析、2、3層及び床面小ピットで植物珪酸体分析を実施した。

8号土坑

M27グリッドで検出された。平面形状は長軸1.8m短軸1.3mの楕円形を呈する。床面は長軸1.05m短軸0.5mの隅丸方形を呈する。小ピットはなく、平坦である。土坑の残深は1.75mで、Ⅻ層まで掘削している。壁への立ち上がりはしっかりしている。埋土は基準土層A・Bが確認された。1、3～6層で植物珪酸体分析を実施した。

9号土坑

M28グリッドで検出された。長軸 $1.4+a$ m短軸0.7mの長楕円形を呈する。床面は長軸1.0m短軸0.35mの長楕円形で平坦である。小ピットはない。断面は丸みを帯びて立ち上がる。埋土は軟質の褐色土層である。

10号土坑

K27グリッドで検出された。平面形状は長軸0.7m短軸0.55mの楕円形で、床面は長軸0.35m短軸0.25mの不定形を呈する。残深0.25mで、断面は半円形である。埋土は、1層が硬く締まった黒色土、2層がしまりのない灰黄褐色土で共に黄褐色軽石を含む。

IVb層上面～IVa層検出遺構

土坑11基と集石遺構8基が検出された。

11号土坑

L25グリッドで検出。平面形状は楕円形で長軸1.5m短軸1.1mを測る。床面は長軸0.9m短軸0.4mの長方形である。床面の長軸上に深さ0.2mと0.1mの小ピットを有する。土坑の残深は1.85mを測る。立ち上がりは、80°から垂直で下半部はオーバーハングしている。埋土は、基準土層A・Bが上位に堆積している。最下層はやや粘質を帯びる。床面はアワオコシ層まで掘削している。

12号土坑

L27グリッドで検出された。平面形状は楕円形で、長軸1.5m短軸1.0mである。床面は隅丸方形を呈し、長軸0.9m、短軸0.4mを測る。床面長軸上に深さ0.3m、0.15mの小ピットを2つ有する。土坑の残深は1.8mで、断面形状は、下半部はほぼ垂直、上半部はやや開き気味に立ち上がる。床面はアワオコシ層まで掘り込まれている。埋土は、基準土層A・Bが確認された。

13号土坑

L25グリッドで検出された。平面形状は、長軸1.8m短軸1.3mのいびつな楕円形で南壁にテラスを有する。床面形状は長軸1.1m短軸0.6mの隅丸方形を呈する。床面小ピットを長軸上に2つ有する。深さ0.35mと0.3mである。土坑の残深は1.0mでやや開き気味に立ち上がる。床面は始良Tn火山灰層まで掘削。埋土は、基準土層Bが確認された。

14号土坑

K26グリッドで検出された。平面形状は楕円形で、長軸1.6m短軸1.3mを測る。床面は長軸0.85m短軸0.5m隅丸方形で、床面に小ピットを1つ有する。深さ0.35mである。土坑の残深は1.4mで、15号土坑に一部切られている。床面はX層上面まで掘り込んでいる。断面形状はゆるやかな立ち上がりである。

15号土坑

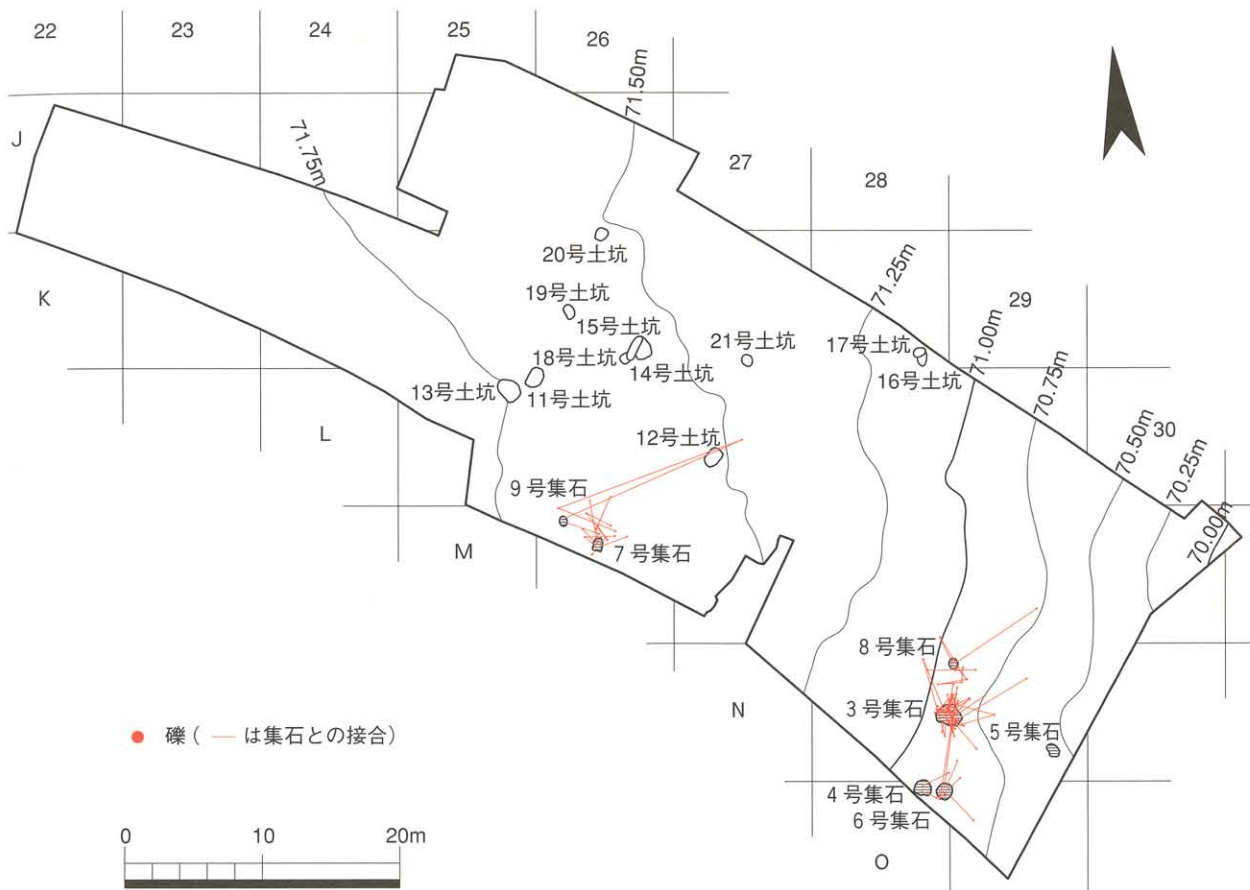
K26グリッドで検出された。平面形状は長軸1.75m + a 短軸0.8mの長楕円形で、土坑の残深は0.4mである。14号土坑を切っている。床面に小ピットは確認されない。

16号・17号土坑

K28グリッドで切り合って検出された。16号土坑が17号土坑よりも古い。16号土坑の平面形状は、楕円形で、長軸0.9m + a 短軸0.7mを測る。土坑の残深は0.25mである。打製石鏃が出土したが、遺構に伴うかどうかは不明である。17号土坑の平面形状は隅丸方形で、長軸0.9m短軸0.55mである。土坑の残深は0.2mと浅い。

18号土坑

K26グリッドで検出された。15号土坑に切られている。平面形状は隅丸方形で長軸1.0m + a 短軸0.6mを測る。床面は長軸0.8m + a 短軸0.4mの隅丸方形である。土坑の残深は0.3mで、断面は丸みを



第39図 IV層上～IVa層検出遺構配置図

帯びて立ち上がる。床面は平坦で、小ピットはない。

19号土坑

K26グリッドで検出された。平面形状は、長軸1.05m短軸0.7mの楕円形である。床面は長軸0.3m短軸0.2mのいびつな楕円形である。断面はすり鉢状を呈し、土坑の残深は0.35mである。

20号土坑

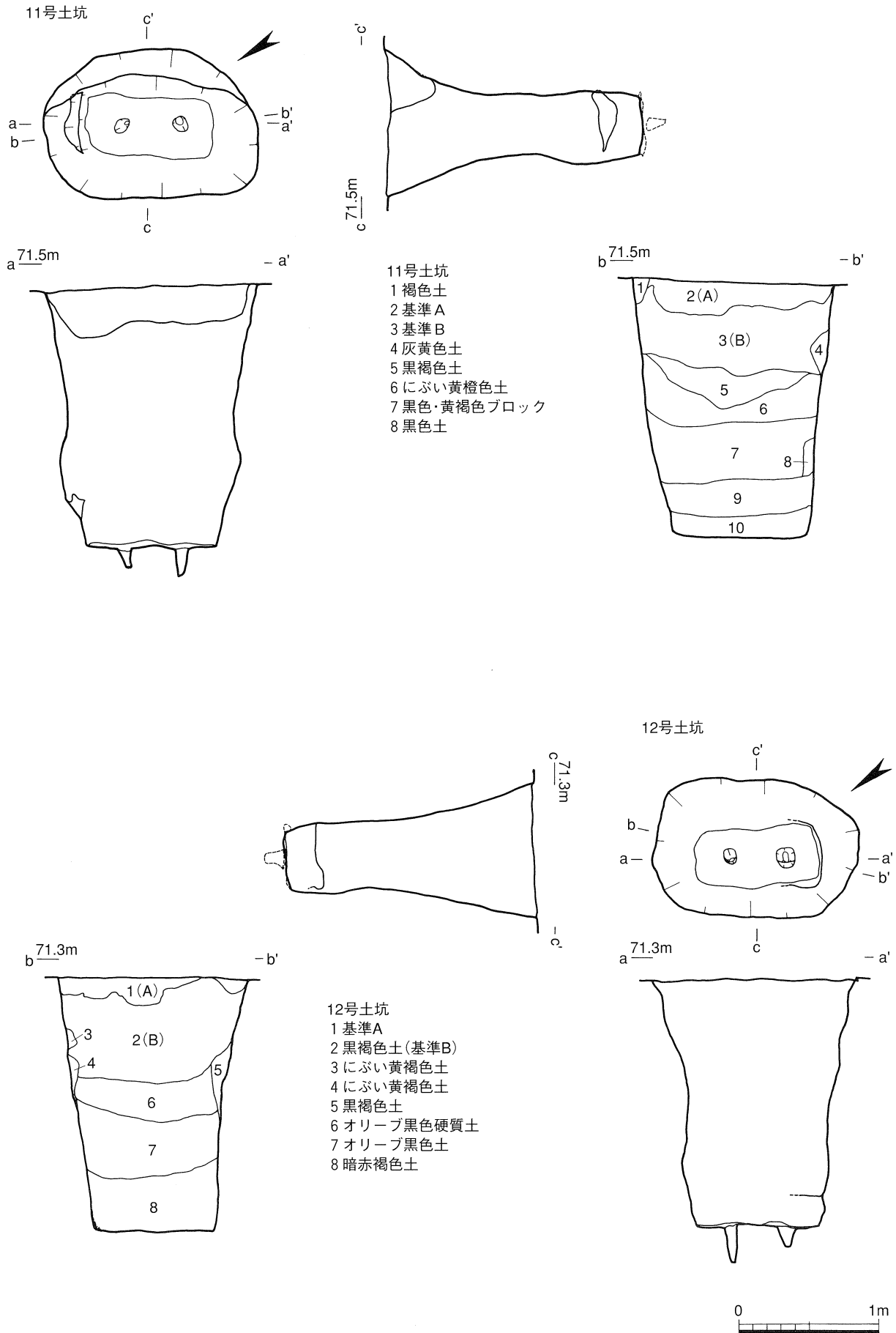
K26グリッドで検出された。平面形状は長軸1.0m短軸0.85mの楕円形を呈する。床面は長軸0.5m短軸0.4mの楕円形でやや東側に寄る。土坑の残深は0.25mを測り、断面形状は逆台形状を呈する。

21号土坑

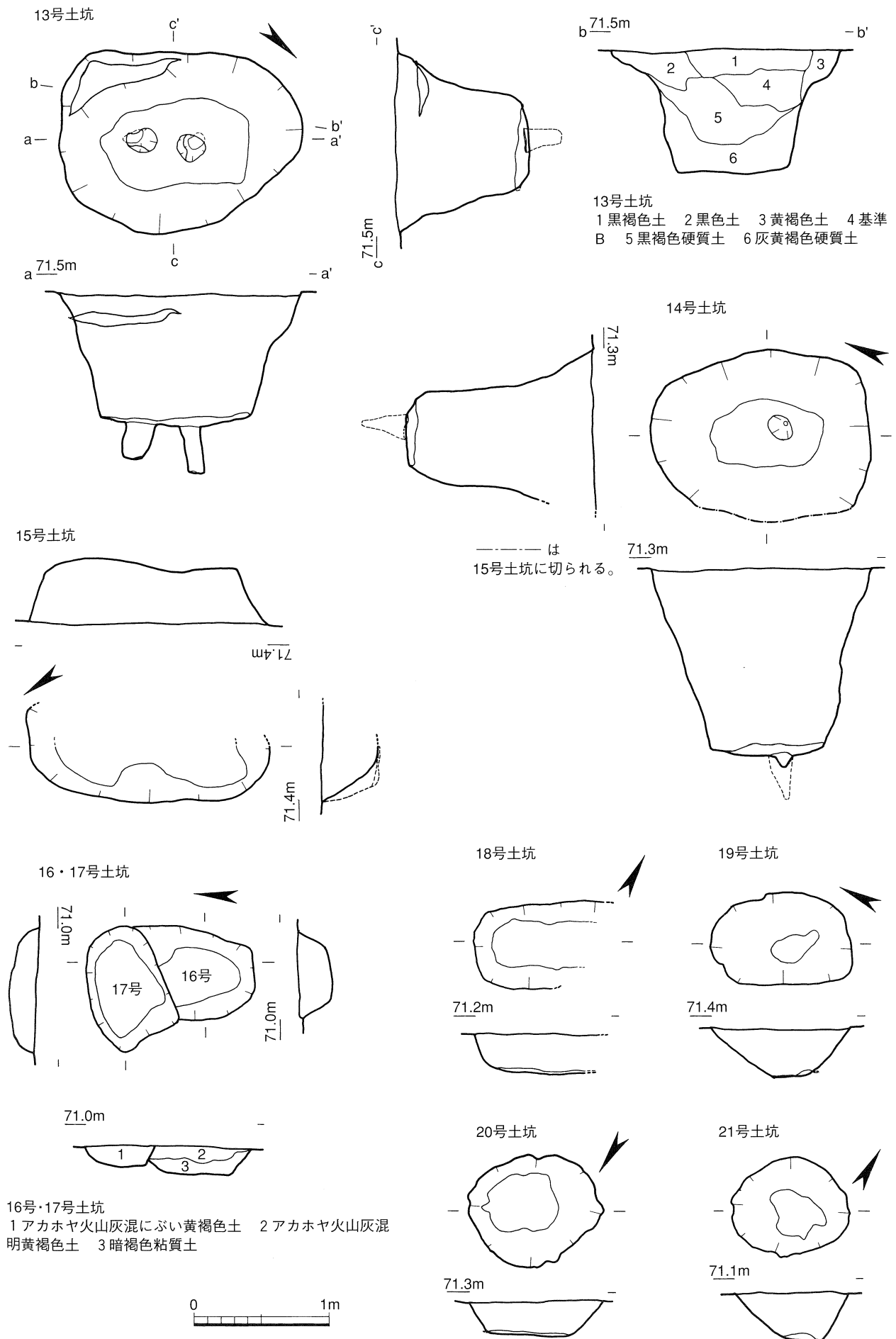
K27グリッドで検出された。平面形状は長軸0.85m短軸0.75mの楕円形で、床面は直径0.4mの不定形を呈する。土坑の残深は0.35mで、断面形状は逆台形状である。土坑の埋土は基準土層A・Bである。

3号集石

O32グリッドで検出された。掘り込みを有す。平面形状は、短軸1.7m長軸1.8mの不定形で1段のテラスを有する。埋土は、上層が暗褐色土でやや軟質で2mm前後の炭化物粒を含む。中～下層は黒褐色土でやや軟質。2～5mmの炭化物粒を含む。壁際は黒色が薄くなり若干濁った色になる。構成礫は、総重量51,712g、459点である。このうち完形礫は6点で、約6割の礫に赤化が確認された。接合の結果、153点66個が集石内接合し、1点が完形となった。24個体が包含層出土礫と接合した。

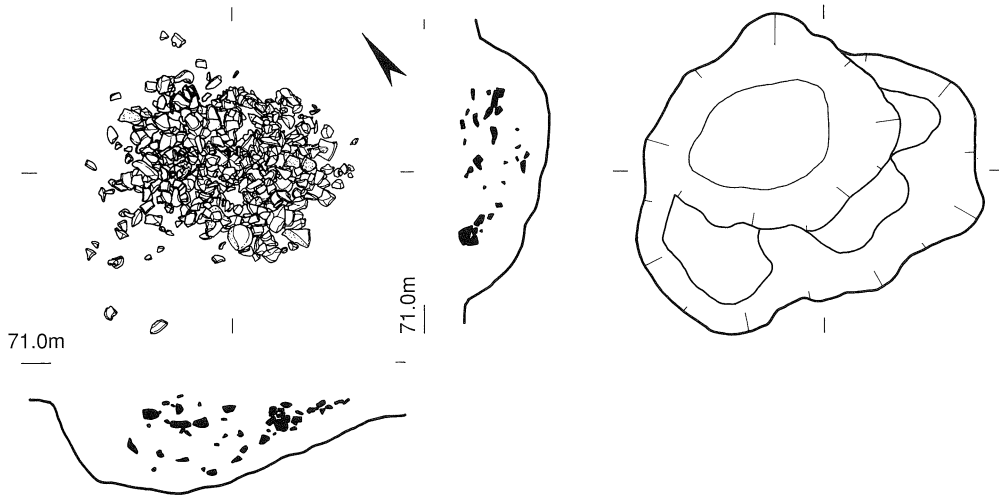


第40図 IV層上~IVa層遺構実測図

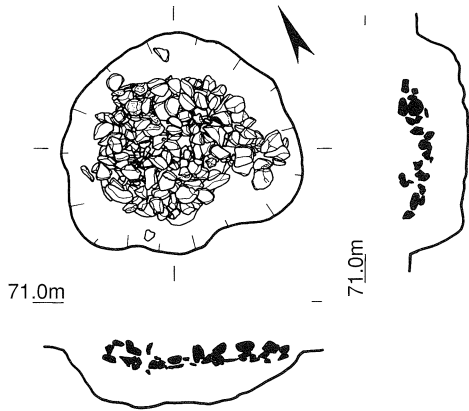


第41図 IV層上~IVa層遺構実測図

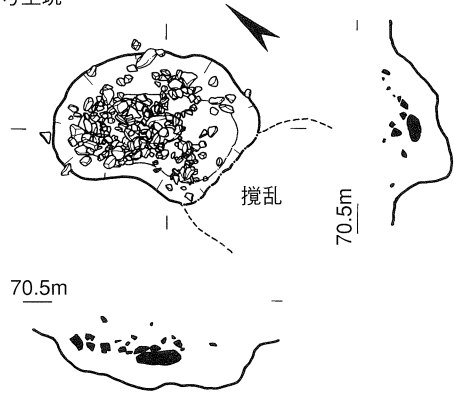
3号土坑



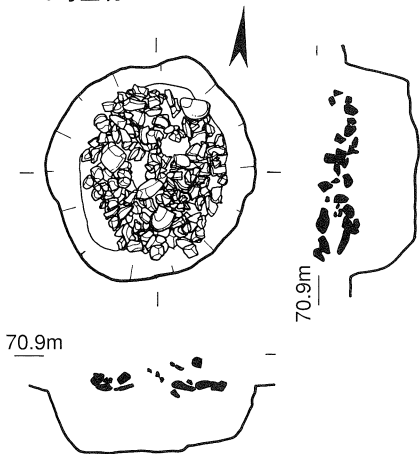
4号土坑



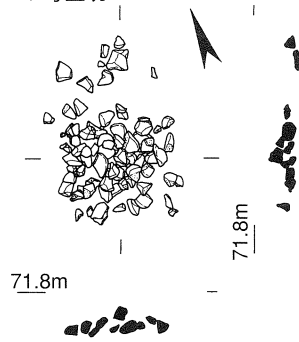
5号土坑



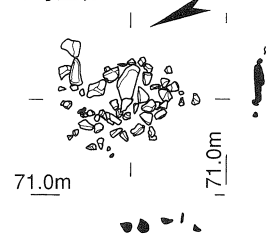
6号土坑



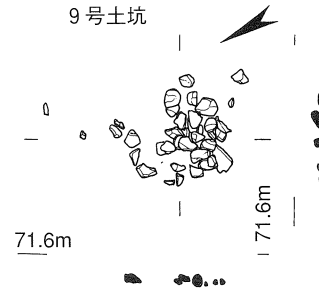
7号土坑



8号土坑



9号土坑



第42图 IV層上~IVa層遺構実測図

4号集石

O33グリッドで検出された。掘り込みを有し、土坑の平面形状は縦1.2m横1.3mの円形を呈する。深さは0.3mを測る。礫は短軸0.7m長軸1.0の範囲で比較的整って組合わさった状態で検出された。総重量60,498g、297点の礫で構成される。完形礫は43点である。約8割の礫に赤化が確認された。93点47個体が集石内接合し、16点が完形となった。5個体が包含層礫と接合。2個体が6号集石と接合。6号集石と同時期の可能性が考えられる。

5号集石

N32グリッドで検出。掘り込みを持つ。平面形状は短軸0.8m長軸1.1mの楕円形を呈するが、攪乱で一部崩壊している。深さは0.3mを測る。埋土は、礫集中部においては軟質の黒色土を呈し、3mm前後の炭化物粒が少量含まれる。掘削土に含まれる小林軽石粒も混入する。硬質の黄褐色土ブロックを含む。壁面、床面周辺では若干色が濁りやや軟質の暗褐色土を呈し、少量の炭化物粒を含む。土器片1点が上位で出土。礫は総重量15,231g、218点で構成される。小型で両面が摩耗しとろとろした感じのものが多し。4点の完形礫が確認された。約半数の礫が赤化してない。5点2個体が集石内接合した。包含層中の礫とは接合しなかった。

6号集石

O33グリッドで検出された。掘り込みを有する。土坑は長軸1.2m短軸1.1mの楕円形を呈する。深さは0.35m。礫は縦0.9m横0.8mの範囲に比較的整って組合わさった状態で検出された。埋土は、集石中央上位は褐色土を呈し軟らかくきめが細かい。2mm以下の炭化物を少量含む。中央底部～中位にかけては暗褐色を呈する。礫は総重量44,420g、229点の礫で構成される。完形礫は13点であり、完形に近い礫も多くみられる。約8割の礫に赤化が確認された。接合作業の結果、105点30個体が集石内で接合し、4個体が完形となった。8個体が包含層出土礫と接合した。また、2個体が4号集石と接合したため、4号集石と同時期の可能性が考えられる。

7号集石

M26グリッドで検出。掘り込みは確認されなかった。長軸1.0m短軸横0.7mの楕円形を呈する。総重量15,110g、81点の礫で構成される。完形礫は確認されず、すべての礫が断面まで赤化している。10点4個体が集石内接合し、包含層の礫と6個体の接合を確認した。

8号集石

N32グリッドで検出された。平面形は短軸0.6m長軸0.8に広がる。掘り込みは無く、71点の礫で構成される。すべて割礫で、総重量は8,012gである。46点に赤化が確認された。22点8個体の集石内接合がみられる。その他、10個体が包含層礫と接合した。

9号集石

M26グリッドで検出。掘り込みはなく、礫のみの集合である。縦0.6m横0.6mの範囲にほぼ収まる。総重量9,620g、43点の礫で構成される。完形礫はなく、すべての礫が断面まで赤化している。11点4個体が集石内接合し、包含層中の礫と3個体が接合した。

表6 包含層礫属性表

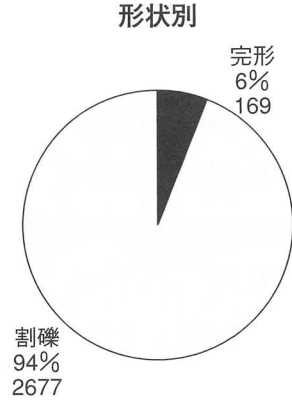
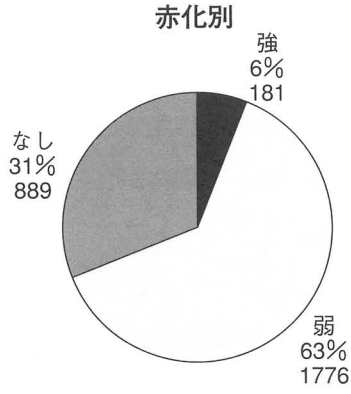
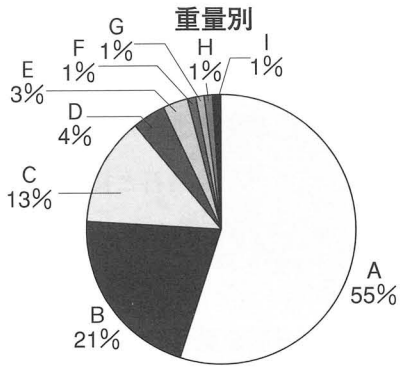
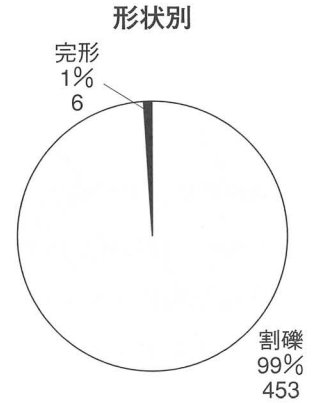
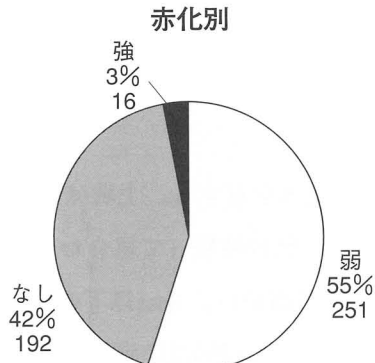
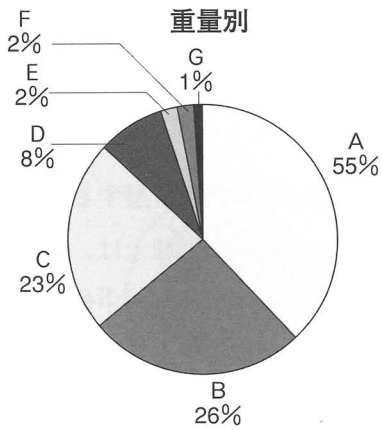
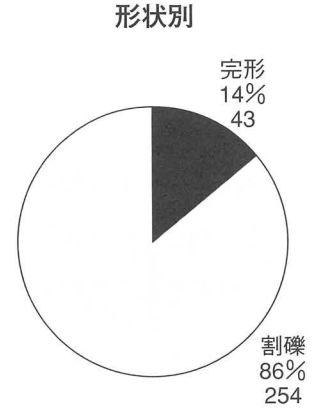
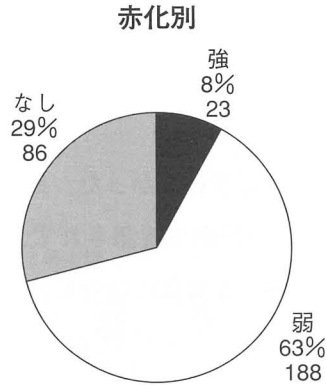
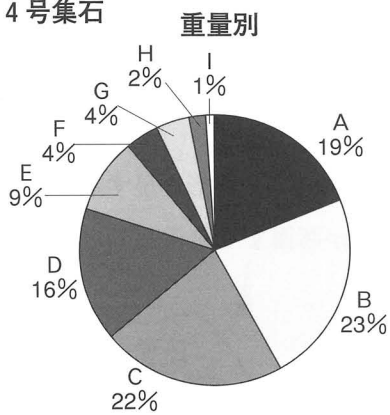


表7 集石遺構内礫属性表

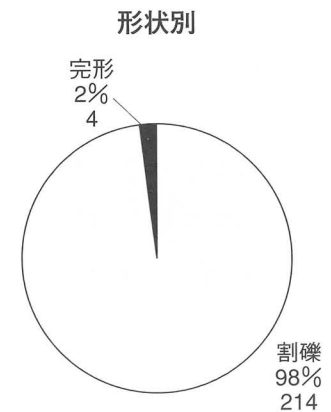
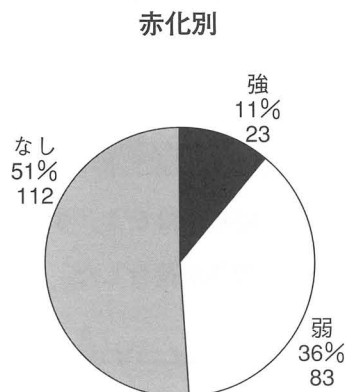
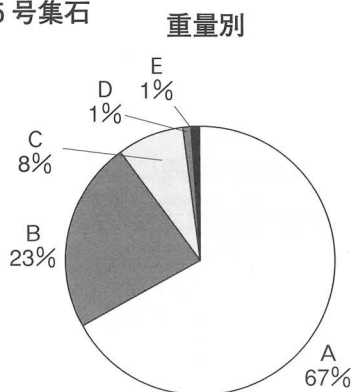
3号集石



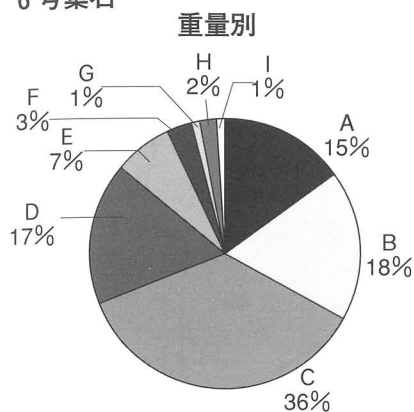
4号集石



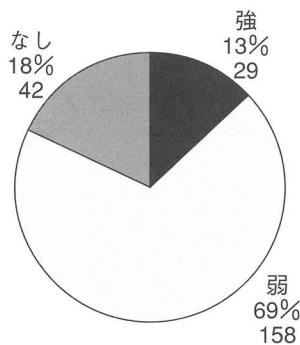
5号集石



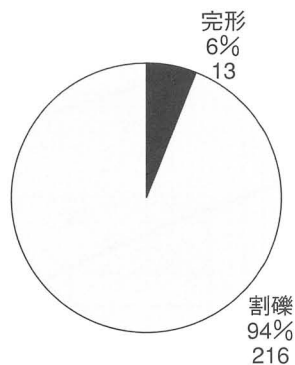
6号集石



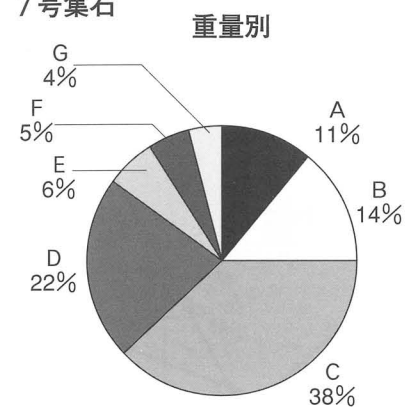
赤化別



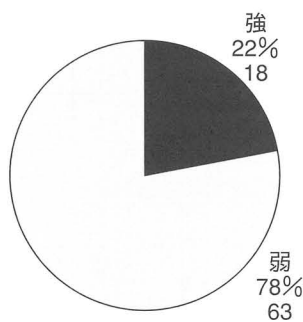
形状別



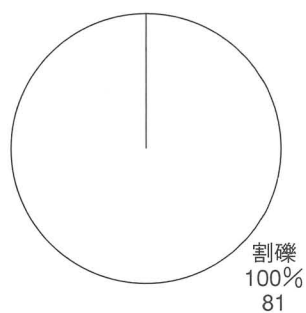
7号集石



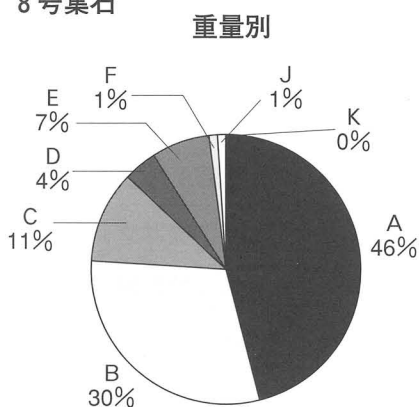
赤化別



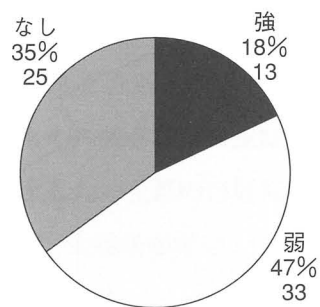
形状別



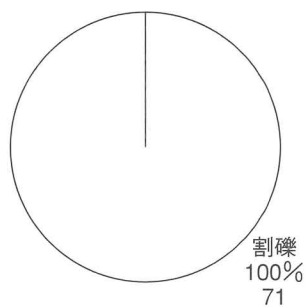
8号集石



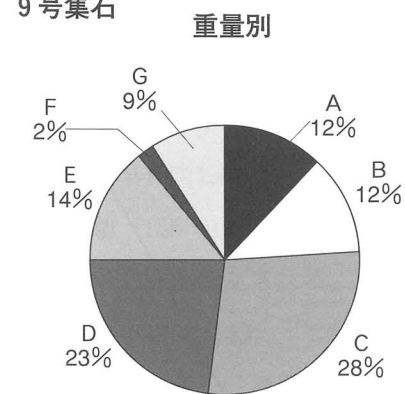
赤化別



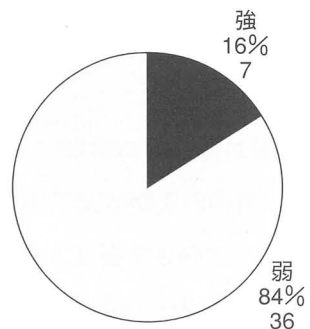
形状別



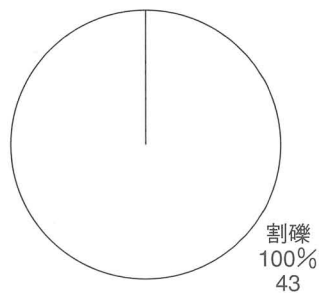
9号集石



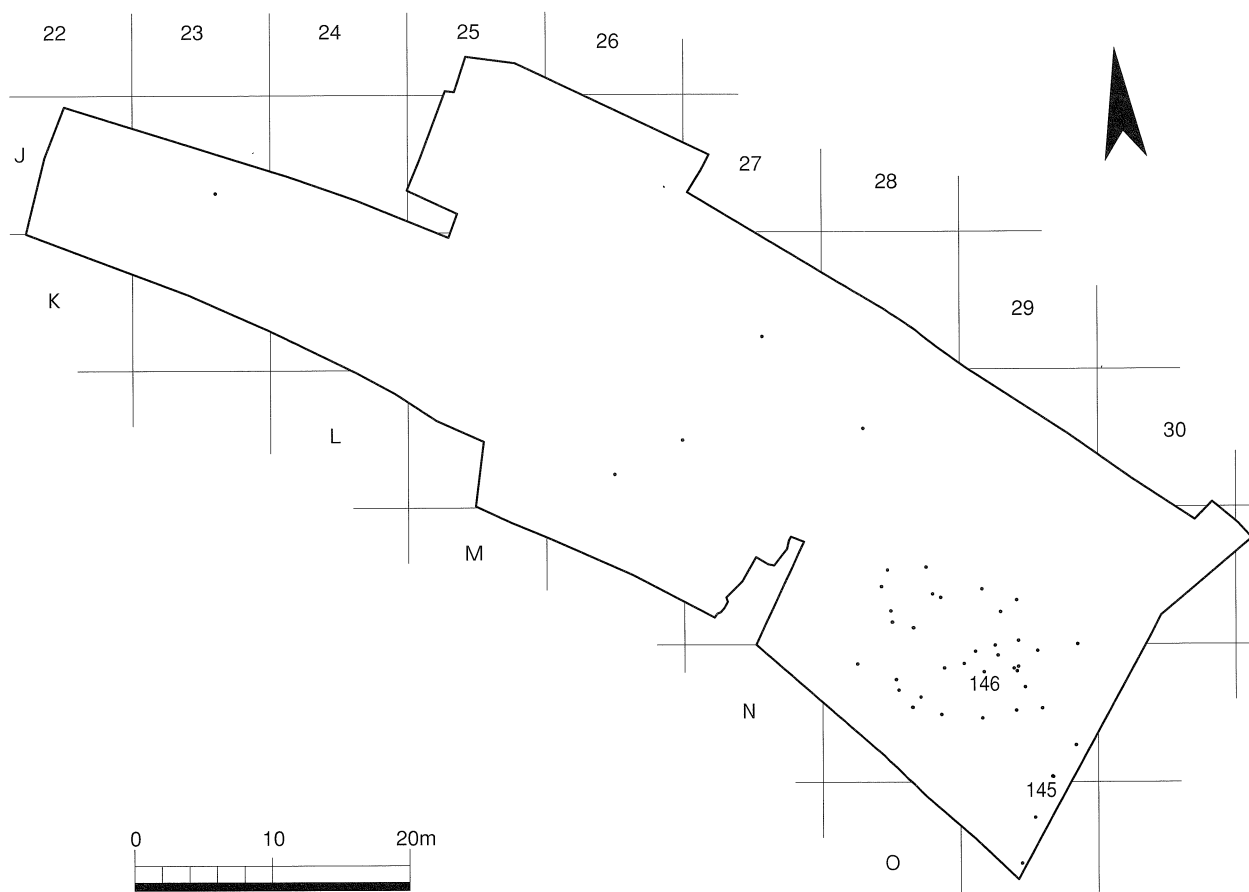
赤化別



形状別



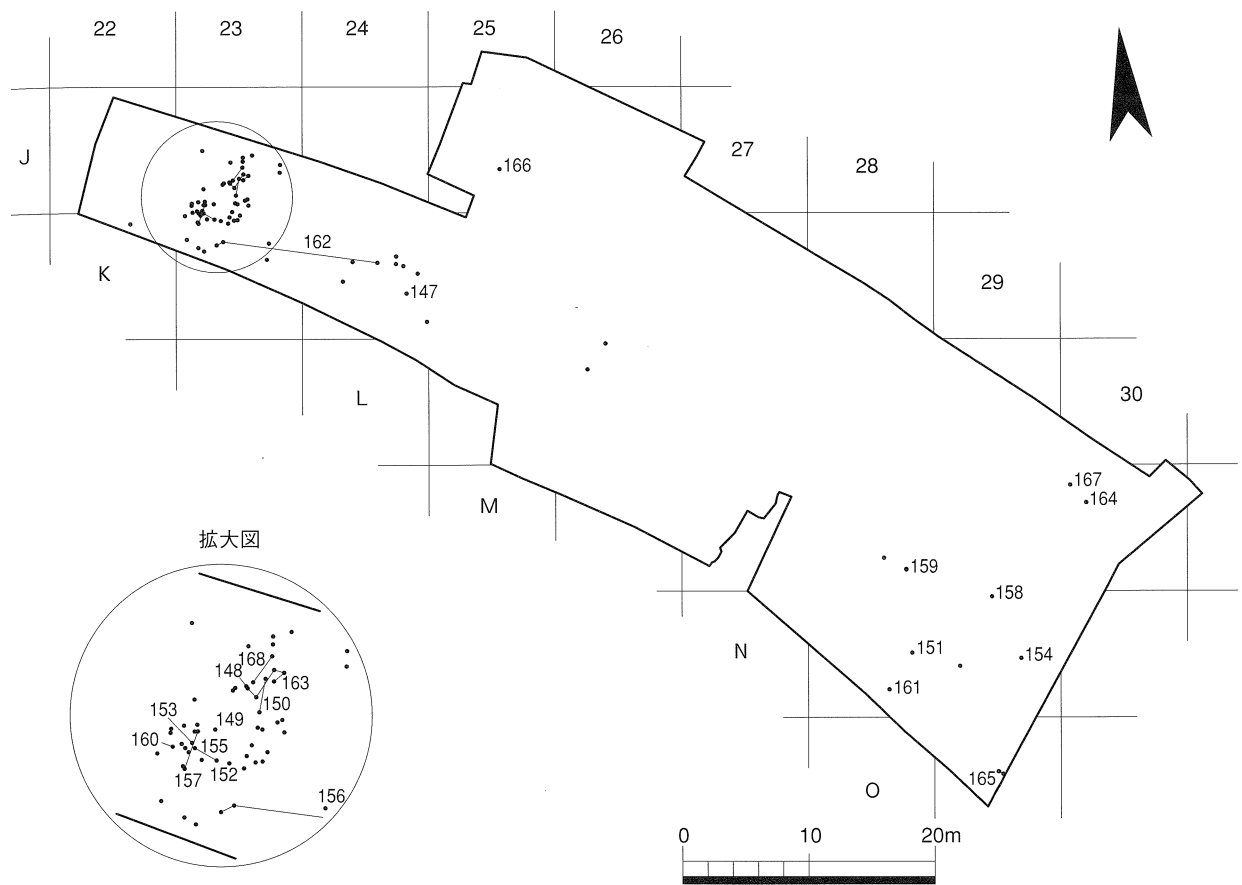
A・・・1～50g, B・・・51～100g, C・・・101～200g, D・・・201～300g, E・・・301～400g, F・・・401～500g, G・・・501～750g, H・・・751～1,000g, I・・・1,001～1,500g, J・・・1,501～2,000g, K・・・2,001g以上



第43図 Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（前平式土器）



第44図 Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図（押型文土器）



第45図 III・IV層遺物分布図（平椀・塞ノ神式土器）

遺物

〈土器〉

特記する出土状態のものとして、第46図の変形撚糸文の壺形土器（遺物番号139）がある。口縁部を下に、伏せた状態で出土した。潰れてはいたものの残存状態は良好であった。また、土器に蓋をするような状態で口縁部約5cm下方から扁平な礫が出土した。土器の口唇部は欠損していた。土器内の埋土で植物珪酸体分析、リン・カルシウム分析を行った。①土器底部付近、②炭化物粒混土、③その他の部分の3カ所から試料を採取した。

土器の分布状況は、押型文土器は調査区南半部で多く出土した。貝殻・条痕文土器Ⅰ類に相当する前平式土器はN28-29グリッド周辺に偏っていた。貝殻文・条痕文Ⅱ類に相当する平椀・塞ノ神式土器はJ23グリッドを中心に分布している。

押型文（第47図136～144）

Ⅱ類（136～138） 136と138は外反する口縁部に、外面は横方向の楕円文、内面は縦方向に原体条痕状の文様が施文される。137は縦方向の山形文と横方向の楕円文が施文される。

Ⅲ類（139～143） 139と140は変形撚糸文を施すものである。139は体部が球形に強く張り、頸部で萎ませる壺で、底部は平底である。文様は頸部から体部上半に縦方向の変形撚糸文を施し体部中央から下位にかけて横方向に施す。底部付近は部分的に縦方向の変形撚糸文が残る。内面は全体にナデ調整である。141～143はランダムに浅く撚糸文が施されるが、形式は不明であるためにここに一括した。

Ⅳ類 (144) 体部は内湾気味に立ち上がる程度で強く張らず、口縁部は外反する。縄文を外面は器面全体に、内面は口縁部に施す。

貝殻文・条痕文 (第48・49図145～167、175)

Ⅰ類 (145、146) 145は貝殻条痕を施し、口縁端部から口唇部にかけてヘラ状工具による連続刺突文を2段に巡らす。146も貝殻条痕を施すが、口縁端部には貝殻腹縁による連続刺突文を巡らす。

Ⅱ類 (147～167)

2 (147～150) 口縁部を肥厚させ断面三角形となる。口唇部は連続刻目を施す。肥厚部分外面に、148と149は羽状の凹線文を、147は波状の凹線文を、150は刺突文を施す。

3 (151～160) 151～153は口唇部に連続刻目を施す。154は頸部付近に連続刻目を施した隆帯を巡らす。159は口唇部に連続刻目(刺突)を施し、口縁部外面に連続刺突文と凹線文を幾何学的に施す。160は貝殻復縁刺突文を施す。

4 (161) 161は外反する口縁に連続刻目を施した微隆起帯を巡らす。

5 (162～164) 163は連続刺突文と凹線文を頸部に巡らせ、胴部には縦方向に網目状の撚糸文を施す。164は胴部に縦方向の撚糸文帯を作り、その上に横方向の凹線文を巡らす。

6 (165) 165は外反し、貝殻による連続刺突文を施す。

7 (166、167) 166は縄文?を施した後、沈線文を施文する。167は壺形土器で頸部下に数条の微隆起線文を巡らす。

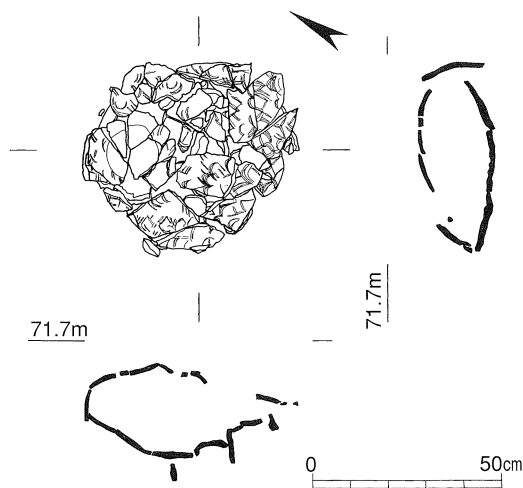
Ⅲ類 (175) 175は間延びした山形押型文に似るが、文様の反復は認められないため、回転施文とは異なる。

その他 (第49図168～171、176、177)

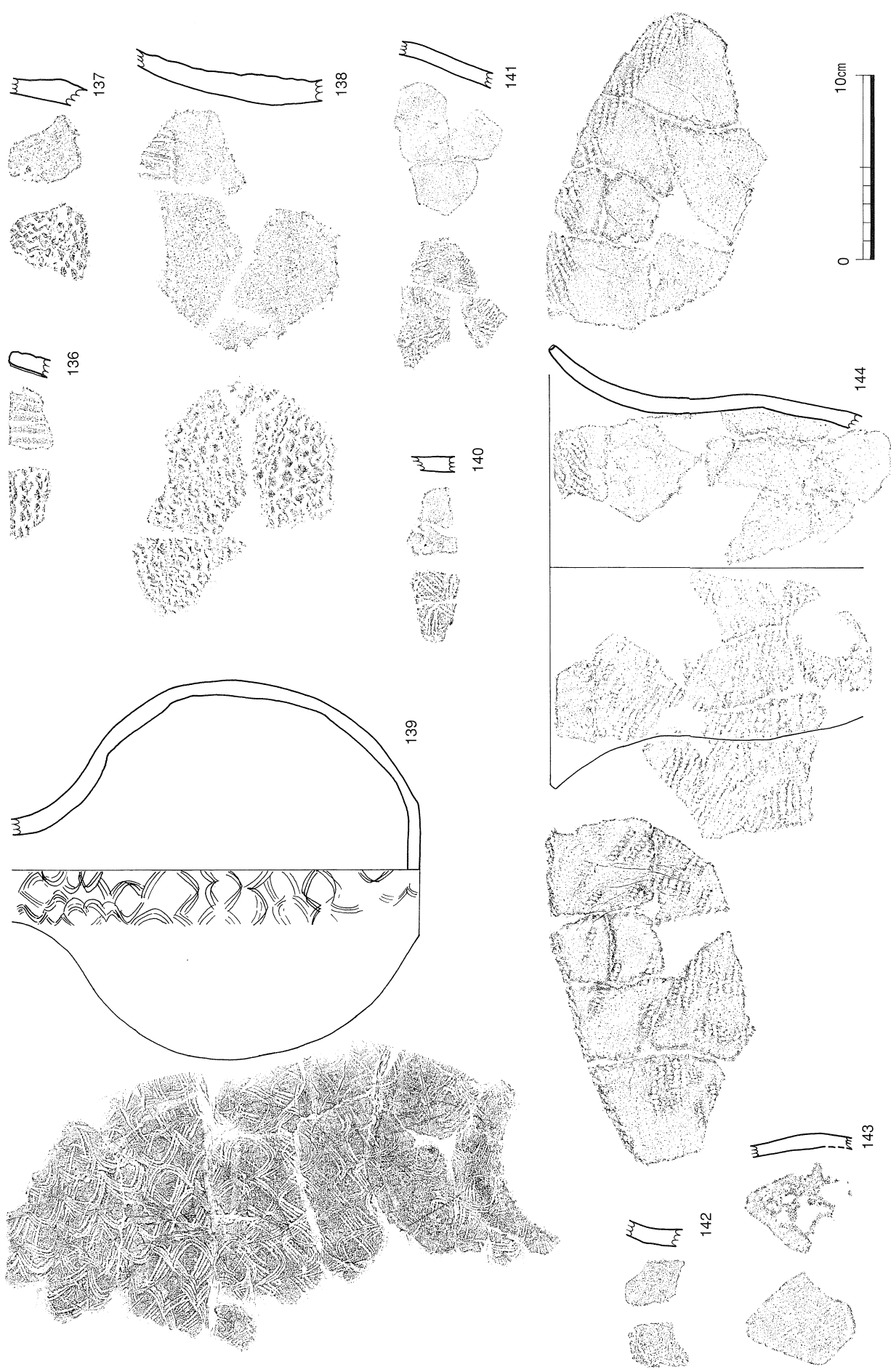
168は口縁部に連続刻目(刺突)を施した隆帯を縦方向に貼り付け、斜方向に貝殻復縁刺突文を施す。頸部外面には2条の凹線文を巡らす。169は文様が明確ではないが、刺突文を口縁部外面全体に施す。口唇部内面には連続刻目を施す。170は外面に沈線文を網目状に施す。171は刻目を施した隆帯を巡らす。176・177は底部である。176は胴部への屈曲が不明瞭で丸みを帯びる。177は底面に編物圧痕が確認される。アジロ編みであるが詳細な編み方は不明である。

無文 (172～174)

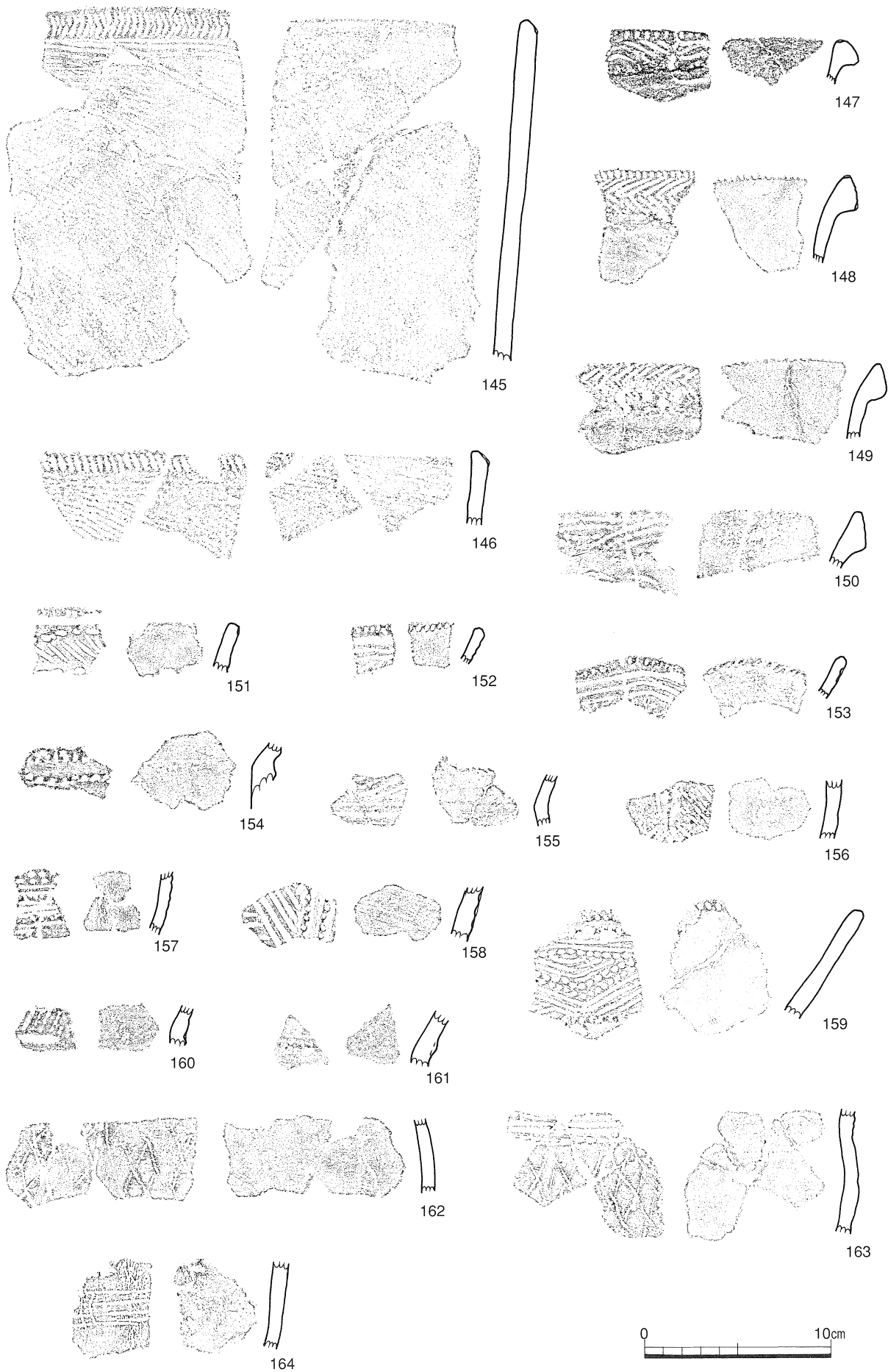
172は器壁が薄く、器形は鉢形となる。口唇部は連続した波状を呈す。



第46図 壺形土器出土状況



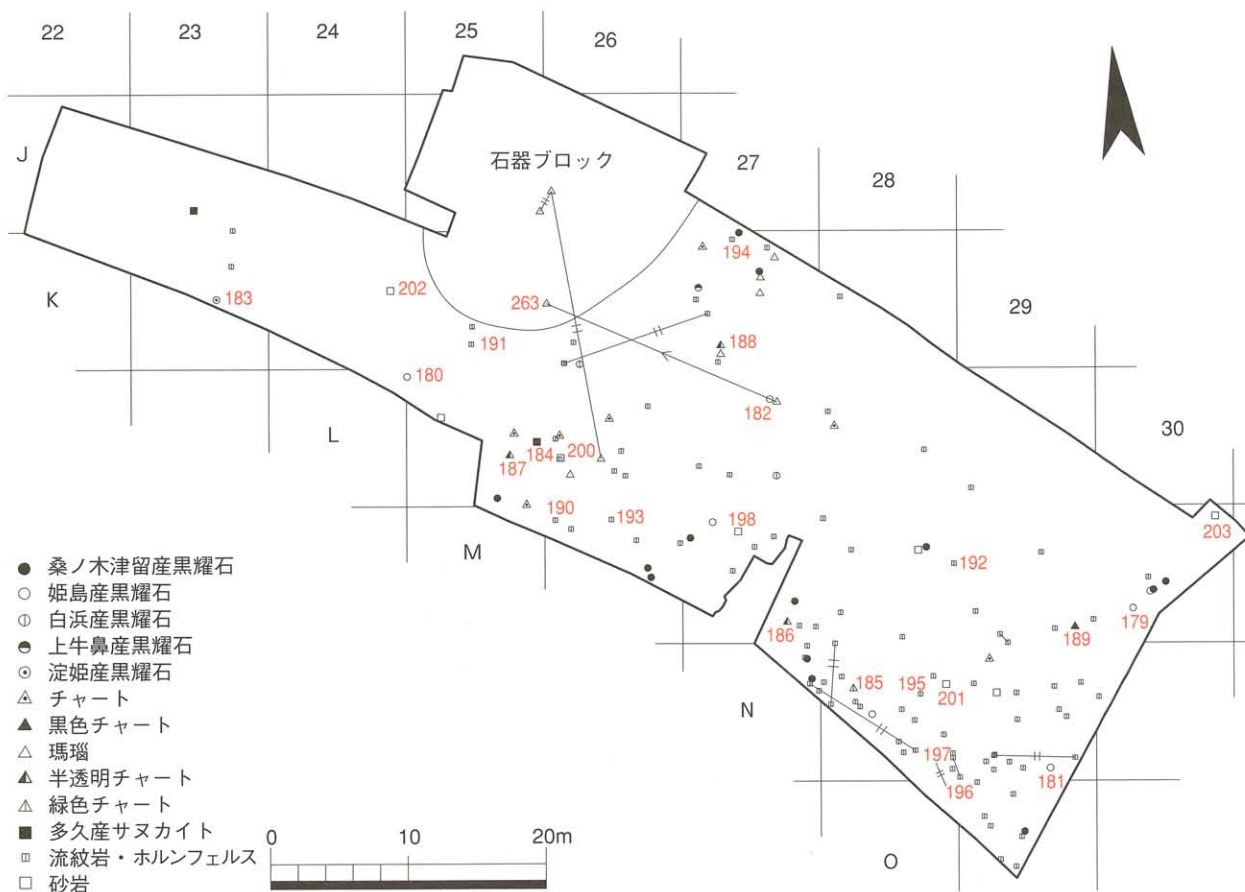
第47图 Ⅲ·Ⅳ層遺物実測图



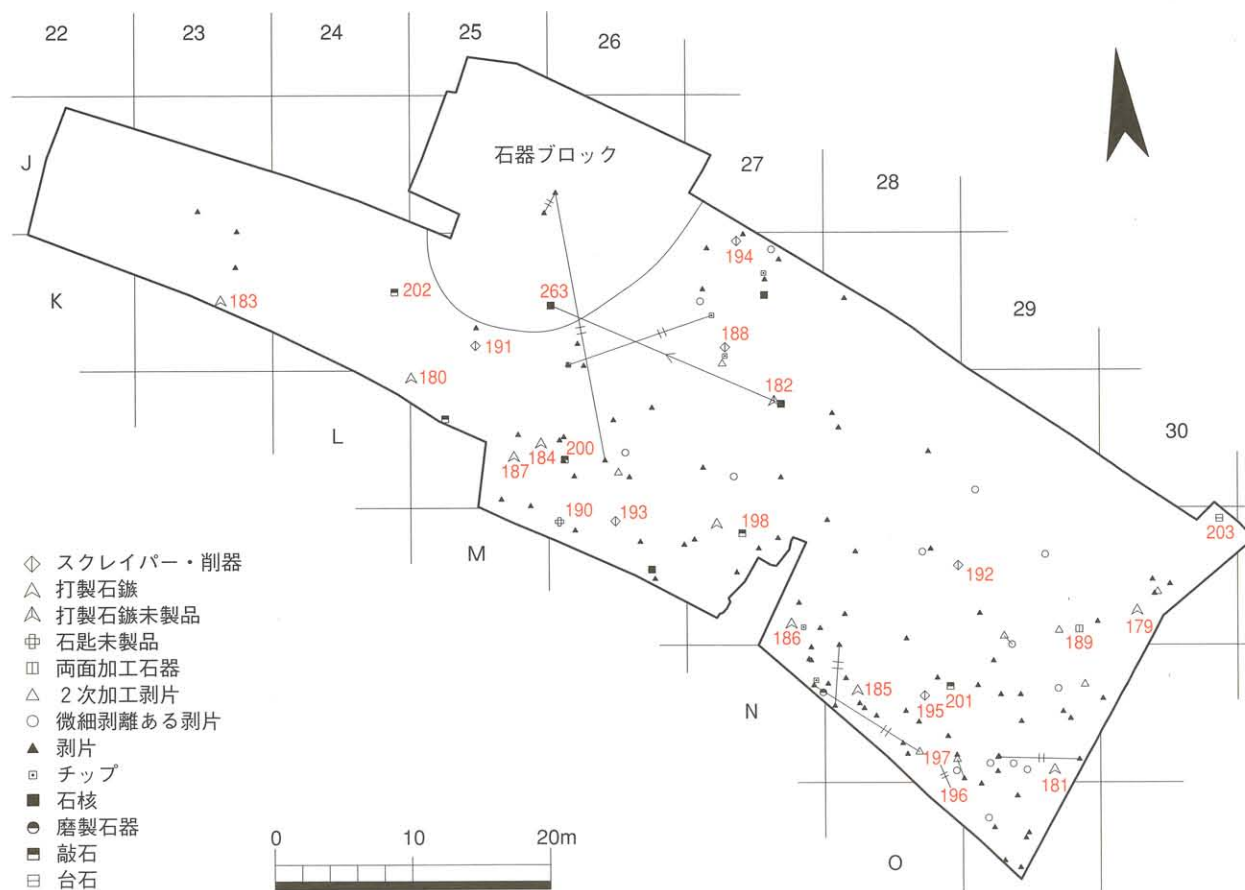
第48图 Ⅲ·Ⅳ層遺物実測図



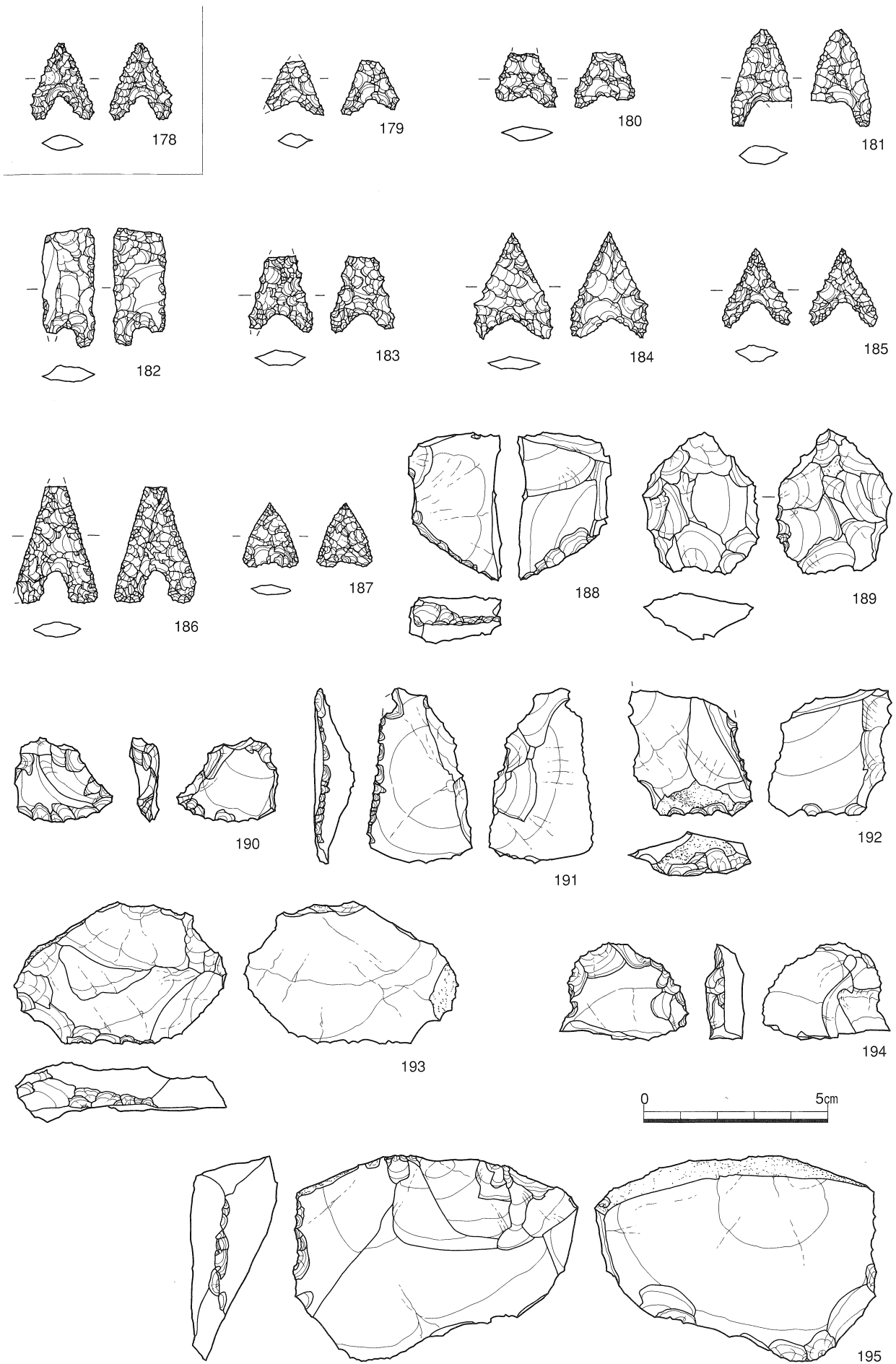
第49图 Ⅲ·Ⅳ層遺物実測図



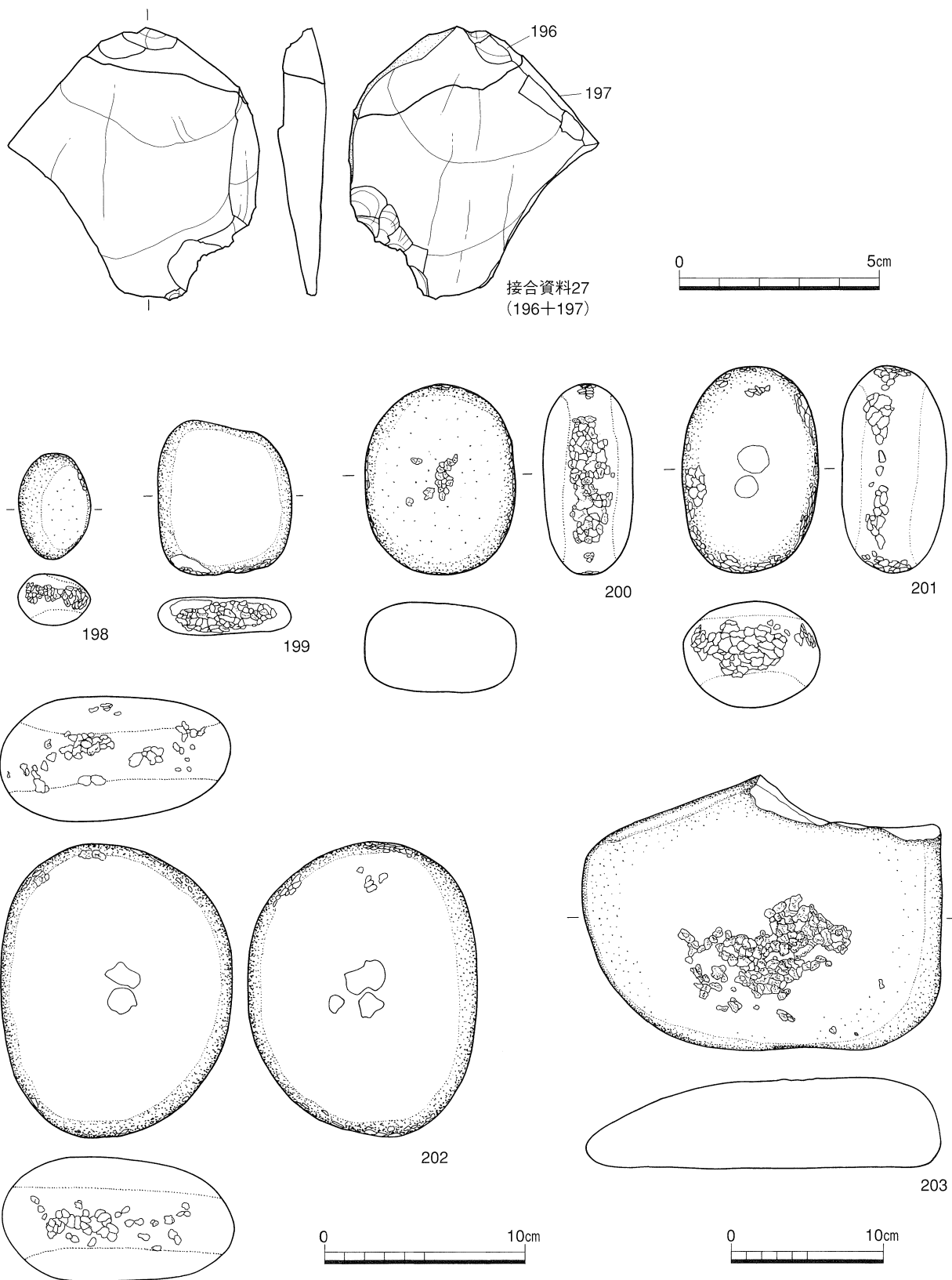
第50図 III・IV層遺物分布図（石器ブロック外、石材別）



第51図 III・IV層遺物分布図（石器ブロック外、器種別）



第52図 Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図 (石器ブロック外)



第53図 Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図（石器ブロック外）

〈 石器 〉

JK25-26グリッドを中心とした範囲で、石器が集中して出土した。石材は、桑ノ木津留産黒耀石と瑪瑙で9割以上を占める。また、石鏃・石鏃未製品などが多く出土したため、石器製作社と考え、ブロックを設定した。ブロック内遺物とブロック外遺物で、石材、器種組成ともに、大きく異なることから、石器ブロック外、石器ブロック内の順で報告する。

石器ブロック外遺物（第52図）

石器ブロック外で出土した石器の総数は144点である（表8-1）。器種構成は、打製石鏃9点、打製石鏃未製品1点、削器2点、スクレイパー5点、石匙未製品1点、両面加工石器1点、二次加工剥片8点、微細剥離ある剥片14点、剥片86点、チップ7点、石核3点、磨製石器1点、敲石5点、台石1点と多岐にわたる。また、使用石材についても、多久産サヌカイト2点、桑ノ木津留産黒耀石13点、白浜産黒耀石2点、上牛鼻産黒耀石1点、姫島産黒耀石7点、淀姫産黒耀石1点、チャート13点、瑪瑙7点、流紋岩系12種89点、凝灰質頁岩1点、砂岩8点である。このうちサヌカイトは多久産のみを使用し、黒耀石は、肥薩地域が最も多く、続いて姫島、西北九州のものが使用されている。

土坑出土遺物

178は16号土坑出土の打製石鏃で、流紋岩系石材を使用している。

姫島産黒耀石

179～181は打製石鏃、182はその未製品である。

西北九州産黒耀石

183は淀姫産黒耀石製の打製石鏃である。

多久産サヌカイト

184は打製石鏃である。

チャート

185は緑色チャート、186～187は半透明チャート製打製石鏃である。188は半透明チャート製のスクレイパーである。189は黒色チャート製両面加工石器である。先端が尖る尖頭状を呈する。

流紋岩系

190は石匙未製品である。191は削器で、右側縁部に裏面から二次加工が施される。192～195はスクレイパーである。192・193は下縁部に、194・195は側縁部に二次加工が施される。

【 接合資料27 】

二次加工剥片と剥片の接合資料である。偶発的な割れの可能性が高い。

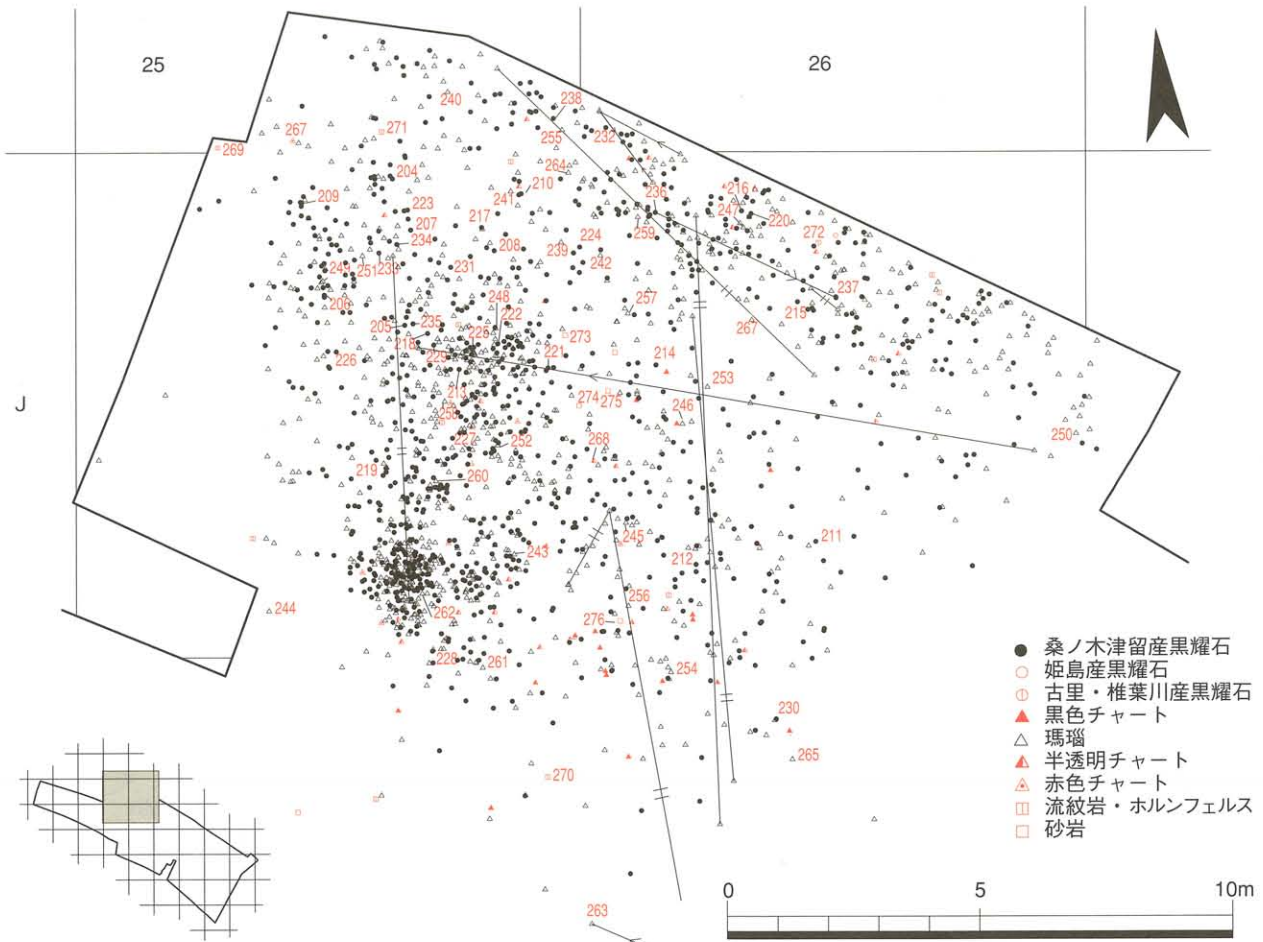
砂岩

198～202は磨石、203は台石である。

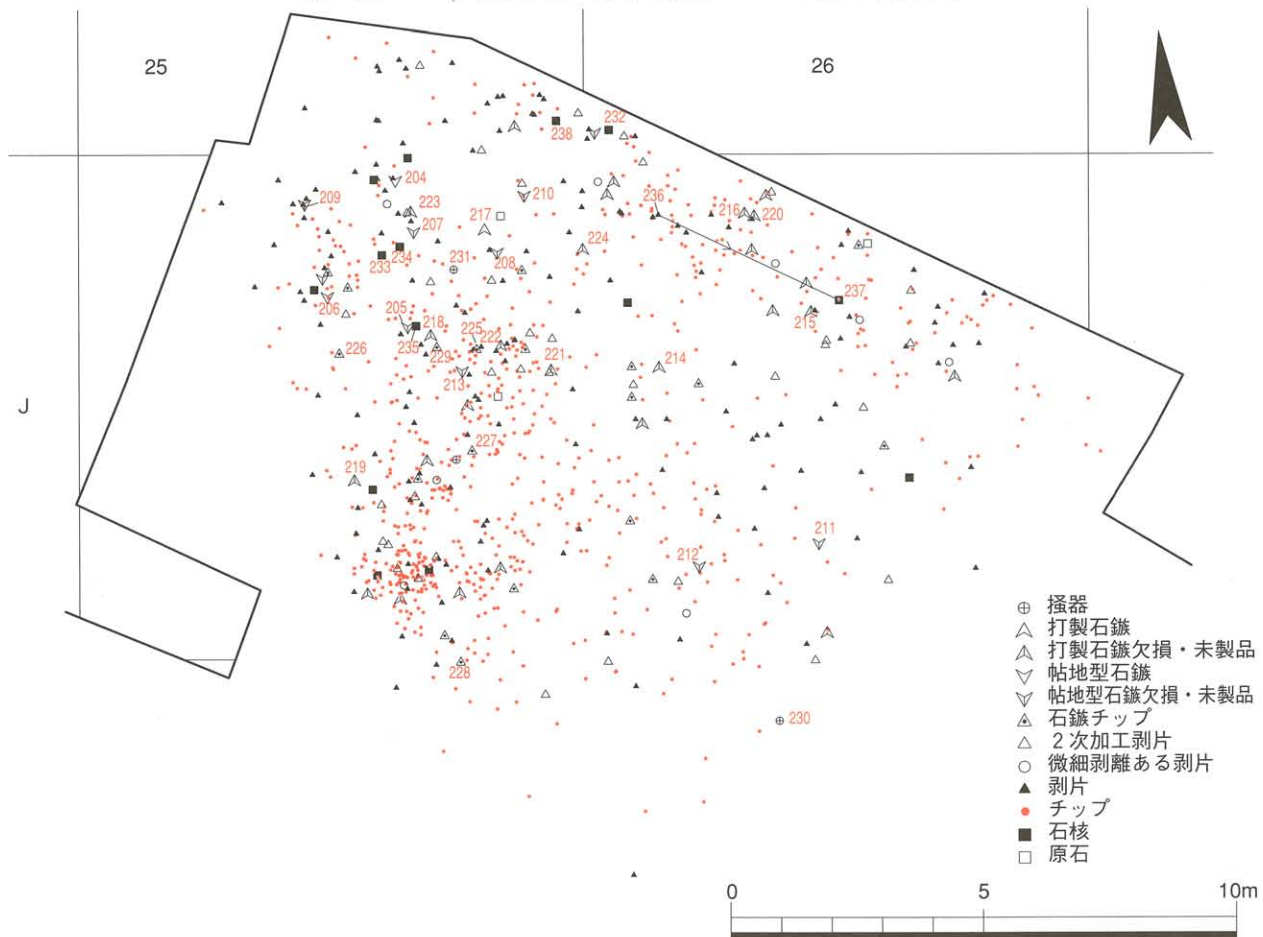
石器ブロック内遺物

石器ブロック内出土石器は総計2,053点を数える（表8-2）。石材は、桑ノ木津留産黒耀石と瑪瑙が圧倒的に多く全体の95%以上を占める。桑ノ木津留産黒耀石が1,020点、瑪瑙が949点である。そのほか、半透明チャート30点、黒色チャート23点、赤色チャート11点、その他の黒耀石3点、流紋岩系3種11点、砂岩6点である。

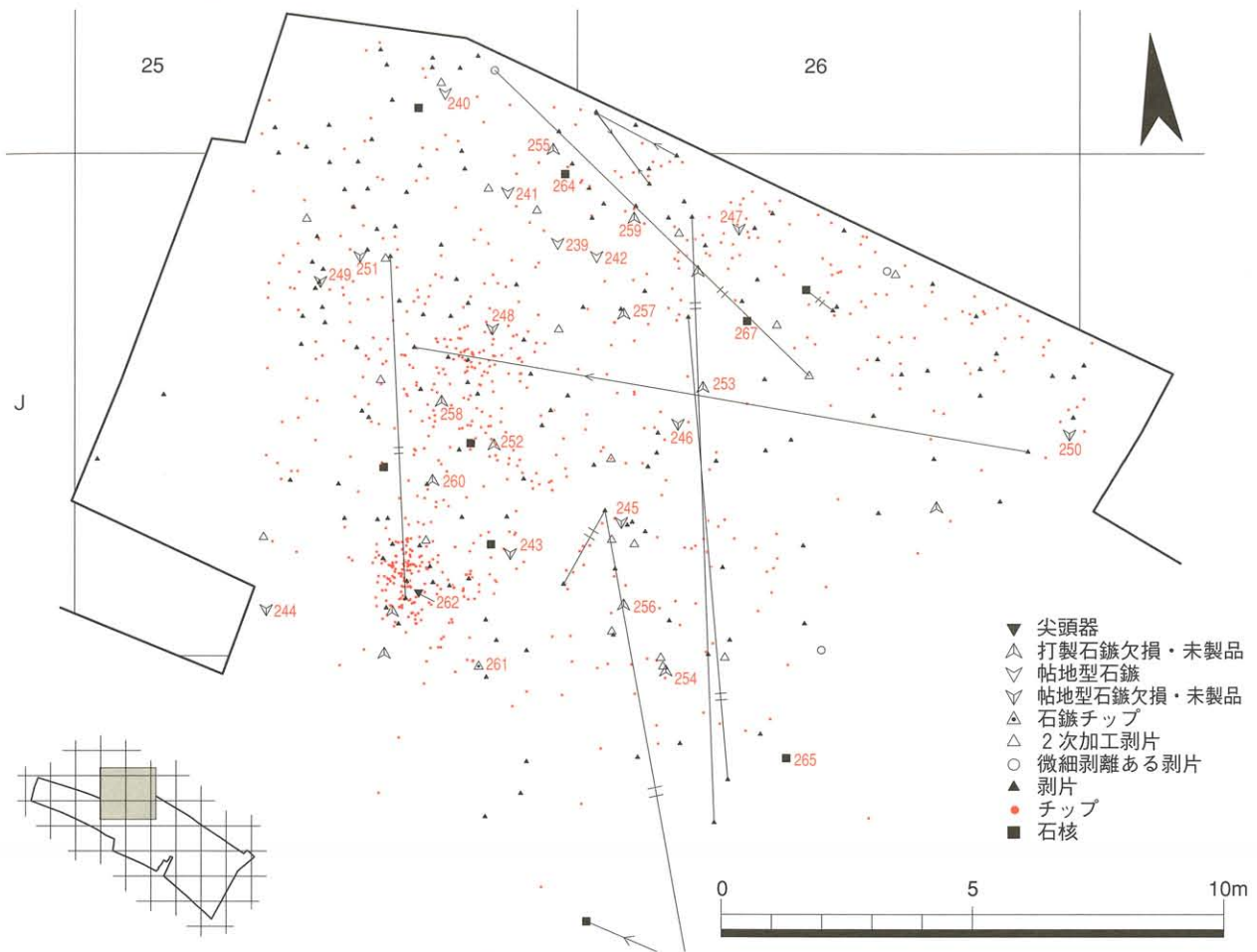
器種構成は、尖頭器2点、削器1点、搔器3点、帖地型石鏃7点、その未製品・欠損品19点、打製石鏃2点、その未製品・欠損品40点、石鏃チップ21点、二次加工剥片62点、微細剥離ある剥片12点、剥片332点、石核23点、原石3点、磨石1点、敲石5点、そして1cm以下もしくは重量0.1g以下のチップが1,520点で全体の75%を超える。



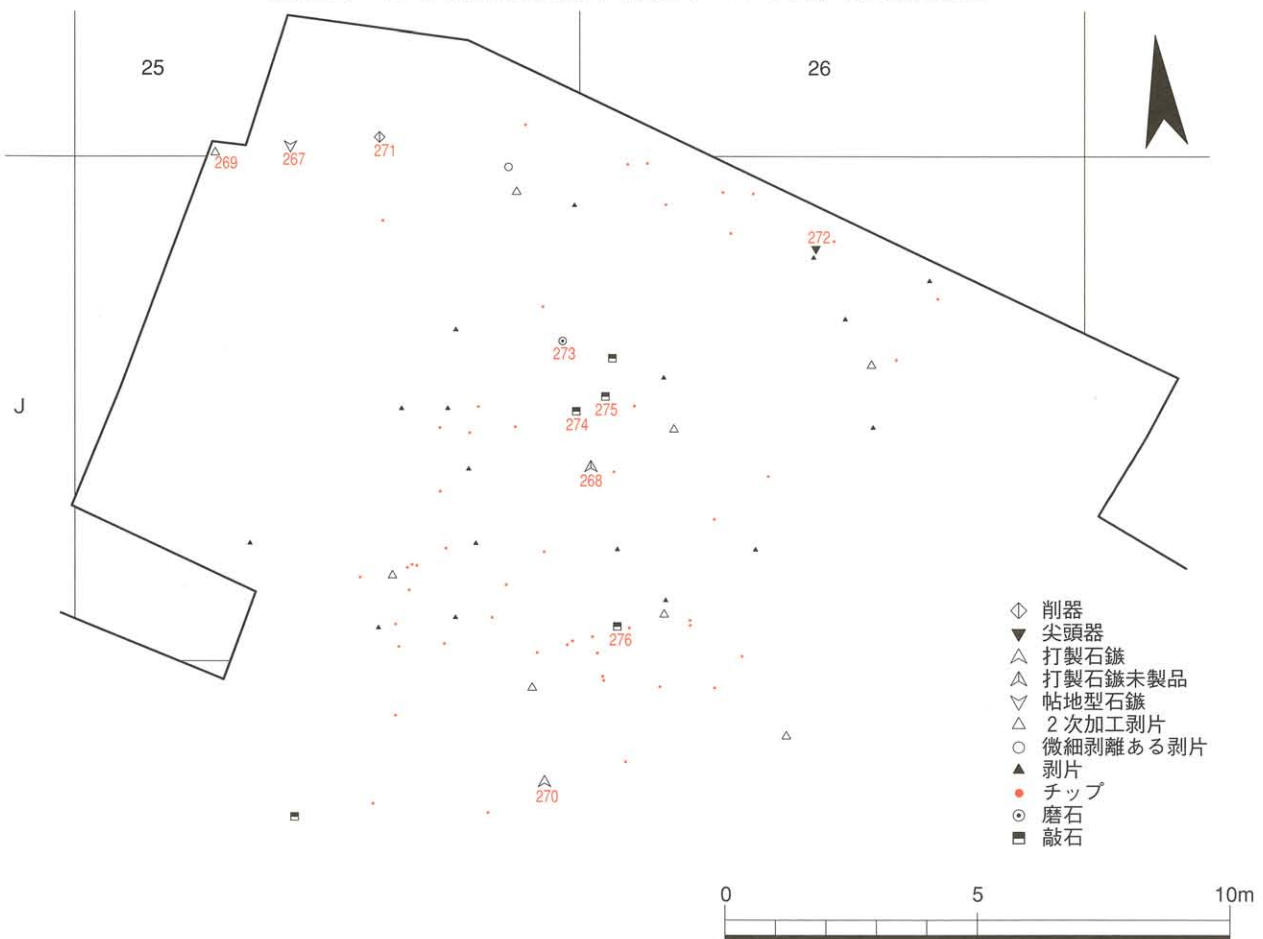
第54図 III・IV層遺物分布図 (石器ブロック内、石材別)



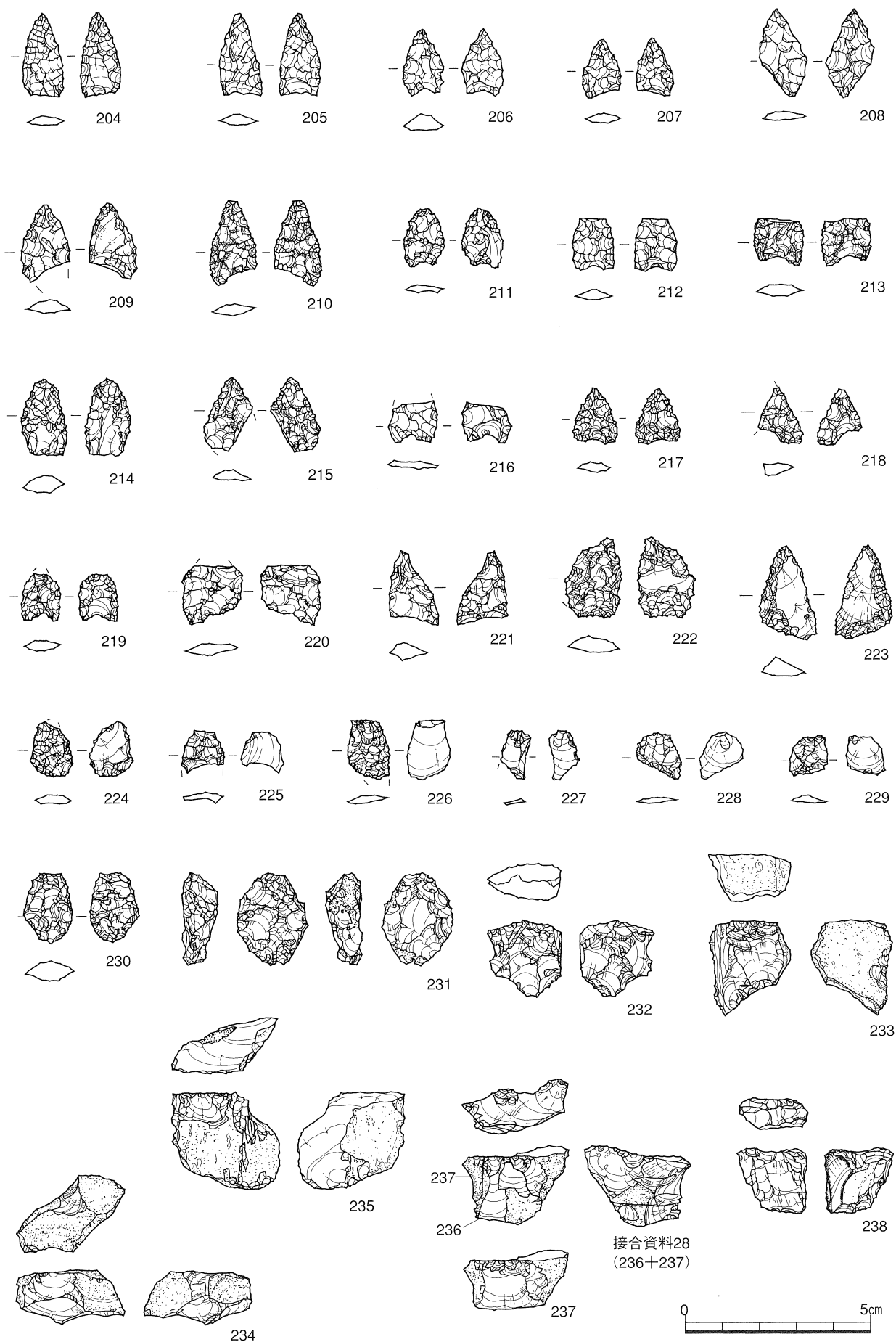
第55図 III・IV層遺物分布図 (石器ブロック内、桑ノ木津留産黒耀石器種別)



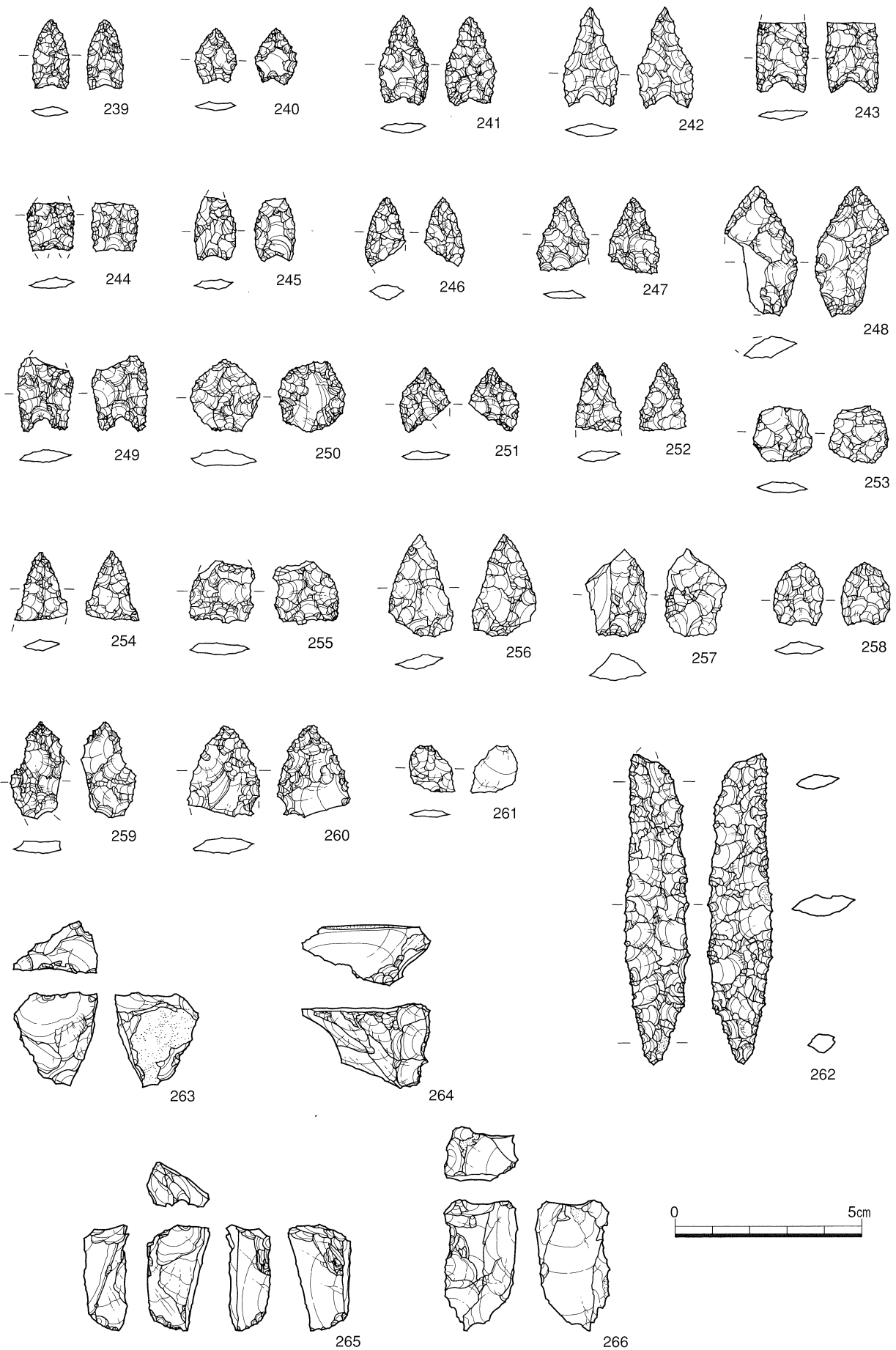
第56図 III・IV層遺物分布図（石器ブロック内、瑪瑙器種別）



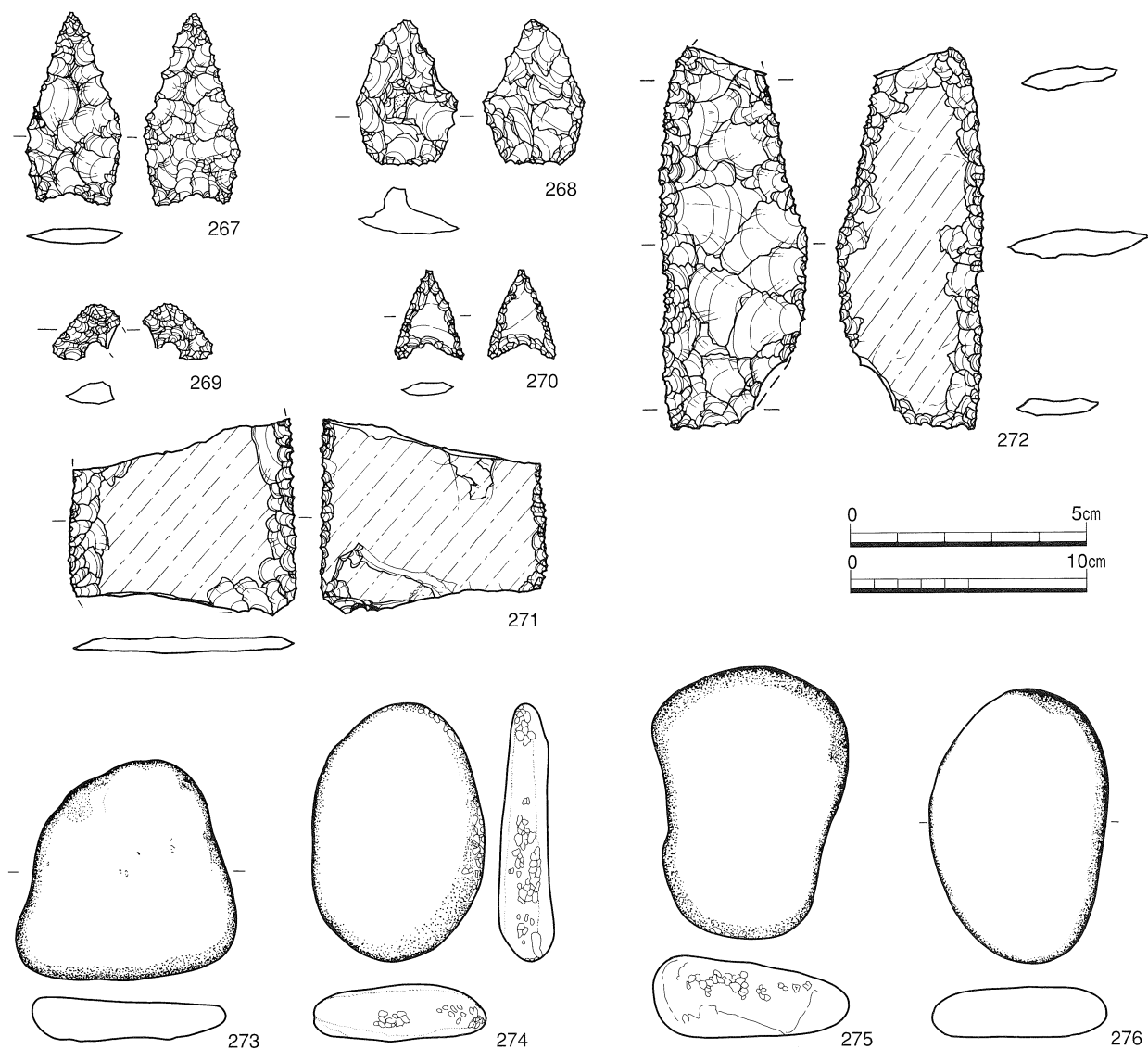
第57図 III・IV層遺物分布図（石器ブロック内、その他の石材器種別）



第58図 Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図 (石器ブロック内、桑ノ木津留産黒耀石製)



第59図 Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図 (石器ブロック内・瑠璃製)



第60図 III・IV層遺物実測図（石器ブロック内・その他の石材）

桑ノ木津留産黒耀石（第58図）

204～213は帖地型石鏃およびその未製品・欠損品である。214～224は打製石鏃および未製品・欠損品である。225～229は石鏃製作時に生じた剥片である（以下では石鏃チップと呼ぶ）。230・231は搔器である。232～235、238は石核である。233～235は礫面が残存する。238は裏面の稜線が潰れており磨痕が確認された。

【 接合資料28 】

剥片と石核の接合資料である。石核237の上面右方向からの剥離で作出された打面からの剥離で得られた剥片が236である。

瑪瑙（第59図）

239～251は帖地型石鏃および未製品・欠損品である。252～260は打製石鏃および未製品・欠損品である。261は石鏃チップ。262は尖頭器で、基部は逆三角形を呈しやや厚みがある。刃部は平坦で、先端部がわずかに欠損している。左右対称形ではなく右側縁は直線的である。263～266は石核である。264は打面転移を行ないながら貝殻状の小剥片を剥離している。

チャート（第60図）

267は赤色チャート製帖地型石鏃である。赤色チャートはほかに剥片・チップが出土している。268は

半透明チャート製打製石鏃未製品である。表面に突起があり、成形途中で断念したものと考えられる。

西北九州産黒耀石（第60図）

269は古里・椎葉川産黒耀石製品である。逆V字状を呈し、先端部が丸く成形される。二次加工剥片とした。

流紋岩系（第60図）

270は打製石鏃である。表裏面共に剥離面が残存する。271・272は同一の石材と考えられる。271は摂理面で割れた薄い剥片の両側縁に二次加工が施される。左下縁部と上面は折損している。272は尖頭器である。裏面は節理面が残る。上面を欠損している。左右非対称で右側縁は直線的である。

砂岩（第60図）

273は表面に磨痕が認められ、磨石と考えられる。274～276は敲石である。縁辺部に敲打痕が確認できる。

表 8-1 ブロック外石器組成表

	打製 石鏃	打製 石鏃 未製 品	削器	スク レイ パー	石匙 未製 品	両面 加工 石器	二次 加工 剥片	微細 剥離 ある 剥片	剥片	チップ	石核	磨製 石器	敲石	台石	計
サヌカイト(多久産)	1								1						2
黒耀石(桑ノ木津留)							1		9	2	1				13
黒耀石(白浜)									2						2
黒耀石(上牛鼻)									1						1
黒耀石(姫島)	4	1							2						7
黒耀石(淀姫)	1														1
チャート									7						7
黒色チャート						1									1
半透明チャート	2			1						1					4
緑色チャート	1														1
瑪瑙									3	2	2				7
流紋岩							1		2						3
流紋岩(A4)							1	1	1						3
流紋岩(A5)									1						1
流紋岩(AA)					1		2		6						9
流紋岩(AD)								2	7			1			10
流紋岩(AG)									1						1
流紋岩(AI)									1	2					3
流紋岩(K)			1					2	7						10
流紋岩(M)							2	2	18						22
流紋岩(Z)				1				2	1						4
ホルンフェルス(AE)									6						6
ホルンフェルス(I)			1	3			1	4	8						17
凝灰質頁岩(緑色頁岩)									1						1
砂岩								1	1				5	1	8
計	9	1	2	5	1	1	8	14	86	7	3	1	5	1	144

表 8-2 ブロック内石器組成表

	尖頭器	削器	搔器	帖地型石鏃	帖地型石鏃未製品	帖地型石鏃欠損品	打製石鏃	打製石鏃未製品	打製石鏃欠損品	石鏃チップ	二次加工剥片	微細剥離ある剥片	剥片	チップ	石核	原石	磨石	敲石	計
黒耀石(桑ノ木津留)			3	2	3	7	1	22	4	20	34	8	159	740	14	3			1020
黒耀石(姫島)														1					1
黒耀石(古里・椎葉川)											1								1
黒耀石(永迫328遺物群)													1						1
赤色チャート				1							1		4	5					11
黒色チャート											3		2	18					23
半透明チャート		1						1			2		3	23					30
瑪瑙	1			4	5	4		11	2	1	20	3	159	730	9				949
ホルンフェルス(AE)													1						1
ホルンフェルス(I)							1					1	1						3
流紋岩(Z)	1										1		2	3					7
砂岩																	1	5	6
計	2	1	3	7	8	11	2	34	6	21	62	12	332	1520	23	3	1	5	2053

第4節 II層の調査

アカホヤ火山灰二次堆積層が包含層である。縄文前期以降の遺物が確認されたが、層位による細分はできなかつた。

遺構

M27グリッドでピット2基を検出した。時期は不明である。そのほかの遺構は確認されなかつた。

遺物

遺物分布状況は、全体的に希薄である。礫はJ25グリッド、K27グリッド、N29グリッドで集中して出土した。このうちN29グリッドの礫出土範囲は攪乱も確認されており、IV層で検出された5号集石の礫が含まれている可能性もある。

〈土器〉

土器の分布状況は、調査区北半部に偏ってみられた。

轟B式土器

278は外面は横方向のナデの後、隆起帯が貼り付けられる。内面は、横方向の貝殻条痕文である。口唇部は平坦である。

279は胴部資料である。外面は横方向、縦方向のナデの後、下部に縦方向の隆起帯を貼り付け、その後やや右下がりの隆起帯が貼付られる。内面は、横方向の貝殻条痕文である。

280は口縁部資料である。外面は、ナデの後隆起帯が縦方向に貼り付けられる。隆起帯は、口唇部で肥厚し、内面上端で留められる。内面は貝殻条痕文である。

281は胴部資料である。外面は横方向のナデの後、左下がりの斜方向に隆起帯が貼り付けられる。内面は横方向の貝殻条痕文である。一部剥落している。

轟5式（野口・阿多タイプ）

282は外面ナデ調整ののち、沈線文が施文される。上から横方向2条、弧状4条、横方向3条の沈線文が施される。口唇部は縦方向の連続刻目が施される。内面は横方向の丁寧なナデである。

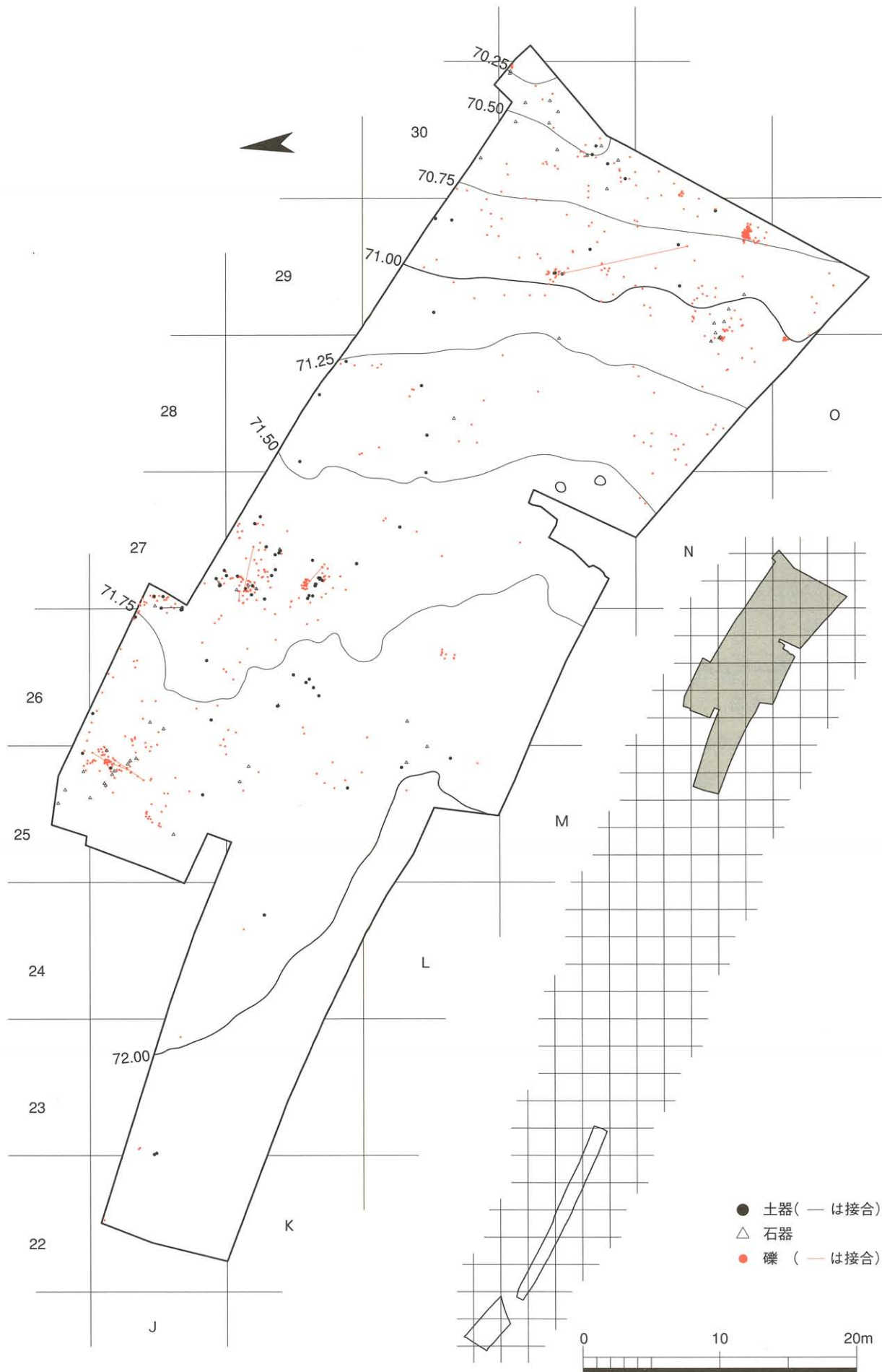
不明

283は丁寧なナデの後、4条の隆起帯が横方向に貼り付けられる。内面も丁寧なナデ調整である。器壁は口唇部付近で舌状に細くなり、口唇部は丸みを帯びる。中期野首式の可能性がある。

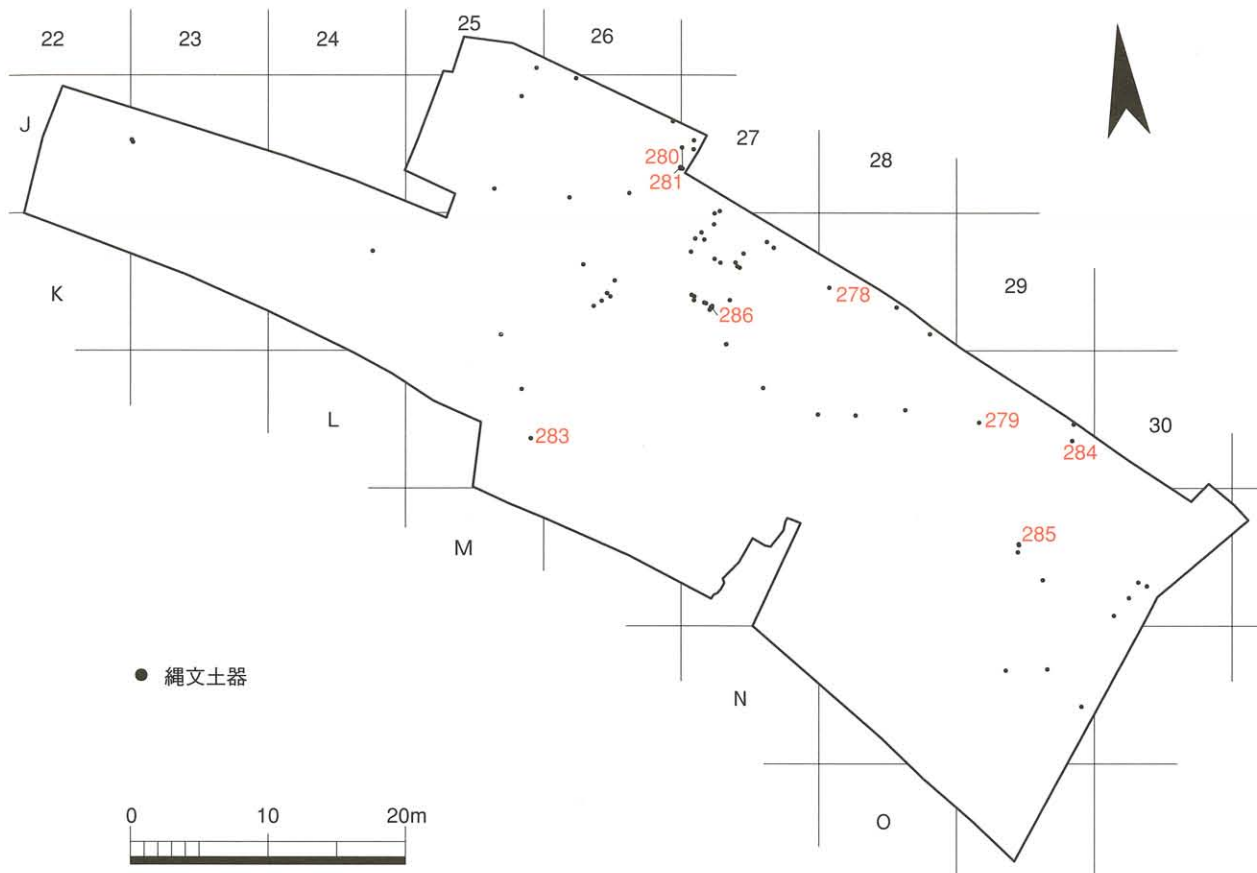
284は外面横方向のナデの後、隆起帯が貼り付けられる。横方向に1条、そこから垂下した縦方向の隆起帯が1条観察される。内面は、横方向の貝殻条痕文である。

285は内外面とも貝殻条痕文が施される。外面に縦方向の隆起帯が1条貼り付けられる。胎土はきめが細かい。

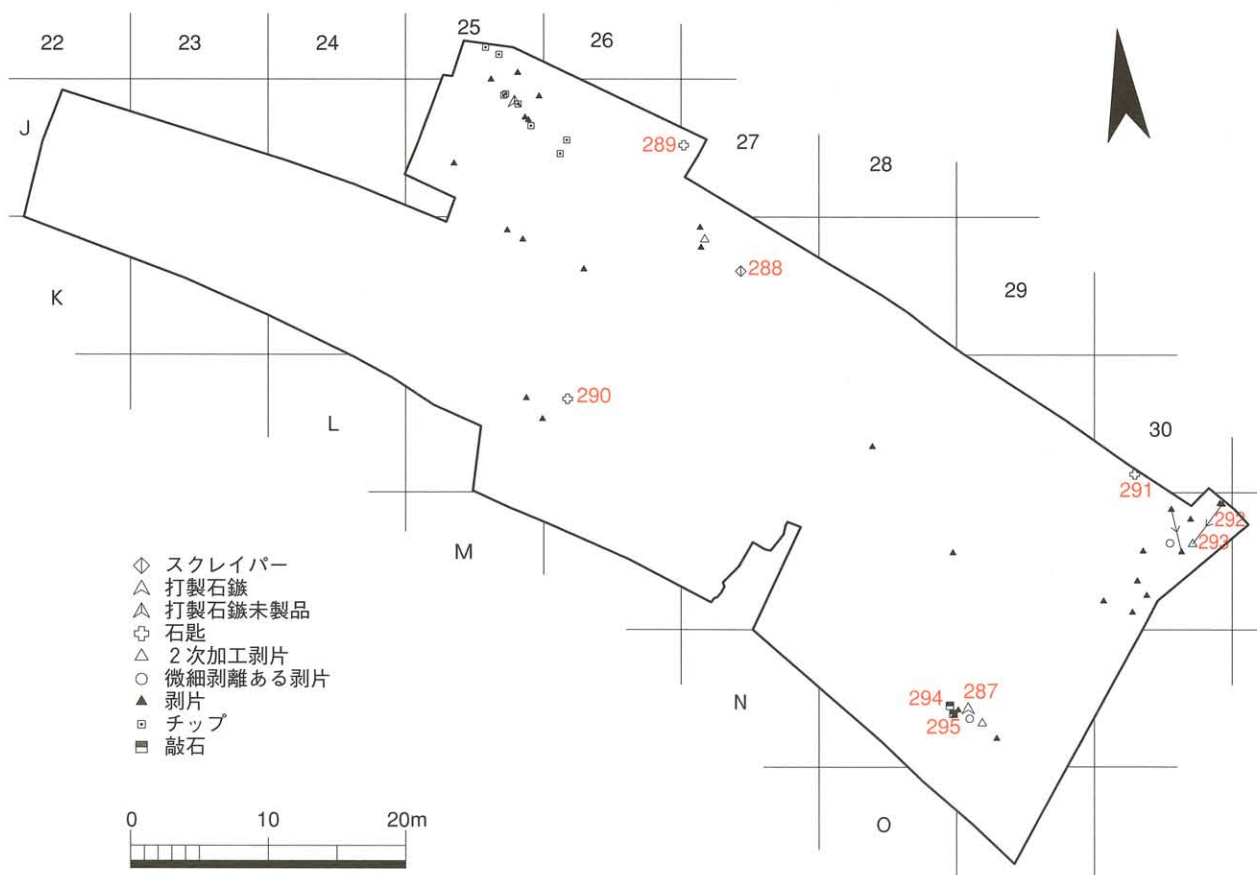
286は外面に横方向の沈線文が施される。内面は丁寧なナデ調整である。口唇部は断面三角形を呈する。



第61図 II層遺構配置図・遺物分布図

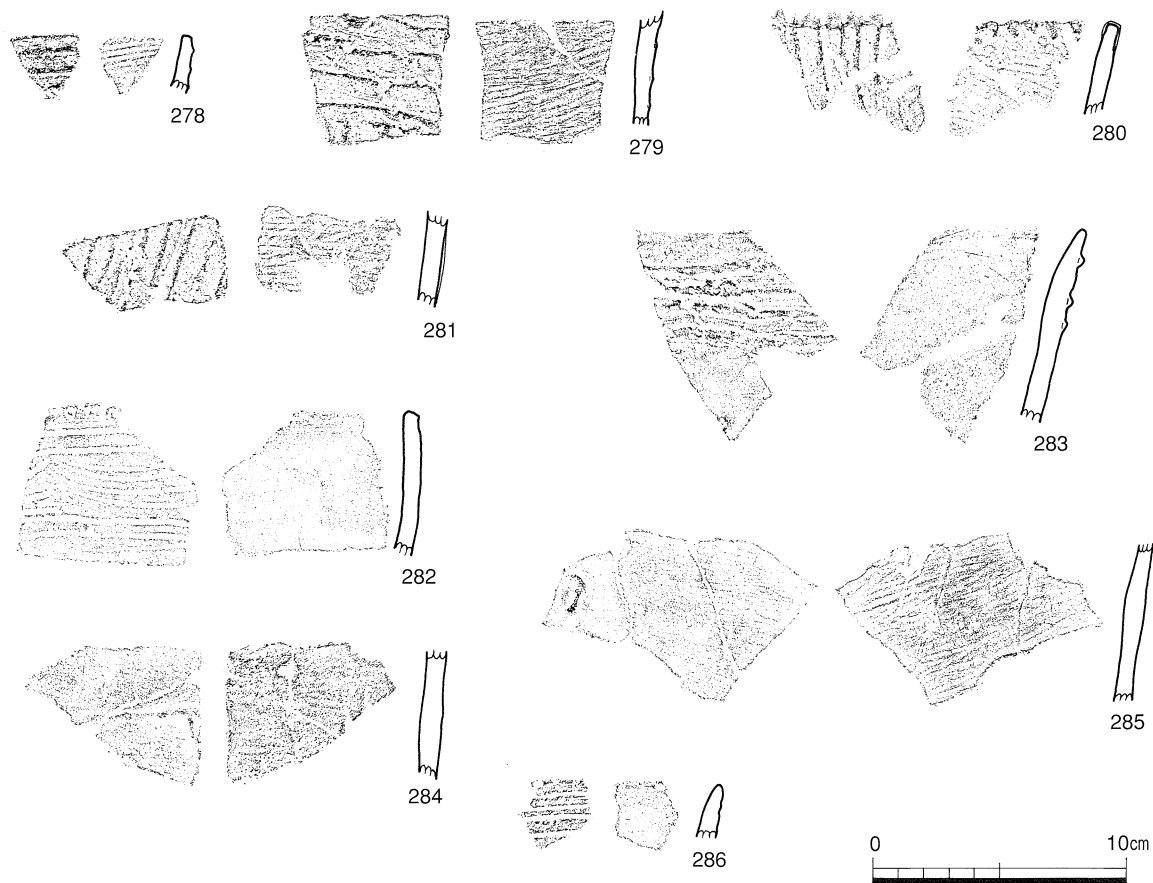


第62図 II層遺物分布図(土器)



- ◇ スクレイパー
- △ 打製石鏃
- ▲ 打製石鏃未製品
- ⊕ 石匙
- △ 2次加工剥片
- 微細剥離ある剥片
- ▲ 剥片
- チップ
- 敲石

第63図 II層遺物分布図(石器器種別)



第64図 II層遺物実測図

〈石器〉(第65図)

石器は、J25-26グリッド、M30グリッド、N28-29グリッドにまとまりを確認できた。

黒耀石

287は打製石鏃である。黒耀石のは内屋敷UT遺物群に該当し、産地は不明である。288はスクレイパーである。厚みのある縦長剥片を素材とし、下縁部と側縁部に二次加工が施される。五米木・日東産である。

290は横長の石匙で、姫島産黒耀石製である。

チャート

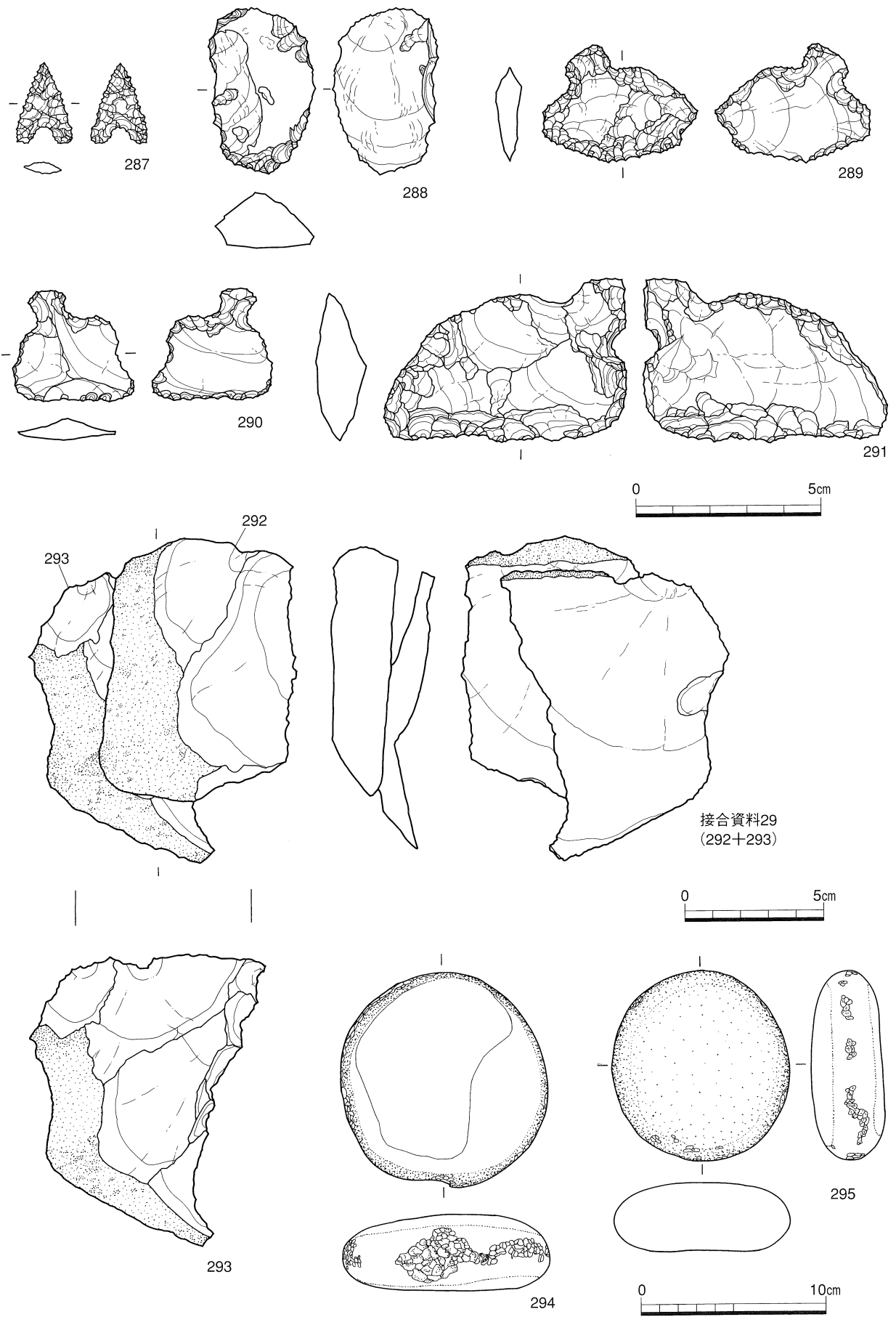
289・291は横長の石匙で、289は黒色チャート製、291は半透明チャート製である。

砂岩

【接合資料29】

二次加工剥片と剥片の接合資料である。292→293の順で剥離が行なわれ、293はその後右側縁部に二次加工が施される。M30グリッドの剥片類はすべて同じ石材であり、同一母岩と考えられる。このほかに剥片同士の接合資料が確認されている。

294・295は敲石である。縁辺部に敲打痕が認められる。



第65図 II層遺物実測図

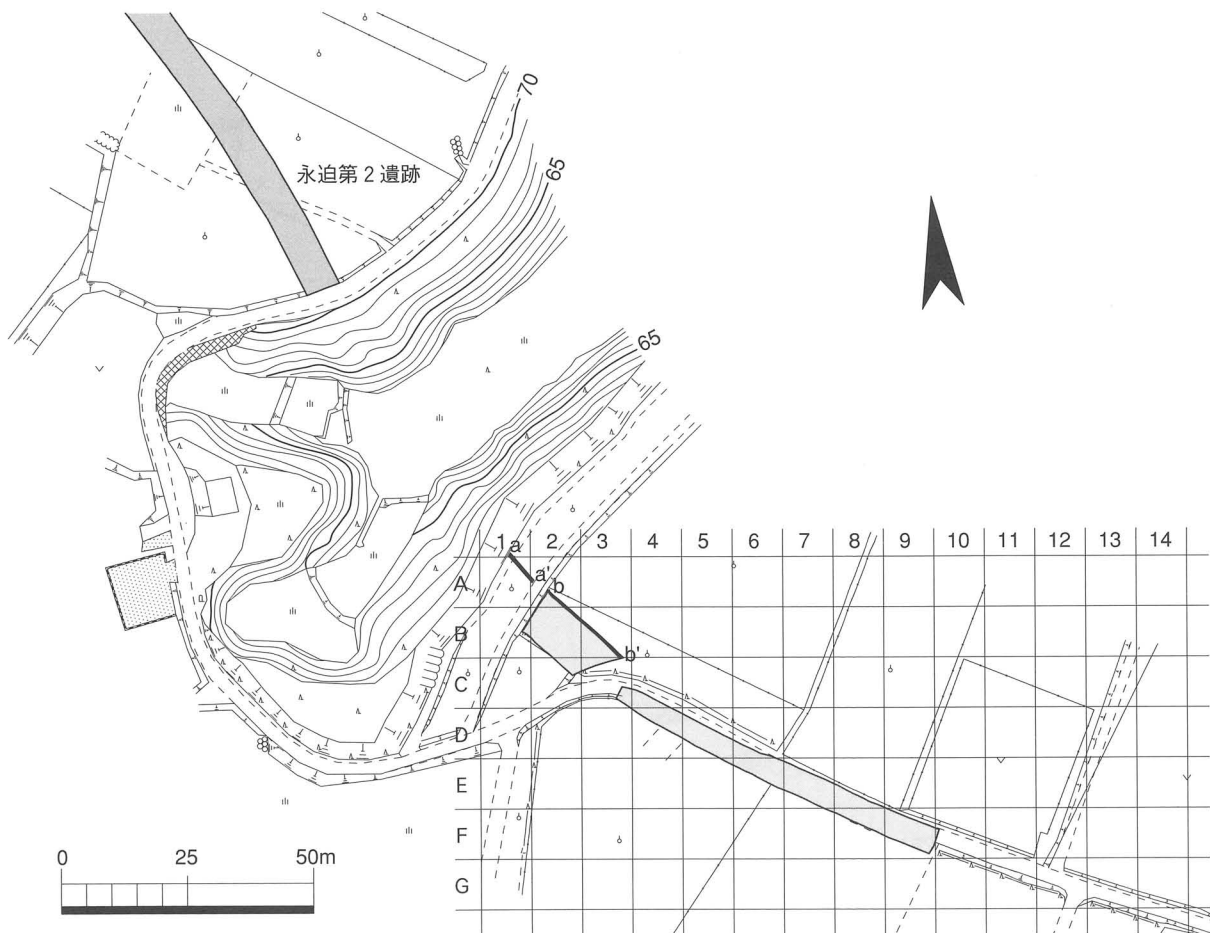
第Ⅲ章 第3地点の調査

永迫第1遺跡第3地点は、永迫第2遺跡と谷を挟んで南東側に位置する。堆積状況は良好で、第67図で示すように北西方向へ緩やかに下り傾斜する。

谷付近の堆積状況は悪く、a-a'間の調査は幅約1mのトレンチ調査で終了した。第66図のトーン部を最深XⅢ層まで掘削を行なった。

その結果、下記の四文化層が確認された。

時期	火山灰	遺構	遺物
縄文前期 (Ⅱ層)		落とし穴状遺構 4基	曾畑式土器
	アカホヤ火山灰		
縄文早期 (Ⅲ・Ⅳ層)			平椀・塞ノ神式土器
縄文早期～ (Ⅴ・Ⅵ層) 旧石器時代終末期 後期旧石器時代後半	小林軽石	落とし穴状遺構 2基	縦長剥片 剥片尖頭器
	始良Tn火山灰		
後期旧石器時代前半 (Ⅸ層)	始良深港火山灰	礫群	搔器
	始良大塚火山灰		

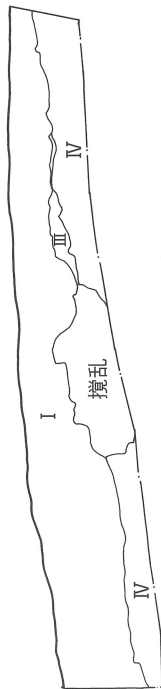


第66図 第3地点周辺地形図

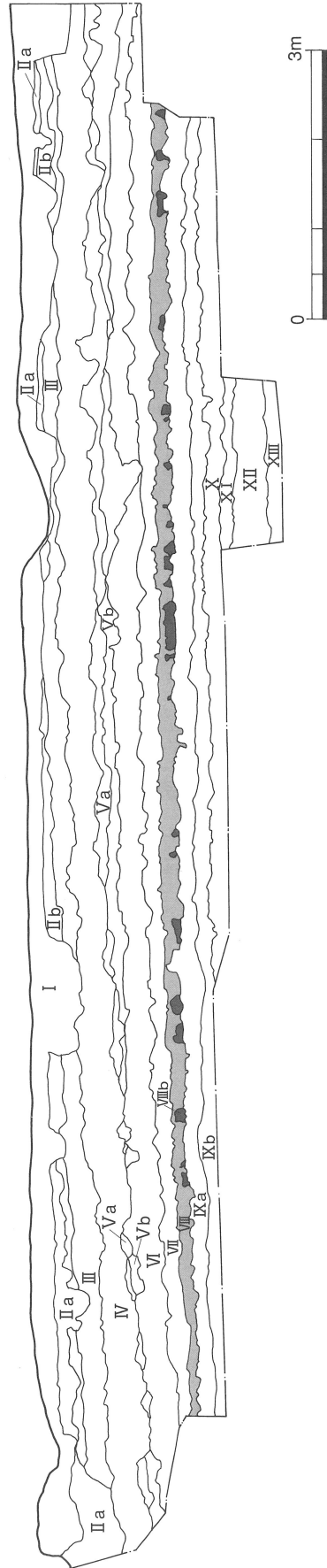
第3地点土層図

- I 層：表土
- IIa層：アカホヤヤ火山灰2次堆積層 (明褐色7.5YR5/8) 縄文時代前期包含層
- IIb層：アカホヤヤ火山灰層 (明褐色7.5YR5/8)
- III層：牛のすねローム層 (2.5YR1/3) 縄文時代早期包含層
- IV層：黒褐色粘質土 (5YR1/3)
- V層：小林軽石混土層 Va層、Vb層に分層できる。
- Va層：粘質土層 (にぶい褐7.5YR5/3) 1~5cm程度の暗緑灰色ブロック含む
- Vb層：粘質土層 (にぶい褐7.5YR7/4) 5~10cmの硬く締まったブロック含む
- VI層：にぶい黄褐色粘質土 (10YR7/4) 水分を多く含む粘性が強い
- VII層：始良Tn火山灰風成層 (にぶい褐7.5YR5/4) 後期旧石器時代後半期包含層
- VIII層：始良Tn火山灰層 VIIIa層、VIIIb層に分層できる。
- VIIIa層：VII層に比べ粒子が粗く砂状。暗灰色土 (N3) をまだらに含みややくすんだ部分がある。
- VIIIb層：ブロック状に間層した状態で堆積する。粒子は粗いがVIIIa層よりも細かい。
- IX層：黒褐色粘質土 (7.5YR3/1) IXa層、IXb層に分層できる。始良深港火山灰含む
- IXa層：5mmの褐色粒多量、1mm以下の橙色粒少量、1mm程度のガラス質灰白色粒含む
- IXb層：a層の褐色粒は少なく、灰白色粒を多量に含む。橙色粒僅かに含む。後期旧石器時代前半期包含層
- X層：暗褐色粘質土 (7.5YR3/3) IXb層の黒褐色粘質土がまだらに混じり硬く締まる。にぶい褐色粒をIXb層と同程度含む。
- X層：褐色粒を僅かに含む。灰白色粒をIXa層と同程度含む。
- XIa層：黒褐色粘質土 (7.5YR3/1) 5mm程度の赤褐色粒を極僅かに含む。1mm以下の白色のガラス質粒がX層より多く含まれる。
- XIb層：褐色粘質土 (7.5YR4/3) 1mm以下の赤褐色粒含む。1mm以下の灰白色ガラス質粒をIX層より多く含む。1mm以下の褐色粒を僅かに含む。
- XII層：始良大塚火山灰層 明黄褐色粒 (10YR6/6) F9グリッド付近で確認。
- XIII層：霧島アワオコシ風成層 赤褐色土 (5YR4/6) 粘性を帯びるが非常に硬く締まる。

a 75.0m



b 75.0m



第67図 第3地点土層断面図

第1節 IX層の調査

始良Tn火山灰層下位の調査である。IX層では、礫群1基が検出された。遺物は石器1点が出土したため、周囲を拡張して調査を行なったが、遺物は確認されなかった。礫群の周囲をXIII層まで掘削したが、遺構・遺物は確認されなかった。

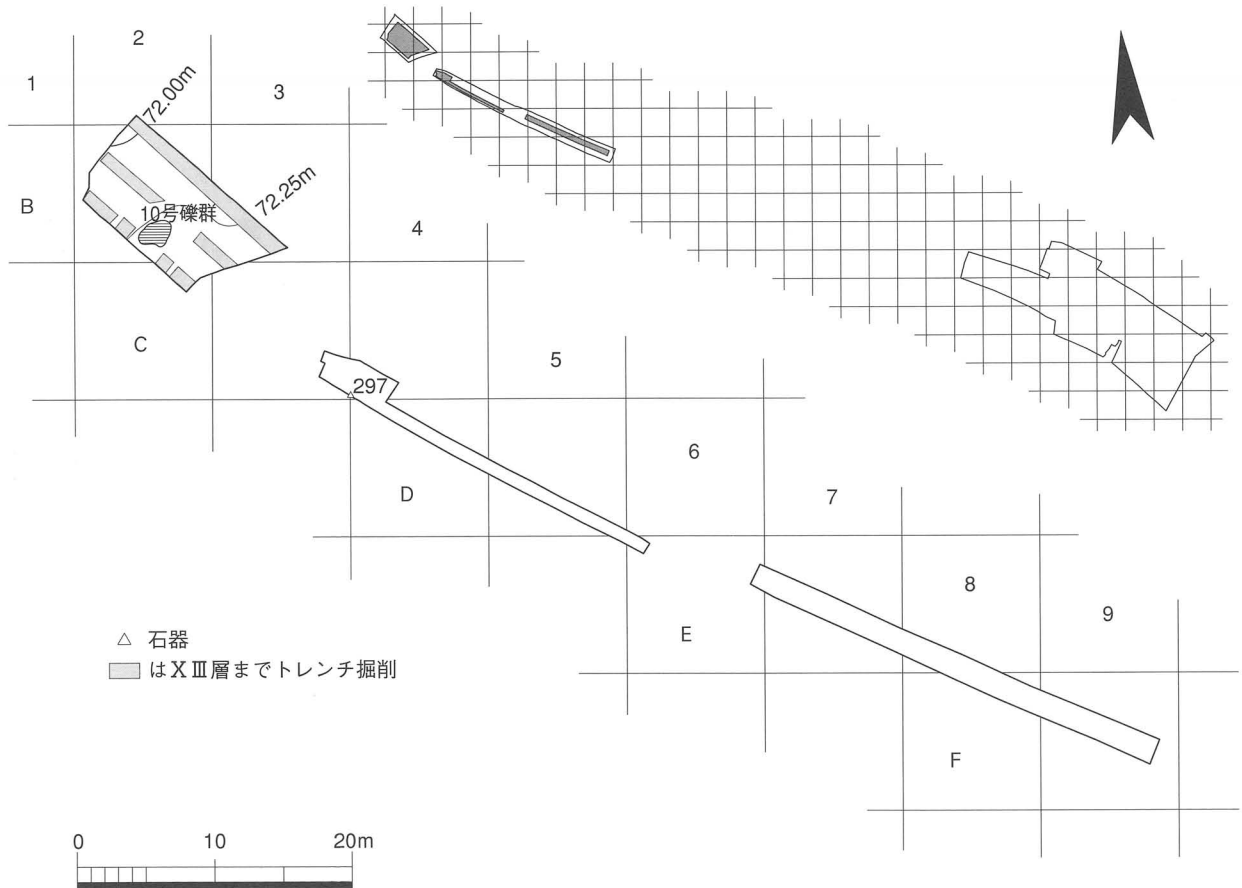
10号礫群

B2グリッドで検出された。堆積状況の良くない地点ではあったが、始良Tn火山灰が礫群の石の間に入り込んだ状態で検出され、始良Tn火山灰降灰直前の所産である可能性が高い。

平面形は、縦1.5m横2.5mの範囲にほぼ分布する。礫を除去後掘り込みの有無を確認したが、周囲に比べ若干黒くしみ状に見える部分（トーン部）はあったものの、掘り込みは確認されなかった。礫群の中央やや左寄り、礫が縦方向に組まれた状態で検出された。本来はこの部分を中心に配列されていた礫群が崩壊した可能性が考えられる。礫90点と剥片1点で構成される。剥片は、縦長剥片で石材は流紋岩である。礫の総重量は25,676g、すべて砂岩である。完形礫22点を含む。大半の礫が赤化している。接合作業の結果、58点18個体が礫群内で接合した。

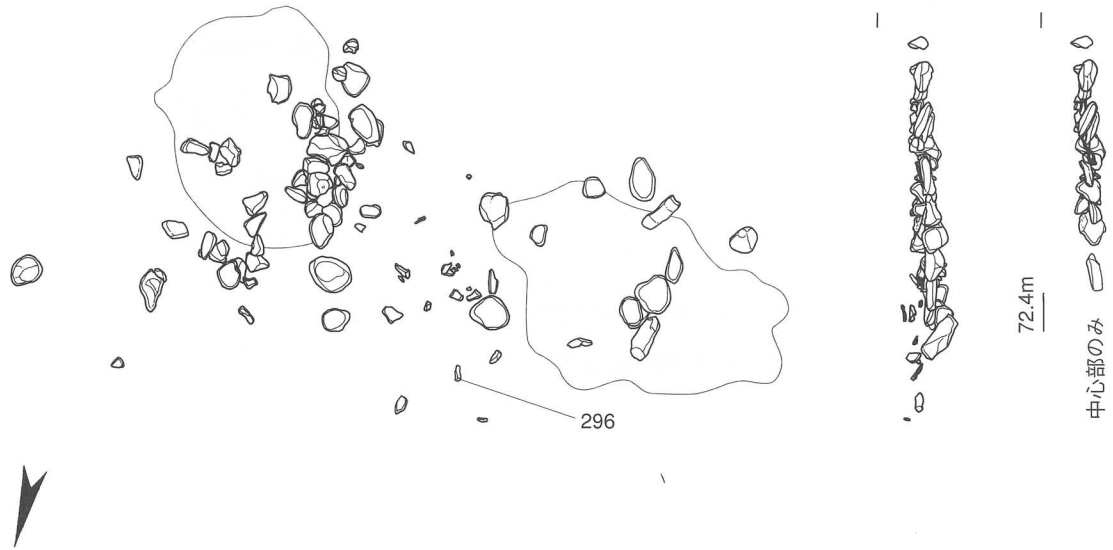
遺物

297は流紋岩系石材の搔器である。厚めの縦長剥片の下縁部に二次加工が施される。左側面は礫面が残る。



第68図 IX層遺構配置図・遺物分布図

10号礫群



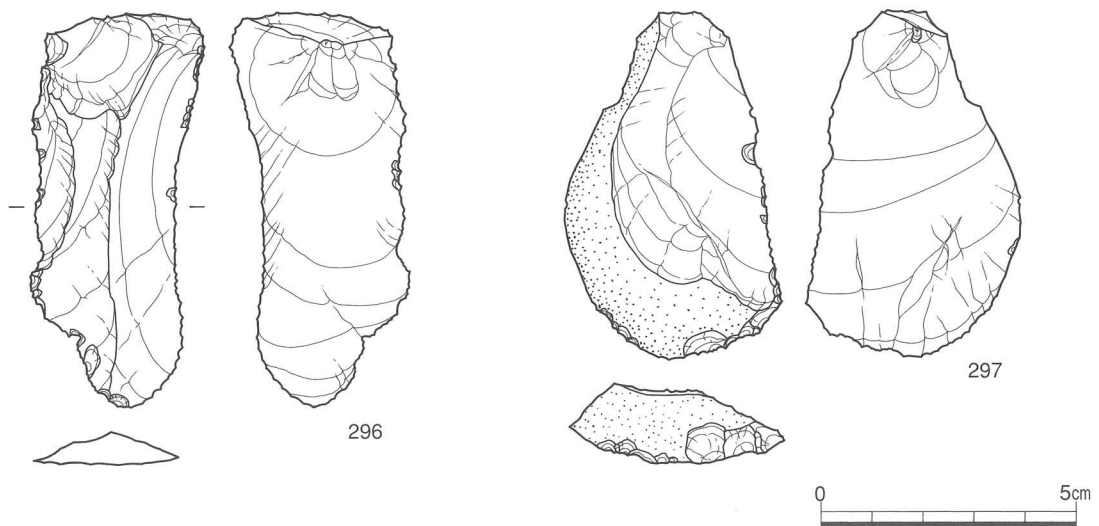
しみ状（トーン）の部分 黒褐色を呈し、周囲と比べ粒子が粗く水分が少なくぼそぼそして粘質が弱い。



第69図 Ⅸ層遺構実測図

10号礫群内

Ⅸa層



第70図 Ⅸ層遺物実測図

第2節 V・VI層の調査

V層小林軽石混土層とその下層のVI層粘質土層の調査である。遺構は、V層中で土坑2基が検出された。遺物はV層およびVI層から出土した。B2-3グリッドでのみ確認された。

遺構

22号土坑

F9グリッドで検出された。Va層堆積以前の所産である。平面形状は長軸1.1m + a 短軸0.9m + a の楕円形である。床面は長軸0.9m短軸0.6m n 楕円形を呈し、中央に深さ0.15mの小ピットを有する。断面形状は床面から直角に立ち上がり上部はやや開く。土坑の深さは1.85mである。床面はXⅢ層まで掘り込まれている。埋土は1層に小林軽石を多量に含む。下位は始良Tn火山灰やIX層に似た土壤が堆積しており壁の崩落が考えられる。また、壁際には軟らかい土壤が確認される。22号土坑はVa層以前の所産と確認された唯一の土坑である。詳細な時期を確認する目的で、Va層とVb層の小林軽石の違いについて土壤分析を行なった。また、埋土の1, 2, 14層で火山灰分析を行なった。

23号土坑

B2グリッドで検出された。平面形状は長軸1.85m短軸1.3mの隅丸方形を呈する。床面は長軸1.1m短軸0.5mの隅丸方形である。アワオコシ層まで掘り込まれており、床面は凹凸が確認された。工具痕跡の可能性が考えられる。小ピットはない。土坑の残深は2mで、断面形状は床面から屈曲してやや開き気味に立ち上がる。上部はラッパ状に開く。埋土は下半部は非常に硬く締まっている。

遺物 (第74図)

VI層石器

流紋岩系

298は剥片尖頭器である。縦長剥片を素材とし、基部加工が施される。稜は左寄り、刃部にあたる右側縁部に二次加工が施される。刃部再作出の可能性もある。301~303は二次加工剥片である。いずれも縦長剥片素材である。301は基部付近に二次加工が施される。剥片尖頭器を意識したものか?。302は裏面右側縁部に二次加工が施される。303は基部付近とわずかに側縁部に微細な二次加工が施される。304は微細剥離ある剥片である。

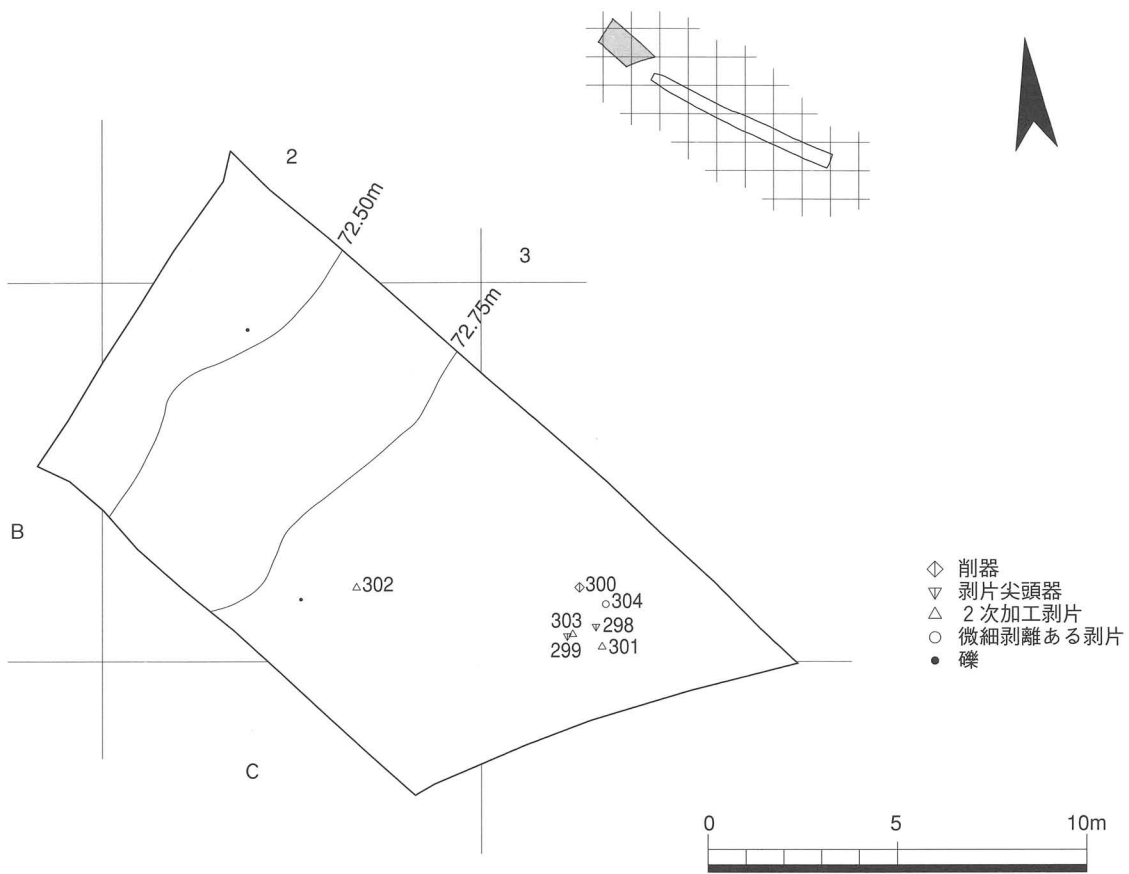
砂岩

299は剥片尖頭器である。礫面を打面として剥離した縦長剥片素材で、基部加工が施される。300は削器である。縦長剥片素材。右側縁部に連続的な二次加工が施される。石清水型削器に相当すると思われる。取り上げ時に中央で摂理により折れてしまった。

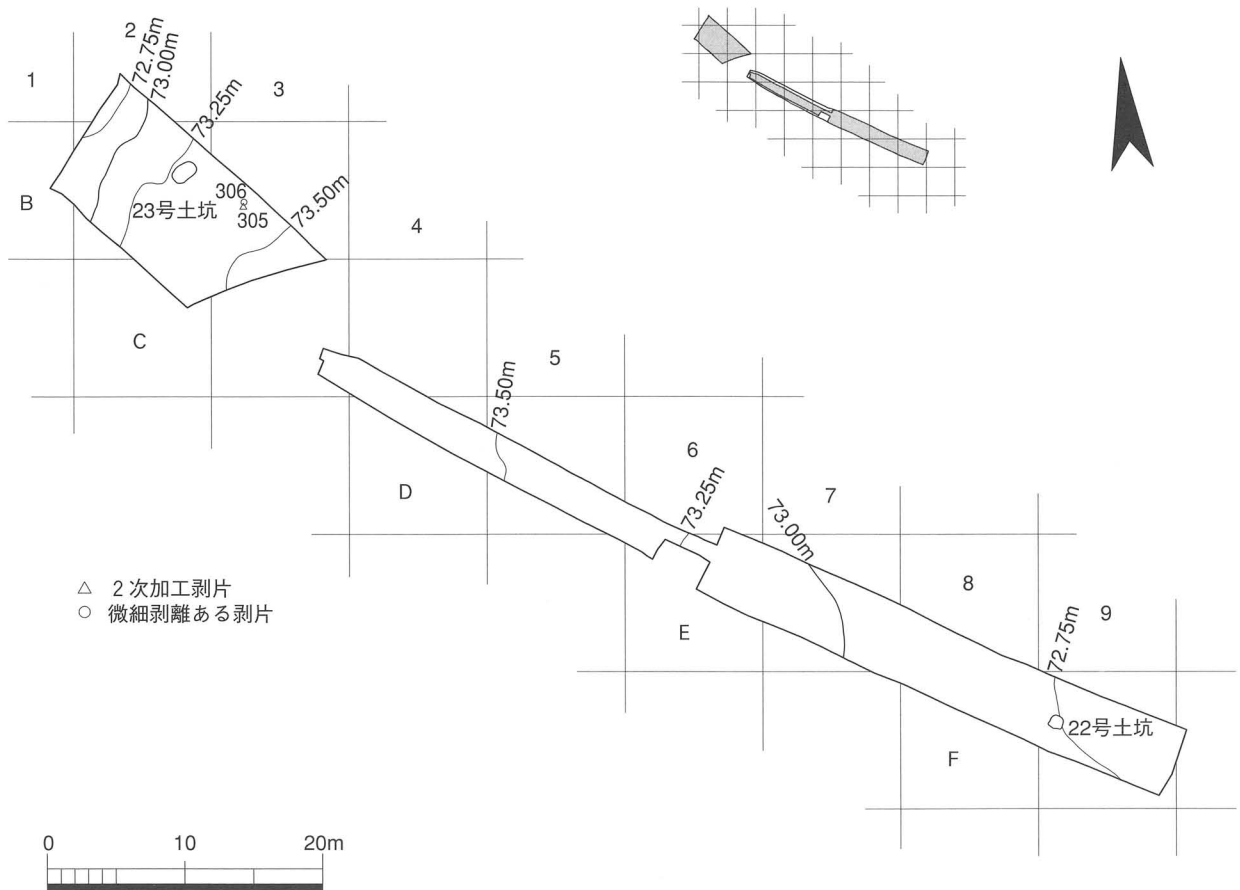
V層石器

流紋岩系

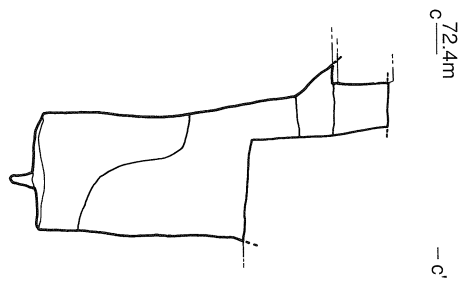
305は縦長剥片素材の二次加工剥片である。裏面右側縁部に二次加工が施される。306は微細剥離ある剥片である。



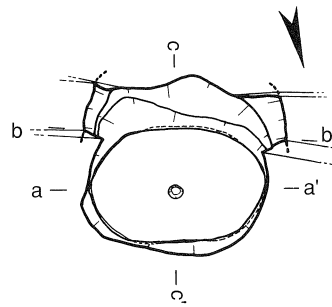
第71図 VI層遺物分布図 (石器器種別)



第72図 V層遺構配置図・遺物分布図

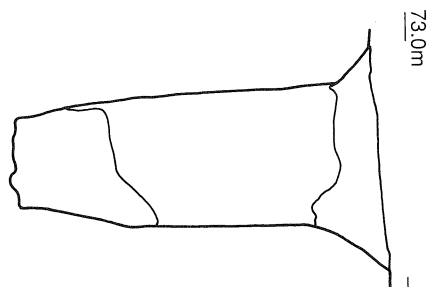
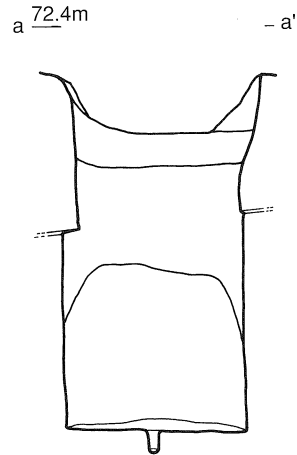
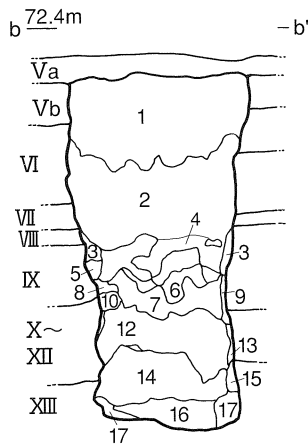


22号土坑

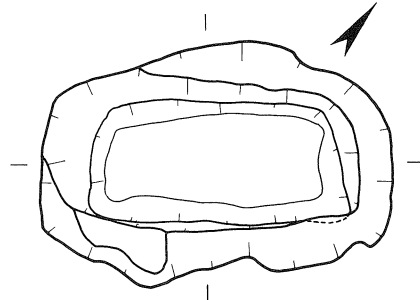


22号土坑

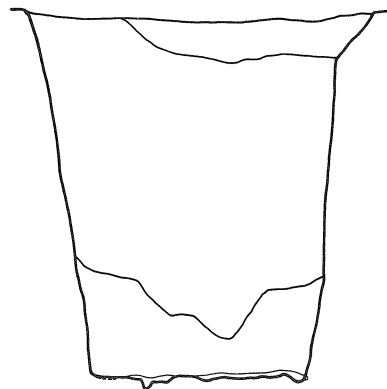
- 1 橙色土 2 橙色土 3 橙色土
- 4 にぶい褐色土 5 赤灰色土
- 6 橙色土 7 暗灰色土
- 8 暗緑灰色土 9 暗緑灰色土
- 10 暗灰色土 11 暗灰色土
- 12 浅黄色土 13 浅黄色土
- 14 暗灰色土 15 暗緑灰色土
- 16 にぶい橙色粘質硬質土
- 17 浅黄色粘質土



23号土坑

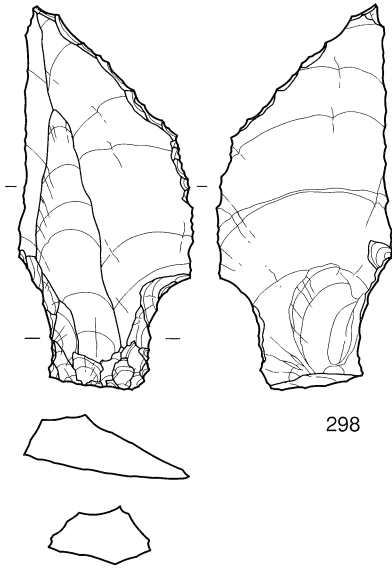


73.0m

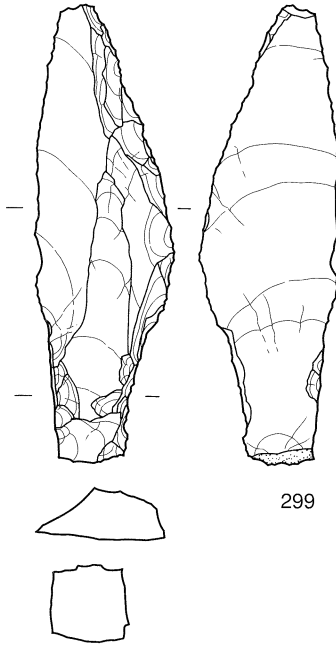


第73図 V層遺構実測図

VI層



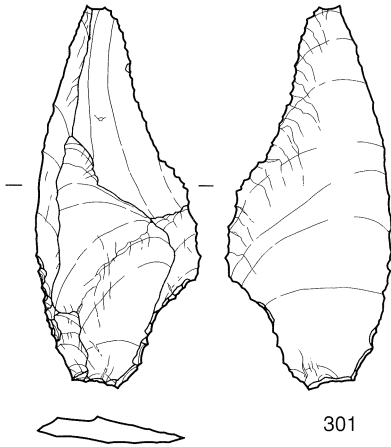
298



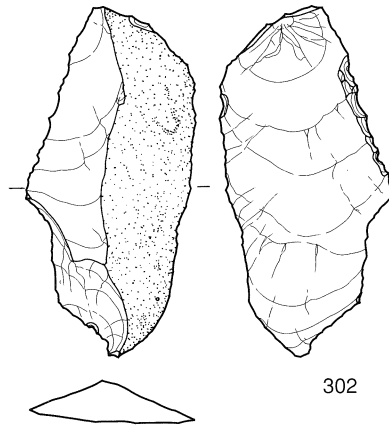
299



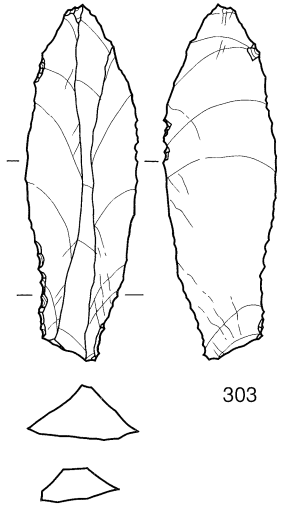
300



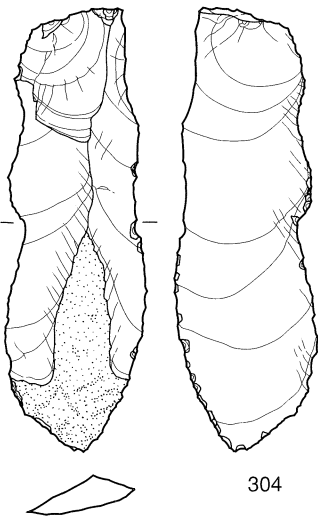
301



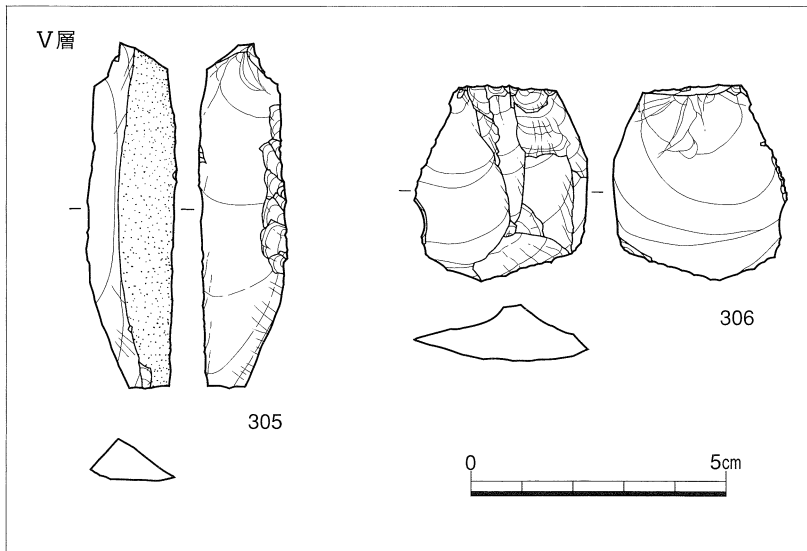
302



303



304



第74図 V・VI層遺物実測図

第3節 III・IV層の調査

縄文早期相当層である。土器・石器・礫が出土した。礫は95%以上が赤化していた。遺物・礫はB2グリッド、D4グリッドで多出土したが、集石遺構や土坑などの遺構は検出されなかった。

遺物

〈土器〉

B2グリッド、D4グリッドで多く出土した。

押型文 (307)

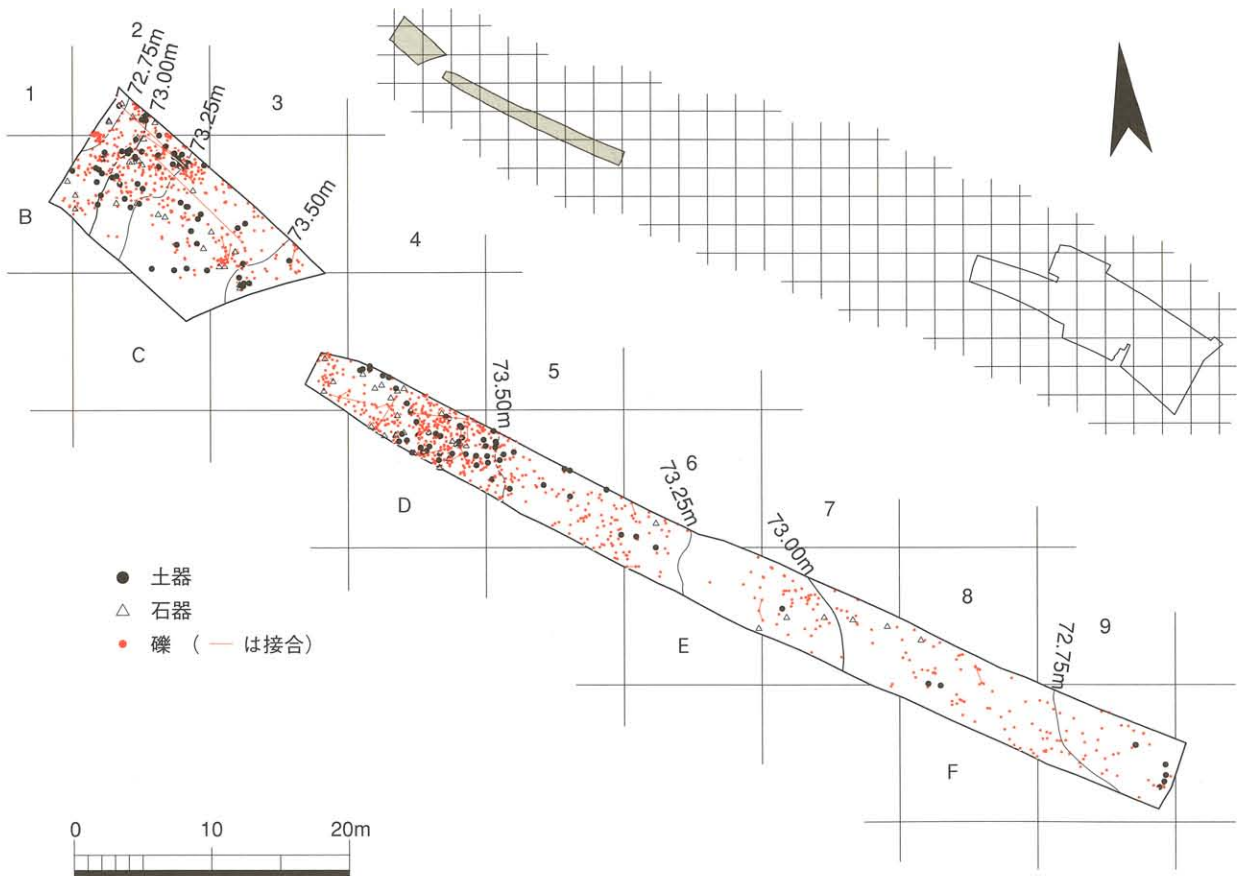
I類 (307)

外反する口縁部に、外面は縦方向の大振りな山形文、内面は横方向の山形文を施文する。手向山式にみられる山形文に似るが、全体の器形は不明である。

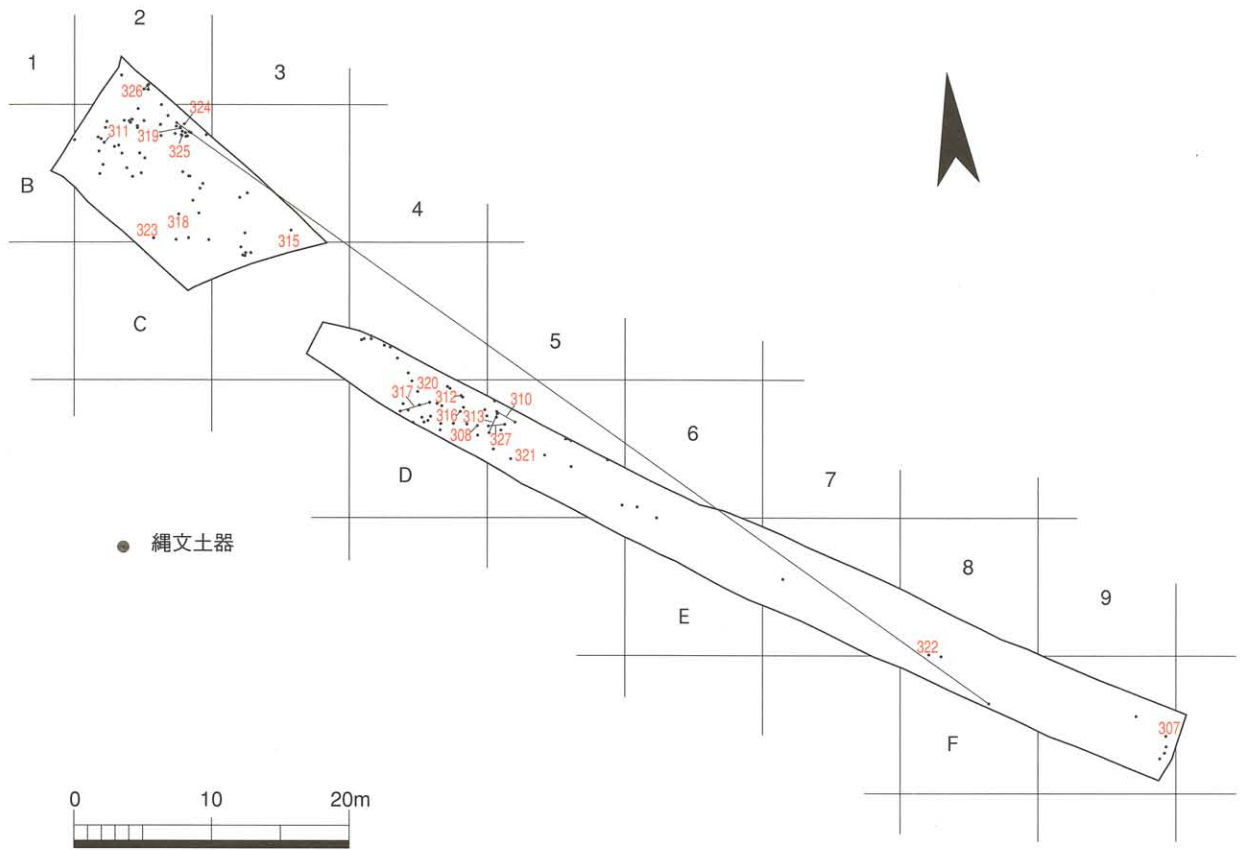
貝殻文・条痕文 (308~328)

II類 (308~325)

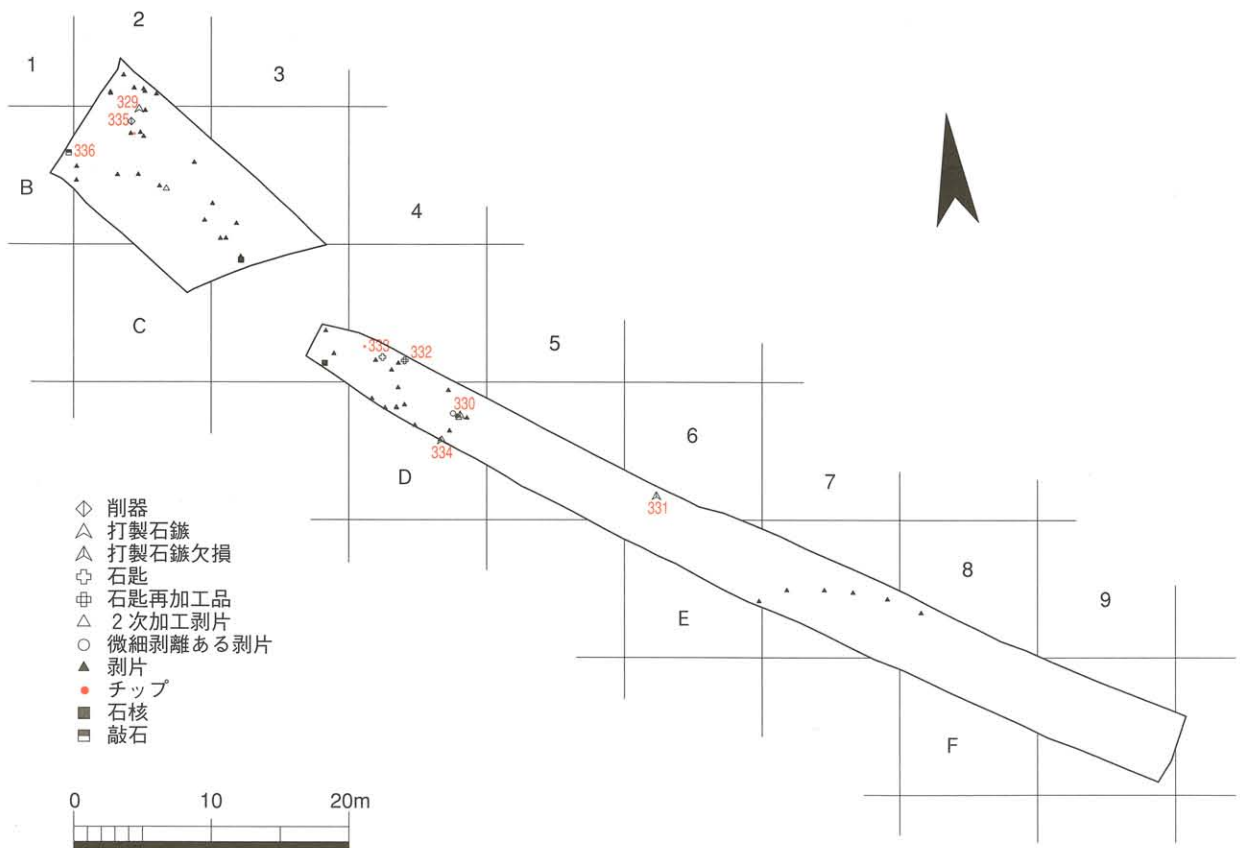
1 (308) 外反する口縁部から頸部にかけて連続刺突が施された隆起帯を巡らす。口縁部外面の地紋はナデ調整のみである。



第75図 III・IV層遺構配置図・遺物分布図



第76図 III・IV層遺物分布図（土器）



第77図 III・IV層遺物分布図（石器器種別）

- 2 (309) 口縁部が肥厚し、外面に斜方向の貝殻復縁連続刺突文を施す。
- 3 (310) 外反する口縁部で連続刺突文と凹線文を施す。口唇部は連続刻目を施す。
- 4 (311～314) 311は口縁部に刻目を施した微隆起帯を巡らせる。312は刻目を施した微隆起帯の下に凹線文を巡らせている。314は口縁上端部に刻目を施し、横方向に凹線文を巡らせる。
- 5 (315～319) 315と316は網目状撚糸文を施す。317は縦方向に撚糸文を施す。何れも無紋帯を設けている。318と319は口縁部に縦線状の撚糸文を施す。
- 6 (321、322) 322は外反する口縁部で、外面と口唇部に同じ原体の貝殻連続刺突文を施す。
- 7 (320、323～325) 320は凹線文を巡らせ口縁上端部に刻目を施す。323～325は二重口縁の形状になるものである。323は頸部に凹線文を施す。325は無紋で、口縁部は山形を呈する。

Ⅳ類 (326～328)

326～328は口唇部に連続刻目を施す。326は鎌石橋式で、外面に櫛描状の条痕を斜方向に交差するように浅く施文する。327は条痕が丸みを持つ。

〈 石 器 〉

多久産サヌカイト

329は打製石鏃である。

姫島産黒耀石

330・331は打製石鏃である。いずれも欠損品である。332は石匙の再加工品である。折損面を打面として二次加工が施される。

チャート

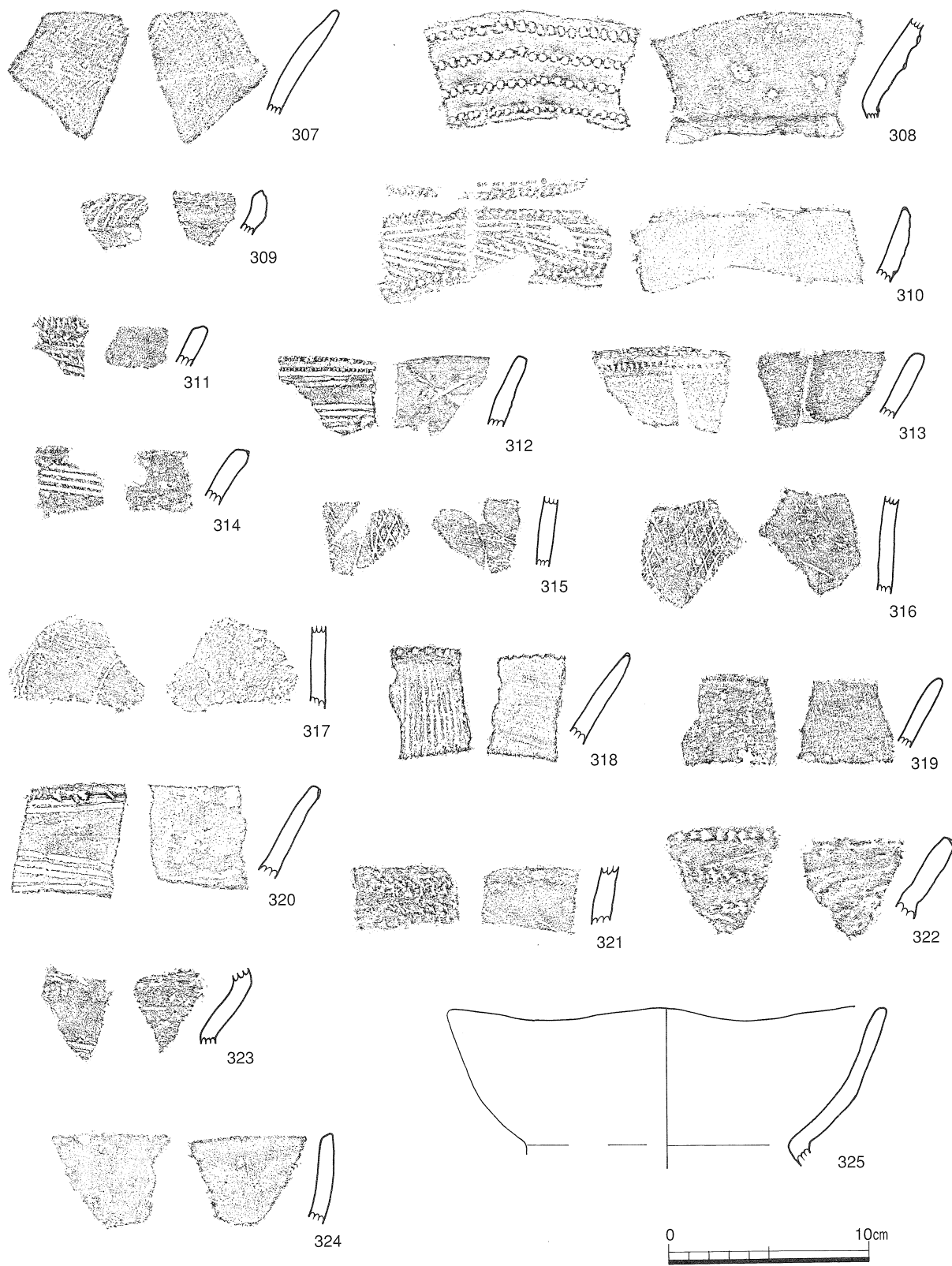
333は黒色チャート製の石匙である。抉り部が明瞭でない。未製品か？

流紋岩系

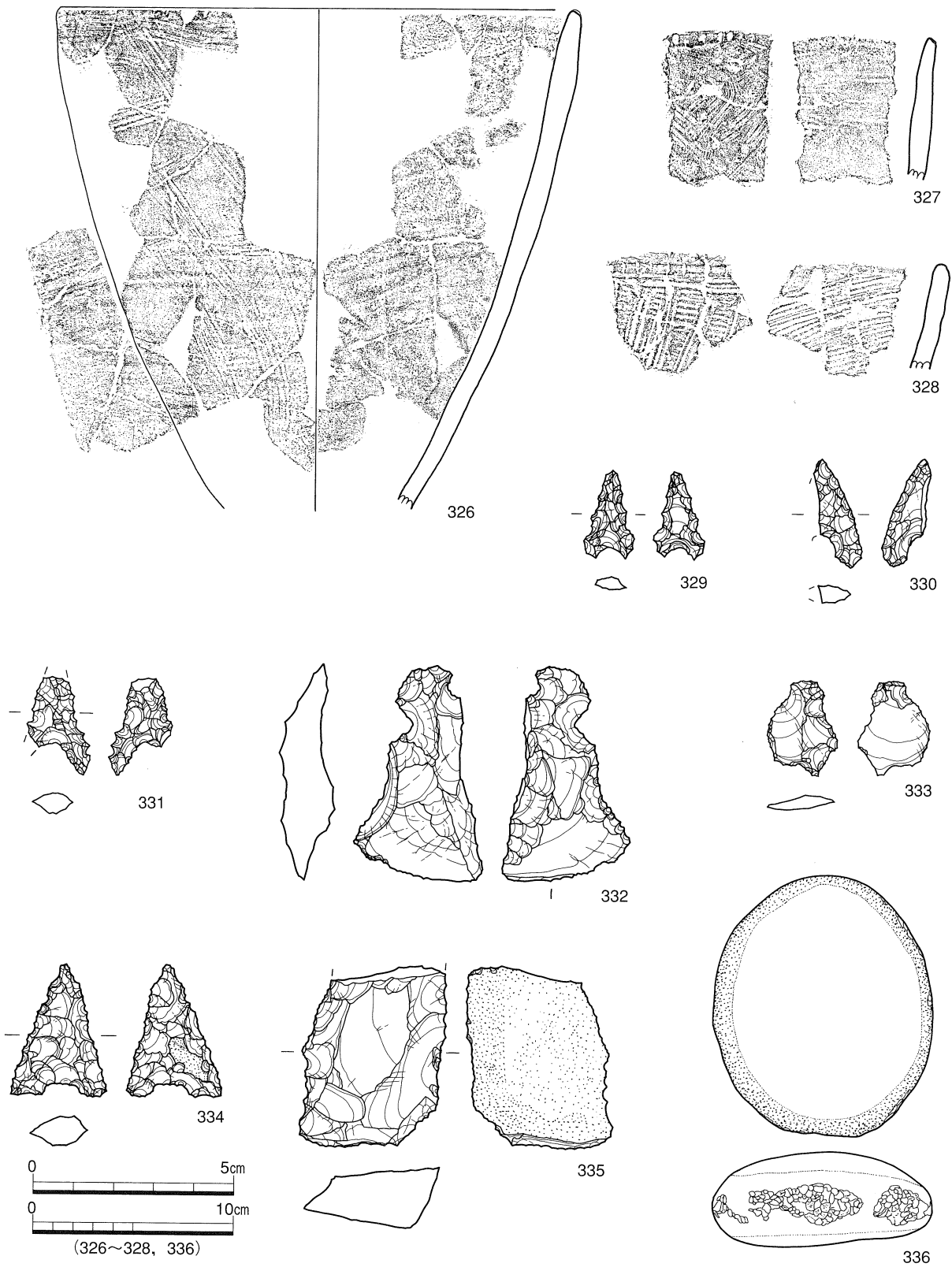
334は打製石鏃である。335は削器で、左側縁部に二次加工が施される。上端が欠損している。

砂岩

336は敲石である。周縁部に敲打痕が確認される。



第78图 Ⅲ·Ⅳ層遺物実測図



第79图 Ⅲ・Ⅳ層遺物実測図

第4節 II層の調査

縄文前期以降の包含層である。遺構は土坑4基が検出された。そのうち3基は調査区外に続いている。

遺構

24号土坑

F9グリッド調査区壁際で検出された。樹痕によって攪乱を受けているため、IV層掘削後の検出となってしまった。平面形状は楕円形もしくは円形である。床面には3つの小ピットが確認された。土坑の深さは0.9mである。断面はやや開き気味に立ち上がる。埋土にアカホヤ火山灰を含む。

25号土坑

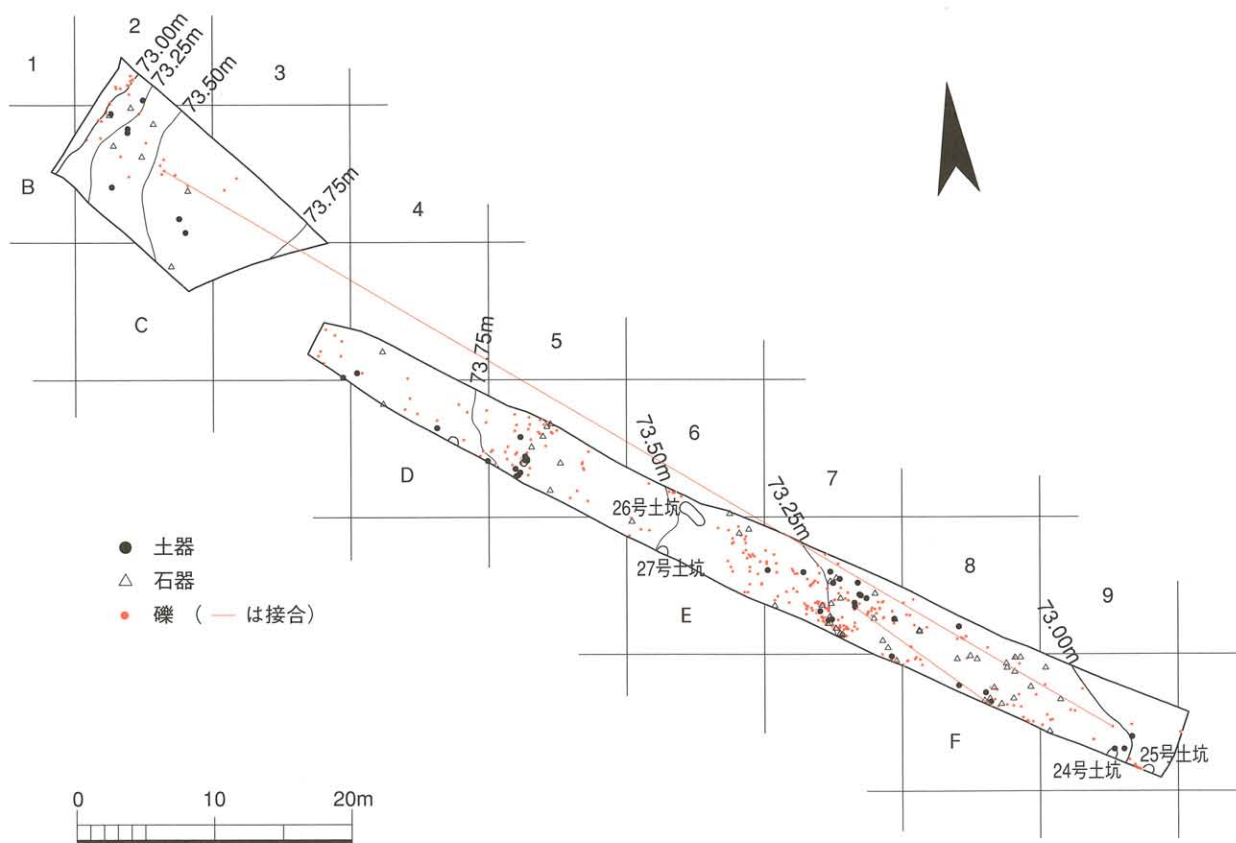
F9グリッド調査区壁際で検出された。24号同様樹痕による攪乱を受け検出が困難であった。平面形状は楕円形もしくは円形である。土坑の深さは0.9mである。やや開き気味に立ち上がる。埋土にアカホヤ火山灰を含む。

26号土坑

D6グリッドで検出された。平面形状は、長軸2m短軸0.85mの隅丸長方形を呈する。床面は長軸2m短軸0.3mの長方形で、長軸上に深さ0.2mの小ピットを5つ有する。断面形状はオーバーハングし、土坑の残深は1.05mを測る。埋土上位から腰岳産黒耀石製打製石鏃(352)が出土したが遺構に伴うかは不明。

27号土坑

E6グリッド調査区壁際で検出された。樹痕による攪乱を受けている。平面形状は楕円形もしくは円形である。土坑の深さは1.2mである。埋土は橙色粘質土でブロック化している部分もある。下位は粘質が高くなる。埋土中位から姫島産黒耀石打製石鏃(353)が出土したが遺構に伴うかは不明。



第80図 II層遺構配置図・遺物分布図